博士学位論文

日本語動詞の時間的限定性とアスペクト・テンス形式

―運動を表さない動詞を中心に―

平成 29 年 9 月

呉　揚

岡山大学大学院
社会文化科学研究科

目　次

第一部　序論

第 1 章　はじめに

1. 本研究の目的…… 2
2. 現代日本語のアスペクト・テンス研究の流れ…… 3
   2.1 要素主義的アプローチから体系的アプローチへ―金田一（1950）と奥田（1977）― …… 3
   2.2 体系・機能的アプローチ―工藤（1995）― …… 4
   2.3 時間的限定性・ムード・テンス・アスペクト体系という視点―工藤（2014）― … 7
3. 本研究の位置づけ …… 9
4. 研究の方法 …… 10
5. 本研究の構成 …… 11

第 2 章　時間的限定性の観点から見た日本語動詞

1. 本章の目的 …… 13
2. 「時間的限定性」とは何か …… 13
   2.1 時間的限定性のスケールと述語の意味的なタイプ …… 13
   2.2 時間的限定性とムード・テンス・アスペクト体系 …… 15
3. 時間的限定性に関連する概念 …… 18
   3.1 the scale of temporal stability―Givón（2001）― …… 18
   3.2 物がたり文・品さだめ文―佐久間鼎（1941）― …… 20
   3.3 叙述類型―益岡隆志（1987・2008）― …… 21
   3.4 命題の意味的類型―仁田義雄（2001・2012・2016）― …… 23
4. 時間的限定性の研究課題 …… 24

第二部　状態動詞のアスペクト・テンス形式

第 3 章　日本語の《状態》《状態動詞》再考

1. はじめに …… 27
2. 問題の提起 …… 27
3. 研究立場の概観 …… 28
4. 金田一（1950）などにおける《状態動詞》 …… 28
5. 寺村（1984）などにおける《状態》 …… 30
6. 奥田（1988・1994・1997）などにおける《状態》《状態動詞》…… 33
   6.1 奥田氏の考え …… 33
   6.2 仁田（2001・2012・2016）の考え …… 39

7. 《状態》《状態動詞》再考 …… 41
7.1 《状態》の意味特徴 …… 41
7.2 日本語の《状態動詞》の外延 …… 45
8. おわりに …… 46

第 4 章　感情・感覚・知覚を表す状態動詞のアスペクト・テンス対立とムード

1. 本章の目的 …… 47
2. 問題の提起 …… 47
3. 調査対象および調査方法 …… 48
4. 感情・感覚・知覚を表す状態動詞の典型的な MTA 体系 …… 49
4.1 典型的な MTA 体系の概観 …… 49
4.2〈確認・記述文〉の場合 …… 50
4.3〈表出文〉の場合 …… 52
5. 典型的な MTA 体系からの逸脱 …… 53
5.1 スル形式もシタ形式も〈表出〉を表すもの …… 53
5.1.1〈確認・記述文〉の場合 …… 54
5.1.2〈表出文〉の場合 …… 55
5.2 スル形式が〈表出〉を表さないもの …… 57
5.3 アスペクト・テンス対立が欠けているもの …… 60
5.4 アスペクト・テンス形式の意味が特殊化されるもの …… 61
6. 結論 …… 63

第三部　特性動詞のアスペクト・テンス形式

第 5 章　特性動詞のアスペクト・テンス形式と構文論的機能

1. 本章の目的 …… 66
2. 問題の提起 …… 66
3. 先行研究 …… 67
4. 所属動詞一覧と下位分類 …… 68
5. 調査結果の概観 …… 69
5.1 特性動詞の連体用法と終止用法の使用実態 …… 69
5.2 連体用法と終止用法におけるアスペクト・テンス形式の分布 …… 70
6. 終止用法における特性動詞のテンス・アスペクト形式の意味・機能 …… 70
7. 連体用法における特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能 …… 74
8. 結論 …… 80

第四部　空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式

第 6 章　空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式とテクスト

1. はじめに …… 82
2. 空間的配置動詞はどのように扱われてきたか …… 82
3. 空間的配置の類型と所属動詞 …… 85
4. テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の分布 …… 89
　4.1 調査対象となるテクストタイプ …… 89
　4.2 調査結果の概観 …… 91
5. テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能
　―「そびえる」を中心に― …… 92
　5.1 先行研究 …… 92
　5.2 テクストにおける「そびえる」のアスペクト・テンス形式の分布 …… 93
　5.3 非体験的ノンフィクションのテクスト―地誌論述文― …… 94
　　5.3.1 完成相スル形式 …… 94
　　5.3.2 継続相形式 …… 96
　5.4 体験的ノンフィクションのテクスト―紀行文・ルポルタージュ― …… 98
　　5.4.1 継続相形式 …… 98
　　5.4.2 完成相スル形式 …… 101
　5.5 フィクションのテクスト―小説の地の文の解説部分― …… 102
　5.6 フィクションのテクスト―小説の地の文の外的出来事提示部分― …… 103
6. 考察結果のまとめ …… 104
7. おわりに …… 105

第五部　結論

第 7 章　おわりに

1. 本研究が明らかにしたこと …… 108
2. 今後の課題 …… 110

本研究に使用した資料一覧 …… 111
参考文献 …… 112

第一部

序　　論

第１章
はじめに

1. 本研究の目的

本研究の目的は、「時間的限定性」の観点からの述語の意味のタイプ化にもとづき、《運動》を表さない非典型的な日本語動詞について、それらの動詞におけるアスペクト・テンス形式の分布の調査とその意味・機能についての考察を行うことによって、運動動詞を中心に展開してきたこれまでの日本語動詞論に新たな方向性を与え、その発展に寄与するとともに、形容詞述語や名詞述語を含む日本語の述語論への道筋をつけることである[注1]。

戦後の日本語動詞のアスペクトの研究は、金田一（1950）によってシテイル形式という要素の研究として始まった。その後、アスペクトはスル（完成相）とシテイル（継続相）の対立からなること、アスペクトとテンスは統一していること、また、アスペクト、テンス、ムードは三位一体の関係にあることを重視する体系主義の研究が、奥田（1977）によって始められた。そして、工藤（1995）によって、アスペクト・テンス体系はテクスト的機能の観点から再検討され、体系・機能主義的なアプローチの段階へと発展した。さらに、工藤（2014）では、ムード・テンス・アスペクトの一体性が確認され、体系主義的なアプローチ自体も大きく前進した。これらの研究は、《運動》（「破る」など）を表す典型的な動詞を中心として、日本語動詞ムード・テンス・アスペクト体系の中核的な部分を明らかにしたと言える。

一方、日本語には、《運動》を表さない動詞――《状態》（「痛む」）《存在》（「ある」）《特性》（「優れている」）　《関係》（「共通する」）を表す動詞――も多数存在している。これらの動詞は《運動》を表さないことから、アスペクトがなく、また、《特性》や《関係》といった時間的限定性のない事象を表す動詞には、テンスがない。つまり、これらはテンス・アスペクト体系を考察するうえでは対象にはならない。しかし、これらの動詞についても、スルをとるかシテイルをとるかが問題となり、その選択原理を説明する必要がある。たとえば、「共通する」のような《関係》を表す動詞は、スル形式（共通する）と

注1　運動、状態、存在、特性、関係、質、空間的配置などの時間的限定性にもとづく述語の意味的なタイプは、《》を使って表記する。動詞の表す一般的な文法的な意味（ムード・テンス・アスペクト的意味）と機能については、〈〉で表記する。たとえば、次のように用いる。「《運動》を表す動詞「破る」のシタ形式の表すアスペクト・テンス的な意味は、〈過去の完成性〉である。」

シテイル形式（共通している）のいずれの形でも使用され、違いがないとされているが、だとすれば、なぜ 2 つの形式が必要なのか、本当に使い分けがないのか、といったことを追究すべきである。また、「そびえる」という動詞にはスル形式がないと言われていたが、これは事実に反している。この動詞についても、スル形式シテイル形式の選択が問題となるのである。また、「痛む」「疲れる」などの《内的情態》を表す動詞については、《運動》を表す動詞とは、ムード的な側面が異なっている。このことはすでに指摘があるが、《内的情態》を表す動詞の全体像をムード・テンス・アスペクト体系の観点から記述したものはまだない。

《運動》を表さない動詞は動詞らしくない動詞ではあるが、なぜそのような動詞らしくない動詞が大量に存在するのか、それらが表す意味が形容詞や名詞によってではなく、わざわざ動詞によって表されることにはどのような理由があるのかなど、解明すべきことは多く残されている。本研究は、それらの課題にアプローチする。

2. 現代日本語のアスペクト・テンス研究の流れ

江戸時代には、古典を読み解くために「てにをは」に関する研究が発達した。明治時代に入り、「てにをは」の研究は助詞・助動詞の研究に発展し、それが文法研究の中心を占めた。一方、ヨーロッパの伝統的な言語学における単語の概念を受け継ぎ、日本語の動詞に形態論的カテゴリーとしてのアスペクト・テンス・ムードを認め、助詞・助動詞ではなく、そうした文法的なカテゴリーを中心に研究する立場が現れ、急速に広がった。

以下では、現在に至る現代日本語のアスペクト・テンス研究の発展過程を略述する。記述にあたっては、工藤（1995）を参考にしている[注2]。

2.1 要素主義的アプローチから体系的アプローチへ
—金田一（1950）と奥田（1977）—

工藤（1995）では、戦後の日本語動詞のアスペクト研究の流れについて、金田一（1950）から出発して、(1)「要素主義的アプローチの段階」、(2)「体系的アプローチの段階」、(3)「体系・機能的アプローチの段階」に分けている。

まず、「要素主義的アプローチの段階」の代表である金田一（1950）では、シテイル形式というアスペクト形式を取り上げて、そのアスペクト的意味を、動詞の語彙的な意味と関連させて捉え、アスペクトの観点による日本語動詞の分類を試みている。この分類は画期的であり、後に広く知れ渡ることとなったが、シテイル形式という要素を対象とした研究であったため、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトを発見することはできなかった。

次に、「体系的アプローチの段階」への道を切り拓いた奥田（1977）では、金田一（1950）に対して、動詞の語彙的な意味と文法的な形式を切り離せないとする方法論上の堅実さを

注2 1970 年代前半までの日本語動詞のアスペクトの研究史を概観したものには高橋（1976）がある。

認めつつ、site-iru というアスペクチュアルな形式のみに注目しており、その「つい」としてのもう一つのアスペクチュアルな形式を追究していないこと、「動作のながさ」を基準とするカテゴリカルな意味の一般化の作業の不成功、テンス・ムードなどの他の文法的カテゴリーとの関係に言及していないことを批判している。金田一（1950）におけるこれらの問題点を解決すべく、奥田（1977）では、site-iru の対立物として、suru というアスペクチュアルな形式を提示し、それぞれ〈継続相〉と〈完成相〉と名づけて、両者は切り離すことのできない有機的な関係の中にあるとした。また、金田一の「継続」「瞬間」に代わって、動詞のカテゴリカルな意味の「動作」「変化」を取り出し、「主体」「客体」の視点を取り入れた。このようにして、次のような、日本語動詞の基本アスペクト・テンス体系のパラダイムが発見された。

アスペクト／テンス	完成相	継続相
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ

工藤（1995）では、奥田氏によって提示されたこの体系的アプローチは、次の点で画期的なものであると評価している。

①現代日本語における、アスペクトという形態論的なカテゴリーの確認、テンスという形態論的なカテゴリーの確認
②アスペクトとテンスの相関性、つまりは〈アスペクト・テンス体系〉の確認
③アスペクトという文法的なものと語彙的なものとの相関性の確認
④アスペクトとヴォイスの相関性の確認
⑤アスペクト・テンス・ムードの三位一体的関係の指摘

（工藤 1995 : 10）

奥田氏の考えを全面的に継承しながら、工藤氏はアスペクト・テンス体系と「テクスト的機能」の相関性を求め、そしてアスペクト・テンス・ムードのあり様を規定する土台である「時間的限定性」との関係の分析をした。これらを通して、日本語のアスペクト・テンスの研究が「体系・機能的アプローチの段階」へと発展した。以下では、この段階の研究として、工藤（1995）、工藤（2014）を取り上げる。

2.2 体系・機能的アプローチ—工藤（1995）—

工藤（1995）では、体系的アプローチの意義を強調しつつ、日本語のアスペクト・テンス研究を次のステップへ進めるには、アスペクト・テンス形式の現実の言語活動（テクス

ト）において果たす機能という視点が必要であるとしている。アスペクト・テンス研究におけるこのようなアプローチの必要性や重要性に関しては、次のように述べられている。

実際、体験したことを話したり文章を読んだりする、現実のコミュニケーション活動において重要なのは、〈出来事間の時間的順序性〉の表現＝理解である。従って、文法的形式の、潜在的な、パラディグマティックな対立関係と、テクスト内の、顕在的な、シンタグマティックな時間関係との法則的なむすびつきに焦点が当たられることになる。

（中略）

第 2 段階の体系的アプローチだけでは、脱場面・文脈化されていて、実際の使用法とのきずなが結べないであろう。が、無媒介的直接的な機能主義では、その場かぎりの解釈におわってしまう。言語体系（文法体系）を媒介とするテクスト的機能へのアプローチ、つまりは、形式・意味・機能の三重の観点からの、アスペクト・テンスへのアプローチが必要な段階に至っているのではないだろうか。

現在の筆者には、アスペクト・テンス体系の追及とテクスト的機能の追及は、切り離すことなく双方向的に行なうことが有効なのではないかと思われる。言語は、目的に応じた機能を果たすために、体系をなしているのであるから。

（工藤 1995:10-11）

「テクスト」について、工藤（1995）では、「実際の使用のなかにある、複数の文の有機的つながり」であると規定し、そこには「言語の使用行為（発話行為）の場との関係」と「複数の文の間の関係」の 2 つの側面があるとしている（p. 19）。そのうえで、テクストにおいてアスペクト・テンス形式の果たす機能について、次のようなことを指摘している。

まず、テンス形式は、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけのある「はなしあい」のテクストにおいて「現実的時間の提示」という referential な機能を果たす。これに対して、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけのない「かたり」のテクストにおいて、「叙事詩的時間の提示」という poetic な機能と、「テクスト内の出来事間の時間関係の提示」という taxis（タクシス）の機能を果たす。また、アスペクトの本質的な機能は、「テクスト内の出来事間の時間関係の提示」という taxis（タクシス）の機能である。

なお、動詞の語彙的な意味における内的時間的限界性と絡み合って、外的運動動詞のアスペクト対立を検討した結果、工藤（1995）では、スルとシテイルの表すアスペクト的意味とテクスト的機能を次の表のように一般化している。

形式	アスペクト的意味	テクスト的機能
スル	〈限界づけられ性＝完成性〉	〈継起性〉
シテイル	〈非限界づけられ性＝継続性〉	〈同時性〉

（工藤 1995：89）

つまり、「運動（動作・変化）を、スルは、時間的限界づけてとらえ、シテイルは、時間的限界を無視して、継続的にとらえる」、そして、「運動の時間的限界をとらえることは、他の運動との継起的時間関係を表す機能とむすびつき、運動の時間的限界を無視して、継続性をとらえることは、他の運動との同時的時間関係を表す機能とむすびついているのである」（工藤 1995：88）。このような対立が、スル―シテイルの典型的なアスペクト対立である。

工藤（1995）では、さらに、アスペクト・テンス形式の多義性を深く考察し、アスペクト的把握とテンス的把握が複合化された〈パーフェクト性〉と、アスペクト的把握と時間的限定性の抽象化が複合化された〈反復性〉という 2 つの意味を派生的なアスペクト意味として認定し、それらのテクスト的機能を検討している。最後に、以上のような考察に基づいて、「アスペクト・テンス形式」と「アスペクト・テンス的意味」と「テクスト的機能」の三者の関係を総合的に捉えて、次のような拡大アスペクト・テンス体系が提示された。

〈アスペクト・テンス体系〉

時間的限定性・ムード ／ テンス　アスペクト	具体的・アクチュアル			抽象的・ポテンシャル
	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性
未　来	スル	シテイル	シテイル	（／）　スル
現　在	／	シテイル	シテイル　シタ	シテイル　スル
過　去	シタ	シテイタ	シテイタ	シテイタ　シタ
	↓	↓	↓	↓
	継起性	同時性	後退性	背景的同時性（説明）

〈テクスト的機能＝タクシス〉

（工藤 1995：161）

このように、工藤（1995）は、奥田氏によって確立された基本体系を基礎としつつ、現実の様々な言語活動との関係において体系を再考し、日本語動詞のアスペクト・テンス体系の新たな見取り図を描き出した。形式、意味、機能の三者が切り離せない関係にあるという考えを踏まえたこのようなアスペクト・テンス体系は、本質的なものではないかと思われる。

ところで、アスペクトという形態論的なカテゴリーは動詞述語のみに存在するのだが、アスペクトと同じように、文の陳述的な機能を担っているムード・テンスといった形態論的なカテゴリーは、動詞述語のみならず、形容詞述語、名詞述語にもある。このことから見れば、研究対象を「述語」に広げて、その視点から動詞述語のムード・テンス・アスペクト体系という文法的なシステムを改めて考えるのは、研究の発展のための必然的なプロセスといえる。次に、そのような視野をもつ、工藤（2014）を取り上げる。

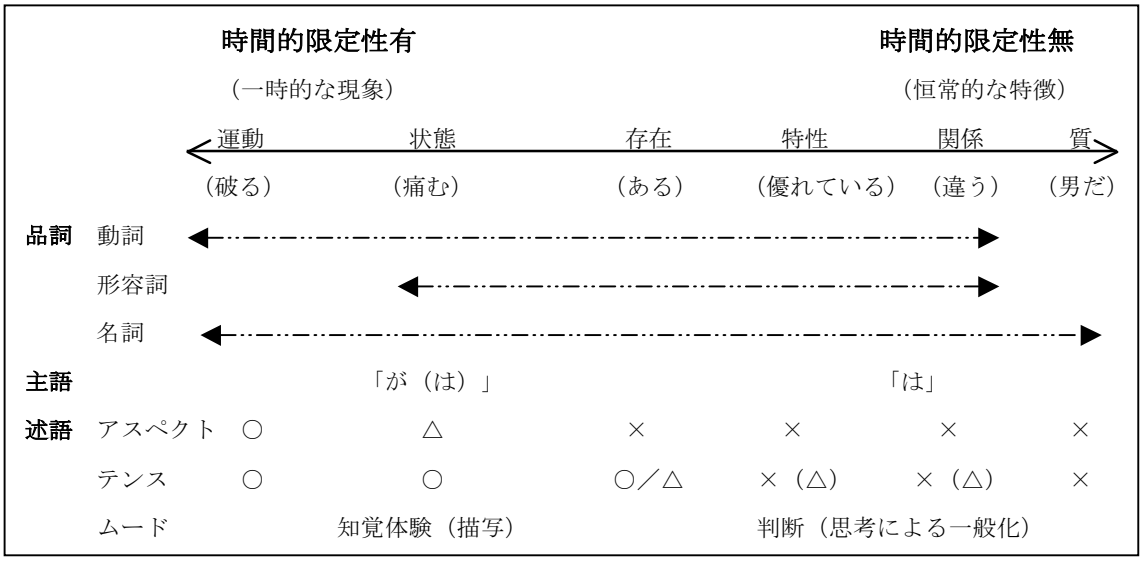
2.3 時間的限定性・ムード・テンス・アスペクト体系という視点
―工藤（2014）―

工藤（2014）では、文法的なアスペクト的意味が動詞の語彙的な意味のタイプと相関しているように、動詞述語を中心に、形容詞述語、名詞述語をも含めた日本語ムード・テンス・アスペクト論の研究への展開は、述語の意味的なタイプとの関係を分析する必要があるとしている。そこで提起されたのは「時間的限定性」という観点である。

工藤（2014）によると、「時間的限定性」とは、「すべての述語を捉えているカテゴリーで、偶発的（accidental）な一時的な（temporary）〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的（permanent）な〈本質〉かのスケール的な違いである」（p.46）。そして、そこでは、「時間的限定性」は、「アスペクトやテンスとは異なり、時間のみに関わる問題ではなく、現実世界の捉え方全体に関わる」（p.56）ことが強調されている。

「時間的限定性」の観点に基づいた述語の意味タイプ化、そして述語の意味的なタイプと品詞、主語の形態、アスペクト・テンス・ムードといった文法的なものとの関係について、工藤（2014）を参考にして示すと、以下のような図式になる。

図１　時間的限定性スケール（工藤 2014 に基づく）



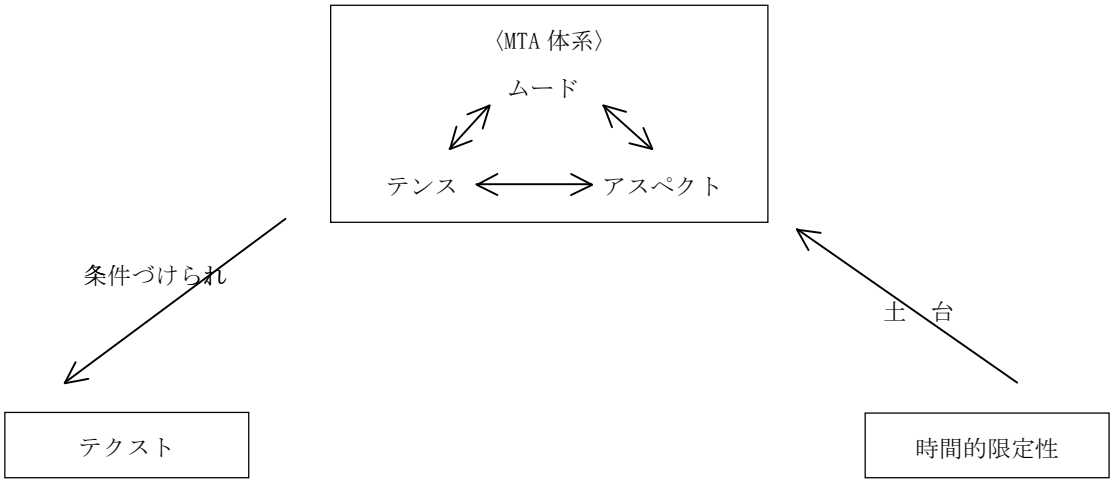
本研究に関連する、アスペクト・テンス・ムードについて見ると、時間的限定性のある《運動》を表す動詞は典型的なムード・テンス・アスペクト体系をもつが、同じく時間的限定性のある《状態》を表す動詞は、時間的展開性がないことから、アスペクトの対立が部分的である。一方、時間的限定性のない《特性》《関係》《質》を表すものは、アスペクト対立が成り立たず、基本的にテンス的意味も実現しない。このように、時間的限定性は、述語のムード・テンス・アスペクト体系の分化の土台であると言われている。

工藤（1995）でもアスペクト・テンス・ムードの三位一体性は重視されていたものの、

記述の中心はあくまでもアスペクト・テンス体系であったが、工藤（2014）では、アスペクト・テンスにムードを加え、これらの相関性と一体性にもとづく、標準語と諸方言の MTA 体系の記述が目標になっている。

以上に紹介した、工藤（1995）、工藤（2014）の見解をまとめてみると、ムード・テンス・アスペクト体系と、「テクスト」と「時間的限定性」の観点とは、次のような関係にあるといえるのではないかと思われる。

図 2　ムード・アスペクト・テンス体系と「テクスト」「時間的限定性」の関係



すなわち、ムード・テンス・アスペクトは三位一体の関係であり、述語のムード・テンス・アスペクト体系の分化は時間的限定性を土台としており、アスペクト・テンス形式は、テクストに条件づけられて、機能を果たすのである。

工藤（1995）によると、体系・機能的アプローチに基づいた考察は、日本語という個別言語のアスペクト・テンス体系と欧米やロシアで展開されてきた一般アスペクト論の関係を念頭に入れて行ったものでもある。このアプローチによって、日本語動詞のアスペクト・テンスの研究が世界的な水準に引き上げられたといえよう。

さらに、このアプローチにおいて重要な位置を占める「時間的限定性」は、動詞という単一の品詞を超えて、述語全体を視野に入れた研究を促す。工藤編（2004、2007）、八亀（2008）、佐藤（1997、2007）などは、時間的限定性の観点をもつ、標準語の形容詞・名詞の研究および日本語方言の動詞・形容詞の研究であり、日本語の述語論、方言類型論に大きく貢献している。以上のようなことは、体系・機能的アプローチの普遍性・一般性を裏づけている。このことから、本研究を進めていく中では、体系・機能的アプローチについて、その意義を充分に認識し、その考えを受け継ぎたいと考える。

3. 本研究の位置づけ

体系的アプローチによる日本語動詞のアスペクト・テンスの研究は、《運動》を表す動詞の研究を飛躍的に発展させた。また、時間的限定性という観点は、動詞だけでなく、形容詞や名詞をも視野に収めた、総合的な述語論に道を開いた。では、残された課題は何か。

すでに触れたように、日本語には《運動》を表さない非典型的な動詞が多数存在している。これらは、当然のことながら、アスペクト研究の対象にならない。しかし、それらも述語になる以上は、時間的限定性の観点から分析しなければならない。だが、《状態》と《特性》の区別は、主に形容詞分類における中心的な関心事項であった。状態動詞の研究はそれなりにあるが、時間的限定性の観点にもとづくものは少ない。《状態》とは何か、《運動》やその他の意味的なタイプとどのような関係にあるのか、そもそも日本語の状態動詞にはどのようなものがあるのか、などの問題をめぐっては、まだ十分に議論されていない。《特性》を表す動詞にいたっては、金田一が第四種動詞としてそれらに注目して以来、ほとんど何も研究されていないのではないだろうか。それは、《特性》を表す単語の中心は形容詞であり、動詞は周辺的なものと意識されているからかもしれないが、「そびえる」のように《空間的配置》を表すのは基本的に動詞であるにもかかわらず、従来ほとんど言及がない。時間的限定性の観点からの《状態》や《特性》の研究においては、形容詞だけでなく、動詞を視野に入れなければ、その本質は理解できないと思われる。また、《空間的配置》のような《運動》と関係のないカテゴリーが《存在》《特性》《関係》と相関しており、時間的限定性の研究にとっては重要テーマであると思われる。

本研究は、時間的限定性の観点からの日本語動詞の研究である。これまでは、主に《運動》を表す単語という見方から、動詞は研究されてきた。これによって、動詞研究の中核部分はほとんど完成の域に達した。残る課題は、《運動》以外の部分における動詞と時間的限定性との関わりについての体系的な記述である。《運動》以外の部分として本研究が取り上げるのは、《状態》《特性》《空間的配置》である。記述は、語彙的な側面と文法的な側面の両方にわたるが、文法的な側面については、特に動詞のアスペクト・テンス形式を軸として記述を進める。完成相と継続相、過去形と非過去形の対立は、運動動詞において典型的に成り立つものであり、《状態》《特性》《空間的配置》を表す動詞については、運動動詞とは違った仕組みによって、それらの形式が選択されると考えられる。一部の方言では、継続相や不完成相に相当する形式が一時性や目撃性を表すために利用されるが[注3]、標準語においても、《状態》《特性》《空間的配置》を表す動詞のアスペクト・テンス形式は、アスペクト・テンス的な意味の表示以外の目的で使用される。

注3 たとえば、ウチナーヤマトゥグチにおける「シヨッタ」の形は、次の用例のように、話し手が直接目撃したことを伝えるための形である。「カゼガ フイテ ローソクガ キエヨッタ」（風が吹いてローソクが消えた）（高江洲 2004）詳細は工藤編（2004）、工藤（2014）を参照。

4. 研究の方法

本研究は、奥田氏や工藤氏の時間的限定性の研究を継承しつつ、その観点から動詞研究を発展させようとするものであるが、研究の方法論についても、両者から多くのことを学んでいる。その中から、本研究にとって特に重要であると思われることを箇条書きにしておく。

(1) 言語は体系であり、そのいずれの側面と領域（音声や意味、語彙や文法）も相互にむすびつく要素の集合をなす。
(2) 単語は語彙・文法的な単位である。単語の語彙的な意味（カテゴリカルな意味）が文法的なものに働きかけながらも、語彙的なものが文法的なものに縛り付けられるように、語彙的なものと文法的なものは有機的に統一している。
(3) テクストは文を基本的な単位として成り立ち、単語は文の材料である。単語は言語の文法規則に従って文を組み立て、文は他の文と結合されて、テクストとなる。単語のアスペクト・テンス形式が文の中核的な時間的な意味を担いながら、テクストの中核的機能を果たす。このように、形式、意味、機能の三者は切り離せない関係にあり、形式と意味の統一として存在する内在的な文法体系は、テクスト的機能との関係の中で捉えなければならない。
(4) 品詞の間、述語の意味的なタイプの間は連続的である。

このような認識のもとに、具体的には、次のような手順で研究を進めた。

まず、記述は、大量の実例の収集によって構築したデータベースに基づいて行う。語彙の収集においては、分類語彙表（増補改訂版）や工藤（1995、2014）などの先行研究における動詞のリストを参考にしているが、まずは、先入観をもたずに、小説を読みながら、その場で《状態》《特性》《空間的配置》を表す動詞の用例となる可能性があるかを判断し、可能性があると判断された例を拾い出す作業を行った。可能な限り、網羅的なリストを得るためである。

続いて、そのようにしてできたリストに基づき、それぞれの動詞語彙について、小説から目視で収集した用例に加えて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」や伴一彦氏がＨＰで公開しているシナリオをなどから大量の用例を収集し、用例データベースを作成する。このデータベースをもとに、《状態》《特性》《空間的配置》を表す動詞ごとに、アスペクト・テンス形式、すなわち、スル・シタ・シテイル・シテイタの分布を調査し、分布の傾向や使い分けの法則について考察した。

この考察から得られた仮説にもとづいて、用例データベースに様々な情報を付与し、データベースを拡張した。どのような情報が必要であるかは、《状態》《特性》《空間的配置》のいずれのタイプであるかによって違ってくる。アスペクト・テンス形式の情報は共通に必要であるが、状態動詞については感情・感覚・知覚といった語彙的意味や人称・ム

ード的意味が、特性動詞については終止か連体かという構文論的な機能が、空間的配置動詞についてはテクストタイプが重要な情報となる。このように、考察とデータベースの更新を並行して行い、結論を導いていった。データベースに収めた動詞の語彙数（延べ語数）と用例数は、表１の通りである[注4]。

表１　データベース化した動詞の語彙数と用例数

	状態動詞	特性動詞	空間的配置動詞
語彙数	104	63	98
用例数	2688	7299	7744

5. 本研究の構成

本研究は７つの章から構成される。

第１章と第２章では、本研究の背景や、考察と記述の前提を説明する。第１章では、本研究に至った経緯、研究の歴史から見る本研究の位置づけや意義などを中心に述べる。第２章では、本研究を支える基礎となる「時間的限定性」の観点を詳しく紹介し、この観点に基づいて、《運動》《状態》《存在》《特性》《関係》を表す動詞のムード・テンス・アスペクト体系の基本性質を概観する。

第３章から第６章は、《運動》を表さない動詞の中から特に《状態》《特性》《空間的配置》を表す動詞のアスペクト・テンス形式について具体的に考察して記述を行う部分である。これら章では、意味的なタイプの違いによって、動詞のアスペクト・テンス形式の使用法が、運動動詞が表す〈非過去―過去〉〈完成性―継続性〉のような「時間」的な意味を表し分けるシステムからどのように変容を遂げ、再構築されているのか、ということを考察する。

第３、４章は《状態》を表す動詞に関する考察である。状態動詞の多くは、感情・感覚・知覚のような人間の内的情態を表すものである。これらの動詞のアスペクト・テンス対立はムード性・人称性と絡み合って変容すると言われている。が、このことに対する精密な記述がまだなされていないため、この章では、大量の実例調査に基づき、従来にないレベルの精密さで記述する。なお、従来、《状態》という概念については、研究者による捉え方の違いが非常に大きい。したがって、アスペクト・テンス形式に対する考察の前に、まず、第３章において《状態》そのものをめぐって集中的に検討することにする。そして、先行研究の検討を通して、日本語動詞の体系的な研究や述語論の発展にとって、《状態》の概念をどのように規定し、状態動詞の範囲をどのように把握すべきかについて考察す

[注4] 表１で示した用例数は、本研究の考察対象となる用例の合計数である。つまり、スル、シタ、シテイル、シテイタという４つの形式をとることに加えて、状態動詞は会話文の終止用法、特性動詞は終止用法と連体用法、空間的配置動詞は終止用法に限定したものである。ほかに、状態動詞のかたりの述語文、中止用法、条件用法、シテクルなどの形式をとるような用例もあり、実際に処理した用例は、総計６万例以上にのぼる。

る。

第 5 章では、《特性》を表す動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能を考察する。特性動詞は時間的限定性のない恒常的な特徴を表すため、アスペクト・テンス形式は時間的な対立を表しえない。特性動詞は終止用法よりも連体用法に使用されることが多いことから、そのアスペクト・テンス形式に関しては、終止用法と連体用法の両方に注目する必要がある。実例調査によると、終止用法ではシテイル形式が中心であるが、スル形式も少し見られ、連体用法では、シテイル形式とシタ形式を使う傾向がある。この章では、テクストタイプ、特性動詞とかざられ名詞のくみあわせと発話全体との関係に対する考察から、終止用法と連体用法における、特性動詞のアスペクト・テンス形式のそれぞれの意味・機能を記述し、形式の選択の原理を探り出す。

第 6 章では、《空間的配置》を表す動詞について考察する。従来、《空間的配置》という意味的なタイプについては、時間的限定性の観点からの位置づけがなく、これらの語彙・文法的な特徴およびこのタイプの位置づけを明らかにすることは、時間的限定性の研究の重要課題であると考える。この章では、このタイプに所属する動詞語彙の範囲や下位類、文法的な特徴などの基本的な性質を記述した上で、「そびえる」を代表として取り上げ、そのアスペクト・テンス形式の意味・機能とテクストとの相互作用を中心に考察する。

第 7 章では、動詞の意味・文法的な体系性の問題として、前章までの考察結果を総括して結論を述べる。動詞がその典型的な意味領域である《運動》から外れて、《状態》《特性》《空間的配置》などの意味を表すとき、アスペクト・テンス形式の使用法が変容することになるが、その変容は、動詞の意味的なタイプとどのように相関し、なぜそのような相関が見られるのかについて、動詞論や述語論の視野からまとめる。最後に、本研究の研究史における位置づけや意義を改めて確認する。

第 2 章
時間的限定性の観点から見た
日本語動詞

1. 本章の目的

この章では、第 3 章以降の考察の前提として、「時間的限定性」の概念を取り扱う。前半では、これが先行研究においてどのように扱われてきたかを紹介し、後半では、この概念を基礎として本研究を展開するにあたって、様々な意味的なタイプの中でも本研究が特に《状態》《特性》《空間的配置》に注目する理由や、それらのアスペクト・テンス形式に関する分析において必要な観点や方法について説明する。

2.「時間的限定性」とは何か

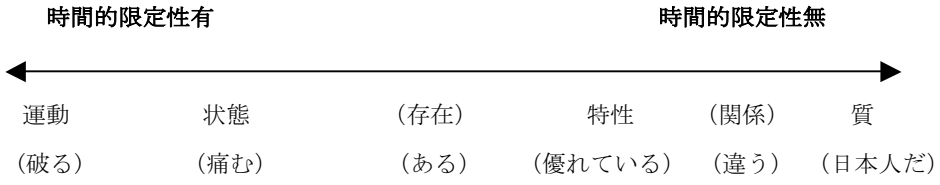
叙述や命題の類型に関する研究の重要性が意識されるようになってきているが、この種の研究では、まず、述語のレベルを押さえる必要がある。そこで、本研究では、動詞述語だけでなく、形容詞述語や名詞述語を含めた、述語の意味のタイプ化を行っている、奥田靖雄氏や工藤真由美氏の「時間的限定性」の研究を中心的に取り上げ、その後で、関連する概念についても言及する。

2.1 時間的限定性のスケールと述語の意味的なタイプ

「時間的限定性」の概念は、奥田靖雄氏がロシア言語学の考えをもとに提示したものであり、工藤真由美氏をはじめとする研究者らがそれを継承して、日本語の標準語や方言の研究に適用して発展させている。

「時間的限定性」とは、「偶発的（accidental）な一時的（temporary）な〈現象〉か、ポテンシャルな恒常的（permanent）な〈本質〉かのスケール的な違いである」（工藤 2014：46）。この観点は、すべての述語に関わっており、時間的限定性の有無に基づいて、日本語の述語は次のような意味的なタイプに分けられる。

図 1　時間的限定性スケール（工藤 2014 に基づく）



《運動》と《状態》は、時間的限定性のある一時的な現象である点において共通しているのだが、《運動》は動的な時間的展開性のある動的な現象であるのに対して、《状態》は《運動》と違って、動的な時間的展開性のない静的な現象である。一方、《特性》《関係》《質》は時間的限定性がないということから、《運動》《状態》から区別される。《特性》とは、「特定の時間にしばられることのない、物にコンスタントにそなわっている特徴である」（奥田 1988c）。《質》と《特性》を区別しない立場もあるが、奥田氏は《質》を「ひとつの物からほかの物をくべつする、本質的な特性のセット」（奥田 1988c）と規定して《特性》から区別する。《関係》については、「場合によっては(筆者注：《特性》と《質》の)どちらにかに振り分けることも不可能ではないが、おそらく比較表現の分析において重要な機能を担うことが予想される」（工藤 2002: 52）とされ、位置づけは保留されている。なお、《存在》は、時間的限定性のある一時的な存在＝滞在（「留守だ」など）の場合と、時間的限定性のない恒常的な存在（「豊富だ」など）の場合があり、スケールの中間に位置している。

日本語の標準語では、時間的限定性が意味的なカテゴリーとして存在しており、形態論的なカテゴリーとして文法化されてはいないが、日本語の方言には、時間的限定性の有無を明示する形式もつものがあることが報告されている。たとえば、工藤（2004・2014）によると、東北方言には、次の例文[注1]のように、形容詞述語と名詞述語に一時性の有無を表し分ける形式があるものがあるという[注2]。

（1）a. 今日 <u>ヌグクテラ</u>。（一時性）
　　b. 春 <u>ヌグイ</u>。（恒常性）

注1　本研究において掲出する用例については、末尾に出典を示し、作例した例文については、末尾に作例であることを注記する。ただし、本論文で使用する例文はほとんどが実例である。また、記述や考察に直接使用する用例（一部作例）には、章ごとに、1)、2)、3)、…のように通し番号を付す。それ以外の例文（先行研究からの引用や説明に使用する例文）には（1）、(2)、(3)、…のように付す。なお、「＊」は非文であること、「??」「?」は文として不自然であることを示す。

注2　佐藤(2007)によると、ロシア語の形容詞には、長語尾形と短語尾形があり、両者の対立は、部分的に、恒常性と一時性の対立の形態論的な表現と見ることができるという。本研究において掲出する用例については、末尾に出典を示し、作例した例文については、末尾に作例であることを注記する。ただし、本論文で使用する例文はほとんどが実例である。また、記述や考察に直接使用する用例（一部作例）には、章ごとに、1)、2)、3)、…のように通し番号を付す。それ以外の例文（先行研究からの引用や説明に使用する例文）には（1）、(2)、(3)、…のように付す。なお、「＊」は非文であること、「??」「?」は文として不自然であることを示す。

(2) a. 太郎 ハンサムデラ。(一時性)
b. 太郎 ハンサムダ。(恒常性)

時間的限定性に基づく述語の意味的なタイプの分類は、ただ述語の意味を時間的な観点から分類したものではなく、主語と述語の関係を考慮しながら、品詞や文の意味・文法的な体系との関係を視野に入れた意味・文法的な分類である。次の節では、このことを具体的にみる。

2.2 時間的限定性とムード・テンス・アスペクト体系

時間的限定性は、「時間」の問題にとどまらず、現実の世界の認識に関わっている。したがって、この観点に基づいた述語の意味的なタイプの分類は、様々なレベルで文や述語の文法的な側面と相関する。このことを確認するために、第 1 章においてすでに示しておいた図 1（工藤 2014 に基づく）を再掲する。

図 2 時間的限定性に基づく述語の意味的なタイプと文法的な特徴（第 1 章図 1 再掲載）

		時間的限定性有 (一時的な現象)				時間的限定性無 (恒常的な特徴)	
		運動	状態	存在	特性	関係	質
		(破る)	(痛む)	(ある)	(優れている)	(違う)	(男だ)
品詞	動詞	←				→	
	形容詞		←			→	
	名詞	←					→
主語			「が（は）」			「は」	
述語	アスペクト	○	△	×	×	×	×
	テンス	○	○	○／△	×（△）	×（△）	×
	ムード		知覚体験（描写）		判断（思考による一般化）		

工藤（2014）では、時間的限定性に基づく述語の意味的なタイプは、品詞、主語の形態、述語におけるアスペクト・テンスの分化およびムード的な意味と連動しているということが指摘されている。以下、工藤氏の指摘をやや詳しく紹介しておく。

まず、品詞の観点から見れば、スケールの両端に位置する《運動》と《質》に関しては、前者は基本的に動詞述語によって、後者は名詞述語によって表される[注3]。スケールの中間

注3「このバスは明日の朝、東京に到着だ」の「到着だ」は《運動》を表しているが、形態論的には名詞であっても、統語論的には動詞であって、単純に名詞述語とは言えない（名詞と動詞の両方の性質をもつので、動名詞と呼ぶべきか）。

に位置する《状態》《存在》《特性》《関係》といった意味的なタイプは、動詞述語、形容詞述語、名詞述語のいずれによっても表される。このように、時間的限定性のスケールに基づいて、動詞から名詞までの品詞間の連続性を捉えることができる。

また、主語における「は」と「が」の使い分けについては、時間的限定性のある《運動》《状態》と一時的な滞在としての《存在》は、基本的に「が」を用いる。時間的限定性のない恒常的な《存在》と《特性》《関係》《質》の場合は、「は」となる。次は、それぞれの意味的なタイプの例文を品詞別に示したものである。

	動詞述語	**形容詞述語**	**名詞述語**
《運動》	太郎が手紙を破った。	×	明日出発だ。
《状態》	足が痛む。	足が痛い。	足が筋肉痛だ。
《存在》	太郎は大学にいる。	この地域は坂が多い。	太郎は留守だ。
《特性》	彼女は優れている。	彼女は優秀だ。	彼女は優等生だ。
《関係》	二人の考えは共通する。	二人の考えは同じだ。	二人の考えは共通だ。
《質》	×	×	彼は日本人だ。

さらに、時間的限定性の観点は、アスペクト・テンス対立の有無やムード的な意味と深く関わっている。

まず、時間的限定性があり、時間的展開をもつ動的な一時的現象である《運動》を表す動詞では、非過去形と過去形には〈非過去〉と〈過去〉のテンス対立が成立し、完成相と継続相には〈完成性〉と〈継続性〉のアスペクト対立が成立する、というように、典型的なアスペクト・テンス体系をもつ。

(3) a. 太郎が手紙を破る／破った。(未来／過去の完成性)
b. 太郎が手紙を破っている／破っていた。(現在／過去の継続性)

《状態》を表す動詞には、時間的限定性があり、〈非過去〉と〈過去〉テンス対立が成立するが、時間的展開性のない静的な現象であるため、状態動詞のスル形式は〈現在〉を表すことができるが、スル形式とシテイル形式は〈完成性〉と〈継続性〉の典型的なアスペクト対立をなさず、〈表出〉と〈確認・記述〉といったムード的な意味の対立になる。

(4) a. 頭が痛む。(現在の状態)
b. 昨日、頭が痛んだ。(過去の状態)
c. 頭がずきずきする。(現在の感情の表出)
d. 頭がずきずきしている。(現在の状態の確認・記述)

《存在》を表す動詞には、シテイル形式がなかったり、スル形式でもシテイル形式でも表せたりして、アスペクト対立が成り立たないが、時間的限定性のある一時的な滞在の場合では、〈非過去〉と〈過去〉のテンス対立が成立する[注4]。しかし、時間的限定性のない恒常的な存在の場合、非過去形は〈恒常性〉を表し、過去形は〈過去の長期的な存在〉というテンス的意味を表すことができる。

(5) a. 太郎は大学にいる／いた。(現在の一時的な滞在／過去の一時的な滞在)
b. スカイツリーは東京にある。(恒常性)
c. 昔、ここに高いビルがあった。(過去の長期的な存在)

《特性》と《関係》は、時間的限定性がなく、アスペクト・テンス対立から解放されている。非過去形は〈恒常性〉を表す（例 a、b)。また、《特性》と《関係》は、長い間に変化する可能性が考えられるので、その場合、過去形は〈過去〉のテンス的な意味を表すが（例 c、d)、それ以外のケースでは、過去形には典型的なテンス的を表さず、〈主体の非現存〉や〈想起〉〈発見〉などのムード的意味になる（例 e、f、g)。

(6) a. 彼は優れている／＊優れる。(恒常性)
b. 二人の趣味は共通する／共通している。(恒常性)
c. 学生時代、彼は優秀だった。(過去の特性)
d. あのとき、彼女は私の親友だった。(過去の関係)
e. （亡くなった）おばあさんはやさしかった。(主体の非現存)
f. たしか、あなたは甘いものが好きだったね。(想起)
g. なんだ、彼はあなたの友達だったのか。(発見)

最後に、《質》は、《特性》《関係》と違って、変化することが考えにくいため、過去形は、〈過去〉を表さず、基本的に、〈主体の非現存〉や〈想起〉〈発見〉などのムード的意味を表す。

(7) a. （亡くなった）彼は作家だった。(主体の非現存)
b. たしか、彼は作家だったね。(想起)
c. そうか、彼は作家だったのか。(発見)

工藤氏が指摘しているように、述語のアスペクト・テンス対立は、時間的限定性を土台に分化する。そもそもアスペクト形式をもたない形容詞述語や名詞述語では、テンス形式

注4 「いる」の場合はスル形式で《現在》を表すが、「滞在する」ではシテイル形式で《現在》を表す。

の用法のみが問題になる。つまり、これらが恒常的な《特性》《関係》《質》を表す場合、〈過去〉を表す形式は必要ではなく、過去形はむしろムード的な意味を表すために使用される。一方、《運動》を表さない動詞については、《状態》を表す動詞の場合には〈過去〉を表す形式が必要であり、実際、過去形はそのように使用されるが、恒常的な《特性》《関係》の場合には、形容詞述語や名詞述語と同様の事情が存在する。本研究で問題にしたいのは、それらの動詞のアスペクト形式の使用法である。アスペクト対立が成立するのは、《運動》を表す動詞においてであり、《特性》や《関係》の場合は、そもそもアスペクトとは無縁である。しかし、動詞である以上、それらの動詞を使用する際には、完成相か継続相を選ぶ必要がある。その際の選択要因は何であろうか。また、《状態》を表す動詞は、完全にアスペクト対立を失っているわけではないが、完成相と継続相の選択には、《運動》を表す動詞とは異なる、独自の原理が働くはずである。こうした問題は、ほとんど未解決であると思われる。

3. 時間的限定性に関連する概念[注5]

以下では、時間的限定性に関連する概念を提起している国内外のいくつかの研究を紹介しておく。

3.1 the scale of temporal stability— Givón (2001) —

動詞、名詞、形容詞の連続性を捉えている点で、時間的限定性の考え方と共通性が高いものとしては、言語類型論の研究にもよく引用される Givón(2001)の“the scale of temporal stability” (時間的安定性のスケール) がある。

Givón (2001)では、名詞、動詞、形容詞という３つの主要な品詞に対して、次の４つの側面から特徴づけている。

・temporal stability(rate of change over time)
・complexity(number of defining sub-features)
・concreteness(physicality)
・spatial compactness(degree of spatial scatter)

そして、

> While analytically distinct, these features exhibit strong associations, so that in many instances a feature is partially predicatable from one or more of the others. Nevertheless,

注5 岩男 (2008)、眞野 (2008b) においては叙述類型に関連する概念について、国内外のいくつかの研究を紹介している。

the feature of time stability is in some sense primus inter pares, giving coherence to the cluster as whole. (Givón 2001: 50)

というように、temporal stability における特徴の支配的な地位を強調した。また、これらの側面における動詞、名詞、形容詞の特徴について述べたあと、次のような図式を提示した。

図 3 The scale of temporal stability

most stable				least stable
tree,	green	sad, know	work	shoot
noun	adj	adj verb	verb	verb

(Givón 2001: 54)

Givón (2001)によると、名詞（tree）がもっとも時間的に安定しているのに対して、動詞(shoot、work)はもっとも時間的安定性に欠けているという。両者はスケールの両端に位置する。一方、形容詞には、かなり時間的に安定して、名詞寄りに位置するもの（green）と、比較的に時間的に安定しておらず、動詞寄りに位置するもの(sad)に分れており、スケールの中間に位置している。ただし、動詞にも、Less-prototypical なもの（know）が存在しており、それらは一定の時間帯において持続する状態＝state を表し、比較的に時間的に安定している。

工藤（2014）によると、この図式と図 1 の時間的限定性に基づく述語の意味的なタイプとは、以下のように対応している。

（時間的限定性有）		（時間的限定性無）	
temporal stability:least		temporal stability:most	
shoot work	know sad	green	tree
（運動）	（状態）	（特性）	（質）

（ 工藤 2014:44）

このほか、Carlson(1980)などにおける「個体レベル述語」(individual-level predicates)と「場面レベル述語」(stage-level predicates) の区別に関する議論も、時間的限定性と関連している。個体レベル述語は、主体名詞の恒常的な特徴を、場面レベル述語は、主体名詞の一時的な状態を叙述する。

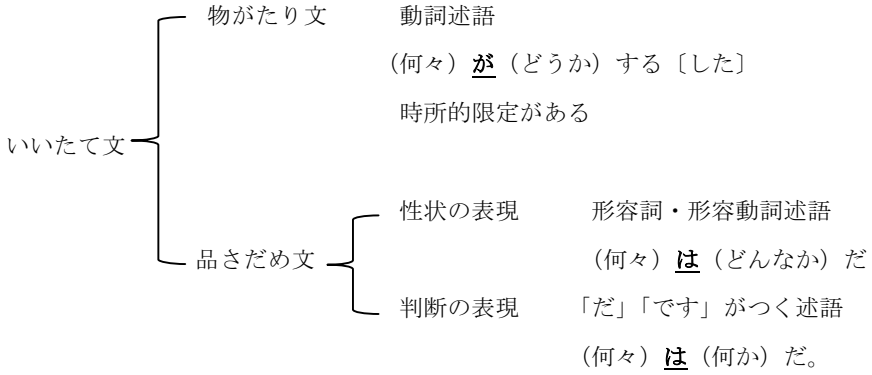
(8) a. John is tall/intelligent. (individual-level predicates)
b. John is drunk/sick. (stage-level predicates)

3.2 物がたり文・品さだめ文—佐久間鼎（1941）—

時間的限定性と深い関連をもち、研究史上、非常に重要であるとと考えられる国内の研究として、佐久間（1941）がある。

佐久間（1941）では、言語機能として、「物事に感じた模様がひとりでに表にあらはれたもの」である〈表出〉、「話しの相手に対する態度をあらはすもの」である〈うったえ〉、「見聞した物や事についてその容子をのべたり、ある事柄について自分の考をいひだしたりする」〈演述〉(p. 143-150)、という 3 つの文のタイプの存在を指摘している。そのうち、もっとも重要な機能である〈演述〉を担っている「いいたての文」について、事件の成行を述べる「物がたり文」と、物事の性質や状態を述べたり、判断を言い表したりする「品さだめ文」に二分している。さらに、「品さだめ文」の下位類として、「性状の表現」の文と「判断の表現」の文が指摘されている。このような分類を行ったうえで、それぞれの文の性質をめぐって、述語の品詞や文の構造、主語の「は」「が」の使い分け、時所的限定、などの面の特徴を含めて検討している。

上記のことに対する佐久間氏の見解をまとめて示すと、以下のような図式になると思われる。



物がたり文は、述語には基本的に動詞が使われ、主語は「が」と共起し、時所的限定が必要である。品さだめ文は、述語については、基本的に、「性状の表現」の場合は形容詞・形容動詞が使用されるが、「判断の表現」の場合は名詞が使用される。なお、主語は「は」で表される。

佐久間（1941）の考えは、その後の研究によって受け継がれて展開された。たとえば、三上（1951）は、佐久間（1941）を受け継いで、平叙文を「動詞文」と「名詞文」（形容詞述語文と名詞述語文を含む）に分けて、文の類型と主題との関係の問題や、名詞述語文の機能（措定、指定、端折り）について、分析を行った。また、益岡隆志氏によって提唱さ

れた「叙述類型」の概念も佐久間氏の分類を受け継いだものであり、この概念は、日本語文法記述に広範囲に適用されている。以下では、益岡氏が提唱している叙述類型論について見てみる。

3.3 叙述類型—益岡隆志（1987・2008）—

益岡氏の叙述類型論は、命題論として出発する。益岡氏のいう「叙述」とは、「現実世界を対象として或るひとまとまりの事柄を概念化すること」（益岡 1987: 20）であり、そこには「属性叙述」と「事象叙述」の 2 つの類型があるとする。前者は、「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる」ものであり、後者は、「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）を叙述する」ものである（益岡 1987: 21)。「属性叙述」と「事象叙述」が佐久間氏の「品さだめ文」と「物がたり文」に対応していることは言うまでもない。益岡氏も、叙述類型をたてるにあたっては、命題の構造、述語の基本的な類型、時空間的限定といった面に着目している。その全体像は、以下のようである（例文は益岡（1987）による)。

〈典型的属性叙述〉

	① **内在的属性叙述**（例 9）	名詞／属性形容詞 時間的限定無
「主語・述語句構造」	② **非内在的属性叙述**（例 10）	属性形容詞（一時的属性の用法） 時間的限定有
	③（**中間型**）（例 11）	時間・空間的限定有
	④ **静的事象叙述**（例 12）	感情形容詞／状態動詞（存在・感覚） 時間的限定有
「述語・補足語構造」	⑤ **動的事象叙述**（例 13）	動詞 時間的限定有

〈典型的事象叙述〉

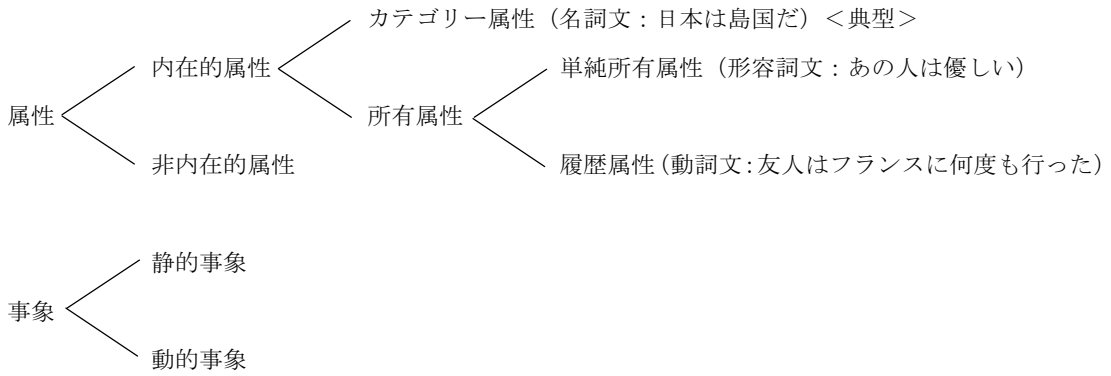
(9) 水無月は陰暦六月の異称である。(古都旅情)
(10) 花子はパーティーの間中、ずっとわがままだった。
(11) 付近は家屋が密集し、一時は大混雑でした。(潮騒)
(12) 今度は少し広い部屋がほしいわ。(雑草群落)
(13) もうすぐ楡病院の「賞与式」の日がくる。(楡家の人びと)

例 9 と例 13 はそれぞれ、典型的な属性叙述（①内的属性叙述）と典型的な事象叙述（⑤

動的事象叙述）の例であり、この２つの間に、②非内在的属性叙述、③中間型、④静的事象叙述といった類型を位置づける。例 10 の表すような②非内在的属性叙述は、属性を述べているが、時間的な限定を受けていることから、典型的な属性叙述である①内的属性叙述から区別される。また、例 11 のようなものは時間的な限定とともに空間的な限定も受けているため、③中間型として位置づけられている。例 12 の表すような④静的事象叙述は、静的な事象を表すこと点で、典型的な事象叙述である⑤動的事象叙述とは異なる。このように、時間・空間的な限定や静的・動的の観点によって、類型の連続性を捉えている。

叙述類型論と時間的限定性の議論には、類似点も見られるが、益岡氏が叙述類型を属性叙述と事象叙述に二分するときの観点は、時間的限定性の有無（一時的か恒常的か）ということではなく、「主語・述語句構造」か「述語・補足語構造」かという構造的な観点が中心となっている。これは、益岡氏の叙述類型論が命題論から出発していることと関係がある。益岡氏は、従来の言語学が動詞文の研究を中心に発展してきたのに対して、日本語のような言語では、むしろ名詞文が重要であるとし、属性叙述と事象叙述の組み立ての違いを明らかにするという方向に、佐久間氏の研究を発展させようとしているのである。

益岡（2008）では、次のように、内在的属性叙述がさらに下位分類され、時間的限定性による分類に近づいている。「カテゴリー属性」は《質》にあたり、「単純所有属性」は《特性》にあたる。



なお、叙述類型論が命題論であるのに対して、時間的限定性は述語論であるという対比は正確ではない。奥田（1988d）に、「文の対象的な内容をタイプに一般化するにあたって、まずはじめに必要な手つづきは、たぶん、述語の位置にあらわれてくる単語、単語のくみあわせ、慣用句の語彙的な意味をタイプに一般化することであるだろう。他方では、主語の位置にあらわれてくる単語、あるいは単語のくみあわせの語彙的な意味をタイプに一般化することが必要である。ところが、この一般化の作業は、述語は主語との関係のなかで、主語は述語との関係のなかでおこなわなければならない」（p. 101）との指摘があるように、時間的限定性の研究では、文の中核的な成分である主語と述語との相関を重視している。一方、述語論として展開する理由としては、時間的限定性と MTA 体系との相関性の重視が

ある。

3.4 命題の意味的類型—仁田義雄（2001・2012・2016）—

次に、奥田氏の考えを追いつつ、命題の意味的類型の分類を行ったことから、時間的限定性と関連性が深いと思われる仁田義雄氏の研究を取り上げる。仁田氏は、文において、話し手が外界や内的世界との関わりにおいて描き取ったひとまとまりの事態を表す部分＝命題の意味的類型について、《動き（主体運動・主体変化）》《状態》《属性》の 3 つ類型を抽出する。《動き》と《状態》は、共通して時間的限定性をもつ事態であるが、《動き》は時間的な展開過程がある事態であるに対して、《状態》は時間的な展開過程のない事態である。《属性》は、時間的限定性のない事態であることから《動き》《状態》と区別される。それぞれに対する詳細な規定は以下のようになる。

> 《動き》とは、ある一定の具体的な時間の流れの中、言い換えれば限定を受けた一定の時間帯の中に出現・存在し、それ自体が発生・展開・終了していく—展開が瞬時で、発生と終了が同時的である、というものをも含めて—、という時間的な内的展開過程を有する、というあり方で、具体的なモノ（人や物を含めて）の上に発生・存在する事態である。《動き》は、外的あるいは内的なエネルギーが供給され、それを受けてのモノの呈するありようの変動である。（仁田 2016：166-167）

> 〈状態〉とは、限定を受けた一定の時間帯の中にしか存在しないものの、事態の発生・終焉の端緒を取り出せない、つまり時間的な内的展開過程を持たない等質（同質）的な、具体的なモノの一時的なありよう、といった事態である。さらに言えば、一定の時間存在する、モノの上に生じる等質的なありようとして把握できる、ということは、モノの上に現れる等質的なありようが、そのありようを把握する基準時点以前から続いており、基準時点をまたいで基準時点以後にも存続していくと想定されている、からである。ただ、そのありようは、一定時間以前には存在せず、一定時間以後にも存在しない、と捉えられている。〈状態〉は、時間の流れの中に存在する外的あるいは内的な刺激・要因や関係の中で、モノが帯びる（モノに現れる）一時的なありようである。（仁田 2016：167）

> 〈属性〉とは、他のモノではない、そのモノである、ということにおいて、そのモノが具有している側面で取るあり方・特徴である。ある側面での、そのモノの有しているあり方・特徴は、他のモノの同じ側面でのあり方・特徴との関係の中で取り出されることになる。〈属性〉は、同類の他のモノとの関係の中で取り出される、モノが具有している側面でのあり方・特徴である。（仁田 2016：168）

以下は、仁田（2016）におけるそれぞれの例文である。

(14) あっ、男が手紙を破く／さっき男が手紙を破いた。（動き）
(15) 今この部屋に人がたくさんいる／先ほどまでこの部屋に人がたくさんいた。（状態）

（16）彼は北海道生まれだ。（属性）

仁田氏の議論は、時間的限定性を中心にしている見ることができるが、《特性》《関係》《質》を区別していない点や、《動き》と《状態》の関係についての捉え方が、奥田氏・工藤氏とは異なっているようである。後者の問題は重要なので、次章において、改めて取り上げることにしたい。

4. 時間的限定性の研究課題

本研究は、時間的限定性の観点から《運動》を表さない動詞にアプローチするが、その際に課題となることをやや具体的に述べておきたい。

《状態》《特性》という 2 つの意味的なタイプの研究は、特に連続性の把握において、重要な意味をもつ。まず、《運動》と《状態》の連続性の問題がある。《運動》と《状態》は時間的限定性のある一時的な現象を表す点で共通し、前者は時間的展開性のある動的現象であるのに対して、後者は時間的展開性のない静的現象である。しかし、このように規定しても、《状態》という語彙的な意味は、具体的に現実の世界のどのような出来事をうつしとっているのか、ということが理解できたことにはならない。人間の生理・心理的な現象は《状態》であるのか、人間の生理・心理的な現象を表す動詞は状態動詞なのか、ということについては、まだ結論が出ていない。これらの問題を解決するには、時間的限定性、動的な時間的展開性という２つのファクター以外に、《運動》と《状態》の意味的な内容をなすその他のファクターを探り、それらのファクターにおける両者の関係も考えなければならないと思われる。このように、《運動》と《状態》の連続性、相互関係という視点をもって、《状態》の内包と外延を明らかにすることは、動詞研究の重要な課題である（このことについて、第 3 章で詳しく検討する）。

次に、《運動》《状態》《特性》の間には、相互移行関係が見られる。たとえば、《運動》は、時間の抽象化が進んで時間的限定性のない《特性》に移行することがある。そして、《特性》は、一時的な静的現象である《状態》へ移行することがある。どのような条件で、なぜ、こうした移行が生じるのかということについて考察する必要がある。

《運動》⇒《特性》

（17）a. 家の猫が死んだ。（作例）

b. 人間は死ぬ。（作例）

《特性》⇒《状態》

（18）a. 彼女はやさしい。（作例）

b. 今日、彼女がやさしい。（作例）

また、《状態》《特性》は、形容詞述語の中心的な意味領域であるが、《状態》《特性》を表すのに、なぜ動詞が必要なのか、それらの領域において、動詞述語と形容詞述語はどのように共存しているのかを考察する必要がある。

次に、時間的限定性は一次元的なスケールとして捉えうるものかという問題がある。時間的限定性の研究においても、《存在》や《関係》は特殊なものと考えられている。さらに、述語の意味的なタイプは、《運動》《状態》《存在》《特性》《関係》《質》に限定されるのかという問題がある。これらの問題に関して、本研究で特に注目したいのは、《空間的配置》というカテゴリーである。

(19) 山あいに農家が点在している。(現金強奪計画 ダービーを狙え)
(20) 五月晴れの空に、本覚寺の大屋根がそびえる。(朝日新聞 2004/5/27)
(21) 幅広い回廊がビルの内部を貫通していた。(百億の昼と千億の夜)

空間的配置動詞は、日本語に多く存在している(第 6 章を参照)のだが、日本語の文法研究では、これらについては、金田一以降の研究では、アスペクト対立から解放されているものとして、工藤(1995)などのアスペクトの研究において言及されるにとどまっており、時間的限定性の観点からの研究は管見の限りない。これらは、《存在》《特性》《関係》に関係しつつ、独自の意味領域をなしているようであり、スケールの上に位置づけることが難しい。叙述類型論で提示されている「履歴属性」や「非内在的属性」についても、その位置づけについては検討の余地があるように思われる。

第二部

状態動詞の
アスペクト・テンス形式

第 3 章
日本語の《状態》《状態動詞》再考

1. はじめに

日本語の文法研究では、《状態》の意味内容に対する規定、そして、どのようなものを《状態動詞》として位置づけるべきかなどの問題について、まだ定説がない。このことから、状態動詞のアスペクト・テンス形式の考察に先立ち、本章では、日本語の《状態》《状態動詞》が先行研究においてどのように捉えられてきたかということを検討しながら、《状態》の意味内容と《状態動詞》の所属動詞に関する問題を明らかにすることを試みる。

2. 問題の提起

戦後の日本語アスペクト研究の出発点となる金田一(1950)では、アスペクトの観点から、日本語動詞を「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種動詞」の４種類に分けている。その後、現在に至るまでの日本語動詞のアスペクト研究の中では、《状態》や《状態動詞》といった用語が、金田一（1950）と同じ意味でも異なった意味でも頻繁に使用されつづけている。

しかし、奥田（1988a）が、「アスペクトの研究において、この《状態》という用語は、規定なしに、やたらにつかわれている。この用語のもとに、すこしばかりの文法的な事実を根拠にして、質的にことなる、さまざまな出来事が、継続相の「している」の意味とかかわって、おなじ種類の出来事としてあつかわれている。たとえば、存在も状態であれば、特性も状態であり、状態も状態である」(p. 130）と指摘しているように、《状態》を用いた文法現象の分析は、《状態》の本質を考えることを前提にしていないものが多い。つまり、《状態》に関しては、それをアスペクト的な現象と語彙的な意味のいずれのレベルで捉えるか、そしてそれを語彙的な意味のレベルで捉えたとき、それは現実の世界のどのようなできごとをうつしとったものであり、その他の語彙的な意味のタイプとどのように相関しているか、ということについて明らかにしなければならないのである。

本章の目的は、先行研究を検討しながら、語彙的な意味のレベルにおける《状態》、《状態動詞》について、日本語動詞のアスペクトの研究、ひいては日本語述語論にとって望ましい扱い方を考え直すことにする。

3. 研究立場の概観

まず、語彙的な意味の《状態》に関して、まず問題となるのは、その語彙的な意味における時間的な性格である。つまり、《状態》が「一時的な現象」を表すか、それとも「恒常的な特徴」を表すかということである。特定の時間にしばられた一時的な動的現象を表す動詞（「破る」など）は、〈完成性―継続性〉のアスペクト・テンス対立をなすのに対して、特定の時間にしばられない恒常的な特徴を表す動詞（「馬鹿げている」など）はアスペクト・テンス対立から解放されるというように、動詞の語彙的な意味における時間的な性格の違いを土台に、アスペクト・テンス対立が分化するのである。

この点については、先行研究の見解は一致していないようである。大まかに整理してみると、《状態》の扱いについては、（Ⅰ）「時間を超越した観念」、（Ⅱ）「一時的なものと恒常的なものを含めた静的な事柄」、（Ⅲ）「一時的な静的現象」とする、３つの立場が見られる。それぞれの立場の代表者、議論の対象と基準、といった観点から比較すると、以下のようになる。

表１ 《状態》に関わる先行研究の概観

	時間的な性格	代表者	議論の対象	基準
Ⅰ	時間を超越した観念	金田一春彦（1950）	アスペクト	動詞述語の意味的なタイプ
Ⅱ	一時的なものと恒常的なものを含めた静的な事柄	寺村秀夫（1984）	テンス	述語の意味的なタイプ
Ⅲ	一時的な静的現象	奥田靖雄（1988a・1994・1997）	アスペクト、テンス、述語	述語の意味的なタイプ

「述語の意味的なタイプ」とは、述語位置に現れる単語の語彙的な意味のタイプのことであるため、そこで捉えられた《状態》を語彙的な意味のレベルのものと見なすことができよう[注1]。

以下、これら３つの立場を順に見ていく。

4. 金田一（1950）などにおける《状態動詞》

金田一（1950）では、「――ている」形と共起することの可否、そして「――ている」形の表すアスペクト的な意味の特徴に基づいて、アスペクトの観点から日本語動詞を次のように４分類している。

注1 複数の研究者が立場を共有しているが、ここでは、代表者と思われるもののみ示し、それに関わる他の研究は、それぞれの立場を詳述する各節において言及する。なお、《状態》の時間的な性格に関する見解が同じものでも、意味内容の規定において違いが見られることがあり、その点についても適宜触れる。

①状態動詞：時間を超越した観念を表し、「――ている」形をつけることのない動詞。「ある」「ござる」「(英語の会話が）できる」など。

②継続動詞：動作・作用を表し、「――ている」形がその動作が進行中であることを表す動詞。「読む」「書く」など。

③瞬間動詞：動作・作用を表し、「――ている」形が動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す動詞。「死ぬ」「(電燈が）点く」など。

④第四種動詞：時間の観念を含まず、いつも「――ている」形である状態を帯びることを表す動詞。「聳える」「ありふれる」など。

ここでは、日本語動詞を大きく、シテイル形式のないもの、あるもの、そしてシテイル形式しかないものに分けており、シテイル形式のないものを《状態動詞》としている。また、《状態動詞》の意味的な特徴については、「時間を超越した観念」を表すものと規定されている。つまり、《状態》は特定の時間にしばられていないということである。

しかし、《状態動詞》の時間的な性格を「時間を超越した観念」とすることには問題があるように思われる。金田一（1950）には、「一般の動詞は下に「――ている」をつけていわゆる現在の状態を表わすものであるが」、《状態動詞》は「「――ている」をつけずにそのままで現在の状態を表わす」というような説明が見られる。つまり、《状態動詞》は、特定の時間にしばられている「継続動詞」「瞬間動詞」のシテイル形式と同じように、〈現在の状態〉という時間的な意味を実現するとするのである。このような説明は、語彙的な意味のレベルとアスペクト的な意味のレベルを混同していることになるだけでなく、《状態》の時間的な性格に対する理解を曖昧なものにしている。「現在」という用語が「過去や未来から区別される発話時現在」を指し示すか、それとも「単なる発話時を含んだ時間帯」を指し示すか、ということをはっきりさせなければならない。

また、金田一（1950）では、《状態動詞》とされている「ある」「いる」などの動詞の時間的な性格の二面性を捉えていないと思われる。これらの動詞は、下記の例文のように、時間的な観念を含まない性質（例 1）とともに、特定の時間に起こる一時的な現象（例 2）をも表しうるのである。

(1) 日本人には太郎という名前の人がいる。(作例)

(2) 今、太郎は教室にいる。(作例)

さらに、第四種動詞と状態動詞がシテイル形式との関係で区別されているが、両者とも時間的な観念を含まないものである。状態動詞が「ある状態にあることを表わす」のに対して、第四種動詞が「ある状態をを帯びることを表わす動詞」であるというような説明から、両者の語彙的な意味の関係を理解するのは難しい。

藤井（1966）は、全面的に金田一の分類を受け継いで、動詞の「―ている」形の意味を

詳しく考察した。そこでは、第四種動詞に相当する「すぐれている」「おもだっている」などが「単純状態」を表すとしている。この「単純状態」も「時間を超越した概念」に対応するものである。

これらの研究は、アスペクトの観点からの動詞の語彙的な意味の一般化の試みという、日本語アスペクトの研究史の出発点に位置づけられるものであり、《状態動詞》に対して適切に把握できていないのは、この時期にはまだ、テンス・アスペクトの体系的な研究や時間的限定性の観点をもつ研究が存在していなかったということによると思われる。

5. 寺村（1984）などにおける《状態》

この節では、《状態》を「一時的なものと恒常的なものを含む静的な事柄」とする立場Ⅱについて見る。この立場は、立場Ⅰと違って、動詞述語に留まらず、述語全体の意味的なタイプを視野に入れている点に特徴がある。以下、寺村（1984）などを取り上げて検討する。

寺村（1984）では、終止述語のテンスを考えるにあたって、日本語の述語の種類を「動的述語」と「状態的述語」に二分している。そして、品詞別の状態的述語や、それらの述語の時間的な性格について、次のように示している（下線は筆者）。

（17）a. 名詞+ダ（の類）

b. 名（詞的形）容詞+ダ（の類）

c. 形容詞

d. 状態を表わす動詞

（中略）

（17）の型の述語となる品詞の中でも、本来的に、<u>物の種類や本質を述べるものと、流動する状態の中のあるひとときの状態を捉えているものとがある</u>。基本形が過去形と対立するものとして解釈される、あるいは選ばれるのは、あとのほうの語である。たとえば次のような語があげられよう。

（18）a. 名詞：休ミ、休診、休憩中（食事中、など）、病気、スト、……

b. 名容詞：ヒマ、元気、気ガカリ、静カ、キレイ、面倒、……

c. 形容詞：忙シイ、ネムイ、イタイ、ホシイ、サムイ、……

d. 状態を表わす動詞：アル、イル、（中国語が）デキル、……

どのような語でも、判断措定にも、性状規定にも、一時的な状態描写にも使おうと思えば使えるといってよく、どの意味で使われているかは、文中の副詞や状況によって判断されるのだが、上のような語は、時と関係づけて使われることが多いものだといえるだろう。（寺村 1984: 81-82）

寺村（1984）における「状態的述語」の中では、名詞と形容詞のすべてと動詞の一部が含まれており、一時的なものと恒常的なものが入り混じっている。なお、ここでは、金田一（1950）と同じように、「ある」「いる」などの動詞は《状態動詞》とされているのだが、これらは、「時間を超越した観念」ではなく、時と関係づけて「一時的な状態描写」を中心に表現する

ものとして位置づけられている。

寺村氏と似た立場に立つ日本語記述文法研究会編（2007）では、寺村（1984）と同じように、述語の意味的なタイプを《動き》と《状態》という２つのタイプに分けている。そして、《状態》に対しては、「時間的な展開の過程のない、静的な事態である」という説明を与えている。《状態》を表す単語例を品詞別に示すと、以下のようになる。

名詞+だ：晴天だ、未解決だ、責任者だ、３年生だ……

形容詞：赤い、涼しい、痛い、高い、強い、寒い、明るい、小さい、厳しい、きれい……

状態動詞
- 語彙的な状態動詞
  - スル形状態動詞：ある、いる、～すぎる……
  - スル・シテイル形両用状態動詞：関連する、異なる……
  - シテイル形状態動詞：優れる、ありふれる……
- 用法としての状態動詞：動き動詞のシテイル形（(道は）曲がっている）

ここでも、一時的なもの（「痛い」）と恒常的なもの（「3 年生だ」）を分けずに状態述語としている。そして、動詞述語については、「ある」などのスル形しかないものとともに、「関連する」などの「スル・シテイル形両用状態動詞」と「優れる」などの「シテイル形状態動詞」をひとまとめに《状態動詞》として位置づけられることになる。

ところで、時間的な展開のない静的な事柄を状態述語とするのは、英語の述語の意味的なタイプの分け方と共通性が高いと思われる。英語の述語は一般的に、動的（dynamic）と静的（static）に分けられており、静的述語は、その内部が等質的で、終了限界がはっきりしない、といった性質を持つ。以下、Quirk, R. et al.(1972)を取り上げて簡単に見てみる。

Quirk, R. et al.(1972) では、英語の述語を大きく DYNAMIC と STATIVE に分けている。この観点から、動詞述語、名詞述語と形容詞述語の性質や三者の関係について次のように述べている。

……Broadly speaking, nouns can be characterized natural as ‘stative’ in that they refer to entities that are regarded as stable, whether these are concrete (physical) like *house*, *table*, *paper*, or abstract (of the mind) like *hope*, *botany*, *length*. At the opposite pole, verbs can be equally naturally characterized as ‘dynamic’ : they are fitted (by their capacity to show tense and aspect ,for example) to indicate action, activity, and temporary or changing conditions……. But we saw in 2.6 that there were some verbs such as *know* which could not normally be used with the progressive (**he is knowing*): that is which could not be seen as referring to something that was in progress. Verbs so used we called ‘stative’, and they should be seen as exceptions within the class of verbs. There are exceptions in the other direction among the nouns, not all

of which need be stative. For example, a child may be well-behaved one minute and *a nuisance* the next. The situation is similar when we turn to the remaining open word-class, adjectives. Although they are predominantly stative (*tall*, *red*, *old*), some adjectives can resemble verbs in referring on occasion to transitory conditions of behaviour or activity such as *naughty* or *insolent*….

(Quirk, R. et al. 1972: 48)

英語の述語の意味的なタイプの分類は進行形の有無が重要な根拠になっている。DYNAMIC なものは進行形をもっているが、STATIVE なものは進行形を許容しない。なお、品詞別にみると、名詞述語と形容詞述語は基本的に STATIVE であるが、DYNAMIC なものとして振る舞うものもある。一方、動詞述語には DYNAMIC なものもあれば、STATIVE なものもある。たとえば、a. における動詞 *search* と b. における形容詞 *careful* は DYNAMIC なものであり、c. における動詞 *know* と d. における形容詞 *tall* は STATIVE なものである[注2]。

(3) a. John *was* carefully *searching* the room.
b. He’s *being careful*.
c. John *knew* the answer.
c.’ *John *was knowing* the answer.
d. He’s *tall*.
d.’ *He’s *being tall*.

STATIVE なものの単語例を品詞別に見ると以下のようなものがある。動詞述語の単語リストは Quirk, R. et al.(1972)で示されたものであるが、形容詞述語と名詞述語の場合は、単語リストが示されておらず、記述の部分から抽出している。

【STATIVE ADJECTIVES】

tall, red, old, hungry, angry, sick, awake, drunk, ill, etc.

【STATIVE NOUNS】

house, table, paper, hope, botany, length, etc.

【STATIVE VERBS】

①VERBS OF INERT PERCEPTION AND COGNITION:

abhor, adore, astonish, believe, desire, detest, dislike, doubt, feel, forgive, guess, hate, hear, imagine, impress, intend, know, like, love, mean, mind, perceive, please,

注2 例文は Quirk, R. et al. 1972 による。

prefer, presuppose, realize, recall, recognize, regard, remember, satisfy, see, smell, suppose, taste, think, understand, want, wish, etc.

②RELATIONAL VERBS:

apply to (everyone), be, belong to, concern, consist of, contain, cost, depend on deserve, equal, fit, have, include, involve, lack, matter, need, owe, own, possess, remain(a bachelor), require, resemble, seem, sound, suffice, tend, etc.

上記の STATIVE な述語では、一時的なもの（hungry など）と恒常的なもの（tall など）が区別されずに一括りにされている。寺村（1984）や日本語記述文法研究会編（2007）でいう「状態的述語」「状態動詞」は、英語学における STATIVE なもの＝静的な事柄を表すものに相当し、《状態》より「静的」という用語が適切ではないかと思われる。

ところで、一時的なものと恒常的なものをひとまとめにする「静的な事柄」の捉え方では、テンス的な意味の実現条件を明らかにさせることができないと思われる。たとえば、次の例 4、5 における述語はいずれも「静的な事柄」とされているが、両者の過去形が異なった意味を表す。例 4 の「涼しい」は一時的な現象を表し、過去形が発話時を基準とする〈過去〉のテンス的意味を実現するが、例 5 の「高い」は恒常的な特徴を表し、過去形がテンス的意味ではなく、〈体験的確認〉というムード的意味を表すのである。

(4) 昨日は涼しかった。（作例）
(5) 富士山は高かった。（作例）

6. 奥田（1988a・1994・1997）などにおける《状態》《状態動詞》

前述のように、日本語の文法研究においては、《状態》という用語が頻繁に用いられているのだが、日本語の《状態》に対して、それを明確に語彙的な意味のレベルに位置づけ、そしてその時間的な性格や意味内容の本質を全面的に探ろうとしたのは、奥田靖雄氏が初めてではないかと思われる。奥田氏は、時間の意味の中心的な文法的表現手段であるテンス・アスペクトの研究を進めるためには、《状態》という用語を見直し、その意味内容を明らかにすることがさしせまった課題であると考えた。筆者の考えている《状態》が基本的に奥田氏の考えを踏襲していることもあるため、以下では、奥田氏の見解やそれに関連する研究について、やや詳しく紹介することにする。

6.1 奥田氏の考え

奥田（1988a）は、鈴木（1983）におけるシテイル形式のアスペクト意味の規定に対する批判から出発する。鈴木（1983）では、継続相のシテイル形式は「動きや変化の状態的な側面」を指し示すとしている。これに対して、奥田（1988a）では、鈴木氏のこのような規定が、継続相のアスペクチュアルな意味の一般化を妨げることになるとし、以下のように、

シテイル形式のアスペクチュアルな意味である「変化の結果」＝「結果的な状態」と《状態》の違いを指摘している（下線は筆者）。

こうして、状態が、そのときそのときの、特徴的な、あるいは優勢な、物のあり方であるとすれば、変化の結果もまた状態であるだろう。ただし、言語の意味の世界では、この状態は、変化の結果として生じているということで、《ただの状態》とはことなる。一時的な状態から恒常的な特性にいたるまで、変化の結果としての消滅と出現、移動の結果としての滞在や不在など、さまざまな変化の結果をふくみこんでいるという意味でも。しかし、《結果性》と言う特徴にひきずられて、この変化の結果を《結果的な状態》という用語のもとにくくることがゆるされるだろう。（奥田 1988a：123）

この《結果的な状態》はただの《状態》ともくべつしなければならない。《状態》も、物そのものにときとしておこってくる、一時的な出来事をとらえているが、それは、変化の結果ではない、ということで、《結果的な状態》とはことなる。《状態》は語彙的な意味として状態動詞のなかにとりこまれているが、《結果的な状態》は変化動詞の継続相のなかにさしだされていて、アスペクチュアルな現象である。したがって、ただの《状態》をさししめす状態動詞は、その語彙的な意味にふさわしいテンス・アスペクトの体系をもっている。（奥田 1988a：130）

すなわち、「結果的な状態」とただの《状態》とでは、アスペクチュアルな現象であるか、語彙的な意味か、というようなレベルの違いがあるのである。このような考えのうえで、奥田氏は語彙的な意味としての《状態》について、その意味内容について、「意味特徴」「時間的限定性」「内的時間的限界」「働きかけ性」「意志制御性」といった面から、次のように説明した（下線は筆者）。

この《状態》のなかにとりこまれる出来事は、みずからの内的な限界によってしきられておらず、持続的である。（奥田 1988a：129）

すでにのべてあることだが、《状態》とは、いちいちの、具体的な物のなかに一時的におこってくる出来事である。この出来事というのは、物の内面や外面で進行する、物それ自身の動きであって、動作のように、ほかの物へはたらきかけていくようなことはしない。（奥田 1988a：131）

しかし、《状態》のなかにとりこまれる出来事は、外的な原因との出あいが偶発的であれば、やはり偶発的である。また、そとがわからのはたらきのもとでバランスをくずすという、内的な原因によって必然的におこってくる、物そのものの動きであれば、それは自然発生的であって、人間の意志にはしたがわない。（奥田 1988a：132）

上記の奥田（1988a）は日本語動詞のアスペクト研究の必要性から、動詞の語彙的な意味

のタイプの《状態》を抽出したが、奥田（1988c）では、動詞述語から述語全体に視野を広げて、《状態》を述語の一つの意味的タイプとして立てている。このように、視野の違いがあるのだが、両者では《状態》に対する見方は基本的に一致していると見ていいと思われる。次に、述語全体を視野に入れた奥田氏の考えを見てみる。

奥田（1988c）では、《動作》《変化》《特性》といった意味的なタイプとの関係の中で《状態》の特徴を捉えている。そこでは、まず、《動作》《変化》と関係づけて、「時間的限定性」と「時間的展開性」の面から、《状態》を「一時的な静的現象」として位置づけている（下線は筆者）。

> くりかえすが、ブルィギナがのべているように、述語の意味的なカテゴリーとしての《質》、あるいは《質》と《特性》と《関係》とは、時間のながれから相対的に独立している物の特徴をとらえて、その物を性格づけている。はんたいに、《現象》は具体的な時間にしばられている、客体の存在の、あるモメントを記述する。そして、具体的な時間のなかに局所限定をうけとる、その《現象》はブルィギナによれば、動的な現象と静的な現象とに大きくわかれる。この静的な現象のなかに《状態》のカテゴリーが位置づけられるのである。（奥田 1988c：122-113）

> 《変化》が物の内面、外面のあり方の更新であるとすれば、《状態》はそのものの内面、外面のあり方である。《状態》のなかに時間のあるモメントにおける、内面、外面のあり方をさらけだすのである。《変化》のなかに状態から状態への移行がうつしだされているとすれば、《状態》は変化によってもたらされる相対的な均衡、不均衡をうつしとっている。こうして、動作と変化、状態とは、現象する、いちいちの物のさまざまな側面、段階を物の存在の具体的なあり方としてとらえている。動作と変化が動的であれば、状態は静的である。したがって、物の具体的な存在は、動と静とのくみあわせである。
> （奥田 1988c：118）

次に、《状態》と《特性》との関係について、両者はそれぞれ「一時的な現象」と「恒常的な特徴」を表し、「時間的限定性」の有無の面で対立していると指摘されている（下線は筆者）。

> この記述からあきらかなように、《特性》は特定の時間にしばられることのない、物にコンスタントにそなわっている、特徴である。それにたいして、《状態》は、特定の時間のなかにあらわれてくる、アクシデンタルな、つかのまの現象である。（奥田 1988c：114）

以上をまとめると、奥田氏は、《状態》の意味内容について、(1) 時間的限定性＝一時的な現象、(2) 時間的展開性＝静的な現象（あたえられた場面の中で開始限界が焦点化される）、(3) 働きかけ性＝無、(4) 意志制御性＝無、(5) 意味特徴＝物の内面や外面で進行する、物それ自身の動き、といった側面から総合的に特徴づけているのである。

《状態》に対するこのような意味規定に基づいて、奥田（1994・1997）では、《状態動詞》として、①人間の生理的な状態（「しびれる」など）、②人間の心理的な状態（「いらいらする」など）、③場所の状態（「にぎわう」など）、④物の状態（「ひかる」など）、⑤自然の状態（「かすむ」など）、といった５つのグループがあるとしている（ただし、⑤についてはっきりした位置づけがない）。また、このような《状態動詞》のアスペクト・テンス的な特徴について、次のように指摘している（下線は筆者）。

> ところで、この状態動詞は継続相のかたちをとって、継続のなかの状態をいいあらわすわけだが、その完成相も、まえの状態からあたらしい状態への移行はいいあらわさず、ただの状態の継続をいいあらわす。つまり、状態動詞では、完成相と継続相との、アスペクト的な対立はみられないのである。したがって、あたえられたコンテキスト、あるいは場面のなかで、完成相と継続相ととりかえるとしても、アスペクト的な意味にはちがいが生じてこない。このような現象がなぜおこってくるのか、といえば、状態動詞がいいあらわす《状態》は、それ自身で限界をもたず、継続的であるため、完成相において状態の終了をいいあらわすことができないからである。しかし、なおかつ、完成相は交替を、継続相は同時をいいあらわすという、機能的なつかいわけはもたれているようである。このようなばあいでは、完成相には／あたえられた場面のなかで状態が出現する／という意味あいが生じてくる。（奥田 1994：136）

> このように、《状態動詞》はアスペクトの観点からきわだった特徴をもっているわけだが、さらにこの動詞は「する」という完成相・非過去のかたちで現在テンスをいいあらわしていることでも、変化動詞と動作動詞とはことなっている。（奥田 1994：137）

工藤真由美氏は奥田氏の考えを受け継いで、それを日本語動詞のアスペクト・テンスの研究に適用した。工藤（2014）では、まず、《状態動詞》を「時間的限定性」と「時間的展開性」の面から規定している（下線は筆者）。

> 《状態動詞》は、時間的限定性のある点では、運動動詞と共通するが、時間のなかでの動的展開のない持続的な〈静的現象〉を表す。時間のなかでの動的展開性がないとは、〈終了〉なり〈開始〉なりの〈時間限界〉が明確にはないということを意味する。（工藤 2014：67）

さらに「主体の意志性の有無」という条件を加え、アスペクトの観点から日本語の運動動詞を次のように分類している。

A【主体動作客体変化動詞】 …… ＜開始限界・必然的終了限界有／主体の意志性有＞

B【主体変化動詞】 …… ＜必然的終了限界有／主体の意志性無＞

B.1【主体変化主体動作動詞】

B.2【主体変化動詞】

C【主体動作動詞】 …… ＜開始限界有／主体の意志性有＞

C’【現象（動き）動詞】 …… ＜開始限界有／主体の意志性無＞

D【状態動詞】 …… ＜時間的限界性無／主体の意志性無＞

1）自然現象

2）思考

3）感情

4）知覚・感覚

工藤(2014)における分類の特徴は、動詞グループの間の連続性を重要視することである。つまり、C「主体動作動詞」の下に、C’「現象（動き）動詞」(「光る」「泣く」など）という中間的なグループを設け、それが意志性のない主体の場合はD「状態動詞」に近いとし、動詞グループの間の境界線を絶対化しないのである。一方、奥田氏ではこのような中間的なグループの一部のものも《状態動詞》として扱っている。このことと関わって、工藤氏と奥田氏の考えは、基本的には一致しているものの、状態動詞の振り分けについては違いが出てくる。両氏における《状態動詞》の下位分類と動詞リストを示すと、以下のようになる。

表 2 奥田（1997）における状態動詞の下位分類と所属動詞

奥田（1997）	
Ⅰ人間の生理的な状態	しびれる、ふるえる、ほてる、いたむ、うずく、ひきつる、あせばむ、のぼせる、くらむ、こごえる、がじかむ、つかれる
Ⅱ人間の心理的な状態	①なごむ、やすらぐ、もだえる、いらだつ、あきれる、こまる、おどろく、やける、うかれる、たまげる、まいる、めんくらう、たかぶる、まよう、たいくつする、はじる、おびえる、よろこぶ、かなしむ ②みえる、きこえる
Ⅲ場所の状態	にぎわう、こむ、ざわめく、どよめく、混雑する
Ⅳ物の状態	ひかる、かがやく、きらめく、ゆれる、まわる、きしむ、なる、におう、かおる
Ⅴ自然の状態	かすむ、けむる、むす、しばれる、ひえる、しける、あれる、なぐ、ふぶく、しぐれる、ふる

表 3 工藤（2014）における状態動詞の下位分類と所属動詞

工藤（2014）		
【現象（動き）動詞】		動く、囀る、飛ぶ、泣く、鳴く、吠える、もがく、笑う/輝く、きらめく、くすぶる、ごったがえす、ざわめく、そよぐ、照る、轟く、流れる、鳴る、光る、響く、降る、吹く、回る、燃える、揺れる
【状態動詞】	1）自然現象	冷える、吹雪く、流行る
	2）思考	思う、考える、疑う/分かる、察する/祈る、期待する、願う
	3）感情	いらいらする、うんざりする、感心する、感動する、苦しむ、心配する、同情する、悩む、はらはらする、迷う、滅入る、喜ぶ/あきあきする、あきれる、安心する、驚く、がっかりする、困る、せいせいする、退屈する、助かる、びっくりする、ほっとする、まいる、弱る
	4）知覚・感覚	感じる、聞こえる、ざらざらする、つるつるする、匂う、ぬるぬるする、見える/痛む、疼く、くらくらする、（目が）眩む、疲れる、頭痛がする、どきどきする、震える、火照る、むかむかする、（胃が）もたれる/しびれる、（のどが）乾く、（腹が）へる

両氏において共通しているのは、人間の心理的・生理的な現象を表す動詞を《状態動詞》と捉えている点である。ただし、「思う」「考える」などの動詞は、奥田氏によって《状態動詞》ではなく、（使用によっては）感情的な態度の観点から人間を特徴づける「態度動詞」（ほかに「信じる」「憧れる」などがある）とされ、《特性》との連続の観点から捉えられている。また、工藤氏では、奥田氏において《状態動詞》とされている「場所の状態」「物の状態」を表すものや、「自然の状態」を表すものの一部を「現象動詞」（「降る」など）とし、《状態動詞》との連続の中で捉えている。

このように、全体的に見ると、奥田氏における《状態動詞》の方が範囲が広い。これは、奥田氏の段階では、その後のアスペクト・テンスなどを含めた文法体系の研究の理論的な基礎を築くことを目標とし、意味内容の検討を中心にしており、実例に基づいた全面的な記述がまだ整っていなかったことによるのだと思われる。一方、工藤氏はムード・アスペクト・テンス体系を具体的な文法現象の中でそれを捉えるために、その文法現象に応じて動詞の範囲を見定めようとしたと考えられる。

両氏において食い違いが生じている、「思考」「場所の状態」「物の状態」を表すものだけでなく、両者が共通に取り上げている、心理的・生理的な現象に対しても、それらを《状態動詞》として扱うべきかどうかについても再検討の余地がないわけではない。仁田義雄氏は、奥田氏と同じように《状態》を「一時的な現象」としつつも、奥田氏の考えに問題がないわけではないと主張し、《状態》の意味内容について再検討している。次の節では、仁田氏の見解について見る。

6.2 仁田（2001・2012・2016）の考え[注3]

仁田氏は、奥田氏の考えを追いながら、命題の意味的類型としての《状態》に対して詳細な検討を行っている。仁田（2016）では、まず、《状態》に対して、「限定された時間帯の中に一時的に生じる現象」、「とりまく環境からの働きかけの元に、具体的な物の上に生じる物の一時的な存在のし方であり、それは他の状態からの移行とは捉えられていない」（p. 171-172）というように特徴づけ、そして出来事の下位的なタイプについて、「時間的限定性を持った出来事の中に状態が動作・変化とともに類別されながら、大きくまとめられる」（p. 172）とし、奥田氏に共感を示した。その上で、「動作は、その内実が多様で雑多である。したがって、動き・運動の捉え方の異なりによって、動作と状態との関係・割り振りに大きな違いが出ることになる」とし、「奥田の状態は、筆者の《動き》の側にかなり入り込んだ内実を有する存在になっている」（p. 172）というように、《状態》《動作》の捉え方における奥田氏との違いを表明した。

仁田氏の取り出した命題の意味的類型は《動き》《状態》〈属性〉の３つである。これらの間の関係について、《動き》と《状態》は時間的限定性のある点で《属性》と区別され、そして、《動き》と《状態》とは時間の中で発生・展開・終了していくという展開性があるか否かによって異なると指摘している。なお、《状態》の意味内容については、次のように特徴づけている。

> 〈状態〉の意味的特徴づけとして、(1) 時間的限定性を持っている、(2) 具体的なモノが呈する現れ・モノの存在のありよう、(3) 時間的な内的展開過程を持たない、そしてその現れとして、(a) モノの等質的なありようの存在時間帯での存続、(b) 事態の発生・終焉の端緒が取り出せない、ということが観察できる。 （仁田 2016: 176）

以上に基づいて、《状態》の意味内容に対する奥田氏と仁田氏の考えの違いについて、以下のようにまとめて比較できる。

注3 仁田氏の考えはそのいくつかの論文から伺えるが、ここでは、それらの論文を基に増補と補訂を行った最新の研究である仁田（2016）から引用することにする。

表 4 奥田氏と仁田氏における《状態》の意味内容

	奥田氏	仁田氏
①時間的限定性	有	有
②動的な時間的展開性	無 （ただし、あたえられた場面で「開始限界」が現れる）	無
③働きかけ性	無	規定なし
④意志制御性	無	規定なし
⑤意味特徴	物の内面や外面で進行する、物それ自身の動き	具体的なモノが呈する現れ・モノの存在のありよう

両氏は共通して、《状態》を時間的限定性のある一時的な現象として見ているが、「時間的展開性」の点で食い違いが生じている。そして、仁田（2016）には「働きかけ性」と「意志制御性」に関する規定が見られない。なお、「動的な時間的展開性」においても両氏の見解が別れる。仁田氏によれば、動的な時間的展開性がないというのは、時間的限界性がありえないことであるが、これに対して、奥田氏は、動的な時間的展開性がなくても開始の時間的な限界が与えられることがあるとしているのである。これによって、仁田氏は、奥田氏における《状態動詞》の多くは、動的な時間的展開性のある《動き》を表すものとしてとらえるべきであると主張した。つまり、奥田氏において典型的な状態動詞として取り扱っている生理動詞・心理動詞に関して、「動的な時間的展開性」を持つ《動き》を表すと考えているのである。このことについて、以下のような統語的な証左も取り上げて説明している（例文は仁田（2016）による）。

①生理動詞・心理動詞は、「（シ）ハジメル/ダス」や「（シ）テクル」といった事態の展開の段階・ありようを表し分ける形式を付加できる。

a. 吾一は背すじが急にぞくぞくしてきた。

②「（シ）ソウダ」をつけることができる。下記の例 b は、直後に起こる事態を徴候から推定したものを表すため、時間の流れの中での展開性がある。

b．なんだか足がうずきそうだ。

③「状態」は、基準時点をまたぐ等質的なモノのありようの存続を表すため、スル形で現在を表しうる。しかし、生理動詞・心理動詞のスル形で表す現在は、「あぁ、いらいらする！」のような表出型文が多い。「今/現在」のような時間副詞と共起するとき、「?? {今/現在}いらいらする」は座りが悪いが、「{今/現在}いらいらしている」は座りがいい。したがって、等質的なモノのありようの存続を表すのは、スル形ではなく、シテイル形である。

こうして、仁田（2016）では、（生理動詞の中でも「痛む」をもっとも状態化の進んだものとしているが）、生理動詞・心理動詞が時間的展開過程の持つ「動き」を表していると考

えなければならないと主張し、《状態》の内実は、「ある」「いる」のような動詞以外に、「痛い」「辛い」「心配だ」「病気だ」などの形容詞述語と名詞述語が中心的なものであると結論づけている。

なお、仁田（2016）では、同じく《動き》を表すものとして、「主体運動（主体非変化）」（「破く」など）と「主体変化」（「沸く」など）が指摘されているのだが、生理動詞・心理動詞とこれらの関係や、《動き》における生理・心理動詞の位置づけが明らかにされていない。ただし、「いらいらする」などの生理動詞・心理動詞は、「破く」「沸く」などと違って、スル形式で〈現在の表出〉を表すことができるということが指摘されている。つまり、ムード・テンス・アスペクト体系という観点からは、それらの動詞はお互いに異質なものと見られることになる。以上に見たような意味的類型の妥当性は、体系的な言語記述を進めることに対する有効性という観点から、今後検証する必要があると思われる。

以上、先行研究に関して、《状態》の捉え方に対する異なった見解をもつ３つの立場を概観した。次の節では、先行研究を踏まえながら、筆者の考えを中心に述べる。

7. 《状態》《状態動詞》再考

6.1 節において紹介した奥田氏の考えは、動詞の体系的な研究にとどまらず、工藤編（2004・2007）、八亀（2008）、佐藤（1997・2001）などの、形容詞・名詞の研究にも影響を与え、日本語の述語論、方言類型論の研究に大きく貢献している。このことは、その考え方の普遍性・一般性を裏付けていると思われる。筆者の考えは、基本的に奥田氏の見解をもとにしているのだが、そこには補足すべきところもあると思われる。この節では、先行研究の見解を参照しながら、《状態》の意味特徴と日本語の《状態動詞》の外延をさらに明確にすることを試みる。

7.1《状態》の意味特徴

《状態》という意味的なタイプの特徴を導き出すには、意味的なタイプの全体像を視野に入れたうえで、時間的限定性の観点から、《状態》とそのほかの意味的なタイプとの相互関係を探る必要があると思われる。第 2 章ですでに述べたように、奥田氏の考えに基づいて、工藤（2014）は、時間的限定性の観点から、述語の意味的なタイプを表 5 のように、《運動》《状態》《存在》《特性》《関係》《質》の 6 つに分類している。なお、《運動》という意味的なタイプについては、動詞述語の間の連続性を確認するために、工藤（2014）に従って、アスペクト対立の観点による運動動詞の下位分類をも示している。

表 5　時間的限定性の観点から見る述語の意味的なタイプの全体像（工藤 2014 に基づく）

<table>
<tr><th colspan="2">品詞
時間的限定性</th><th colspan="2">動詞述語</th><th>形容詞述語</th><th>名詞述語</th></tr>
<tr><td rowspan="5">有</td><td rowspan="4">運動</td><td>主体動作客体変化</td><td>開ける、殺す、切る、割る、破る、焼く</td><td rowspan="4"></td><td rowspan="4">（出発だ、卒業だ）</td></tr>
<tr><td>主体変化
A.主体変化主体動作
B.主体変化</td><td>A.かぶる、着替える、着る、集まる、帰る
B.空く、死ぬ、切れる、割れる、破れる</td></tr>
<tr><td>主体動作</td><td>触る、叩く、押す、引く、飲む、走る</td></tr>
<tr><td>現象（動き）動作</td><td>動く、降る、飛ぶ、泣く、輝く、そよぐ</td></tr>
<tr><td>状態</td><td colspan="2">悲しむ、安心する、感激する、寒がる、さびしがる、いらいらする、うんざりする、痛む</td><td>悲しい、安心だ、痛い、臭い</td><td>病気だ、風邪だ、大流行だ</td></tr>
<tr><td rowspan="5">無</td><td>（滞在）存在</td><td colspan="2">ある、いる、存在する、点在する、欠けている</td><td>ない、少ない、多い</td><td>留守だ、いっぱいだ</td></tr>
<tr><td>特性</td><td colspan="2">優れている、ありふれている、しっかりしている</td><td>優秀だ、平凡だ、堅実だ</td><td>緑色だ、優等生だ、心配性だ</td></tr>
<tr><td>関係</td><td colspan="2">一致する、あてはまる、違う、異なる</td><td>等しい、同じだ、ぴったりだ</td><td>大違いだ、共通だ、逆だ、先輩だ</td></tr>
<tr><td>質</td><td colspan="2"></td><td></td><td>哺乳動物だ、人間だ、女だ</td></tr>
</table>

現実の世界の出来事は、時間における存在のしかたの違いによって、具体的な時間に存在するもの（《運動》《状態》《存在（滞在）》）と、時間の外に存在するもの（《存在》《特性》《関係》《質》）に分かれる。また、具体的な時間に存在する出来事には、動的な時間的展開をもつものとないものがあり、《状態》は、動的な時間的展開性のない一時的な静的現象として位置づけれられる。このように、《状態》については、時間的限定性の有無の観点から時間的限定性のないものから区別し、さらに、時間の中での動的な展開の有無の観点から、動的な時間的展開性のあるものと対比して特徴づける、という点では、奥田氏と仁田氏は一致しており、本研究も、そのような立場をとる。

では、6.2 節で見たような、奥田氏と仁田氏の間で《状態》の意味内容と《状態動詞》の振り分けに関する違いが出る要因は何かというと、それは「動的な時間的展開性」に対する見解の相違ではないかと思われる。奥田氏は、時間の中での動的な展開性を、単語の語彙的な意味に含まれる性質として扱っている。《状態》という意味的なタイプの語彙的な意味それ自身に動的な展開がないというのは、語彙的な意味における開始、終了の時間限界がないこと（無限界動詞であること）を意味する。ただし、奥田氏は、「完成相は交替を、継続相

は同時をいいあらわすという、機能的なつかいわけはたもたれているようである。このようなばあいでは、完成相には／あたえられた場面のなかで状態が出現する／という意味あいが生じてくる」（奥田 1994: 39）というように、与えられた場面で先行の動作と交替して状態が出現するというような場合では、外側から開始限界が与えられうる、ということをも認めている。一方、仁田氏は、語彙的な意味における限界性にかかわらず、発生・終焉の端緒を取り出すことが可能なものであれば、すべて動的な時間的展開のあるものに含めている。

たとえば、「いらいらする」などの生理・心理的なものについて、奥田氏は、これらを状態動詞とし、そして、このような状態に対して、「この状態をひきおこす出来事がとりのぞかれないかぎり、あるいはこの状態をとりのぞく、べつの出来事がおこらないかぎり、つづいていくだろう。したがってこの状態それ自身は限界をもたない」（奥田 1994: 143）というように考えているが、仁田氏によれば、これらは、「いらいらしてきた」「呆れてしまった」のように、局面動詞などを使って、事態の発生・終焉の端緒を取り出すことができるため、動的な時間的展開性をもつことになり、状態動詞ではないということになる。

つまり、奥田氏は、時間の中での動的な展開性を語彙的な意味の中に含まれる内的な性質としているが、仁田氏は、これに限らず、文脈的な解釈などの外的な条件との関係を考えているのである。しかし、仁田氏の見解に従えば、例 6、7 のように、そこで状態動詞とされている「ある」「いる」や状態形容詞でも、発生の端緒を取り出すことができることになるのではないかと思われる。

（6）明日の 9 時から大学にいる。（作例）
（7）「走ろう」「足が疲れているから、これ以上走ったら痛いかもしれない」（作例）

この点については、奥田氏のいうように、現実の世界の出来事は、そのほかの出来事との相互作用の中に存在するとすれば、時間の中での動的な展開をもたない《状態》でも、ほかの出来事を起因として、発生することがあるであろうと思われる。ここで重要なのは、《状態》をひとつの意味的なカテゴリーとして抽出するときに、まずは、その語彙的な意味に本来的に含まれる性質を探るべきであるということである。ほかの出来事との関係などの外的な条件は、その次に考えることとなると思われる。

もっとも重要なのは、語彙的な意味における動的な時間的展開性の有無は、根本的にどのようなことに基づいているか、ということを明らかにすることであると思われる。多くの場合、「開ける」「破る」などの運動は、人間の意志によって展開するため、まず、意志性が重要なファクターになる。しかし、「咲く」「死ぬ」のような、人間の意志と関わらない運動（表 5 の主体変化動詞）もあり、これらについても、変化が達成した限界を捉え、時間の中での動的な展開があるといえる。したがって、意志性は動的な時間的展開性の有無に関する決定的な要因ではないと思われる。

ここでは、語彙的な意味における動的な時間的展開性の有無の決め手は、その出来事が外

面的な現象として知覚され、描写することができるかどうか、ということであると考える。運動が時間の中で開始し、継続し、終了する、ということは、人間がそのような展開の過程を知覚し観察できるからこそ、確認される。そもそも外面的な現象としてその存在を捉えられない出来事は、時間の中で展開していることが確認されることはなく、動的な時間的展開性が問題とならない。すなわち、動的な時間的展開性のない《状態》は、典型的には、人間の内面に現れる生理・心理的な現象として存在しており、人間の心理や身体感覚に基づいた内的体験を通じて確認されるのが普通である。状態形容詞の多くは、「痛い」「悲しい」のような、生理・心理的な現象を表すものであることは、このことを物語っているではないかと思われる。

表 5 における、「泣く」「降る」などの「現象（動き）動詞」を奥田氏は状態動詞としているが、工藤氏によると、運動動詞のメンバーではあるものの、意志性がないことから、典型的な運動動詞から区別されている。筆者も、これらを状態動詞として扱うことはできないと考えている。というのは、これらは人間に知覚されることのできる外面的な現象を表しており、時間の中での動的な展開がまったくないわけでもないからである。また、「痛がる」「嬉しがる」など、状態形容詞の語幹と接辞「がる」からなる派生動詞が、《状態》よりも《運動》に近づいているといえるのは、外面的な様子を描写しているためである。《状態》は継続的な現象であるため、状態動詞のスル形式が〈現在〉を表すことができるが、これらのスル形式は〈未来〉を表す。

(8) 明日、雨が<u>降る</u>。(作例)
(9) この言葉に、彼女が<u>嬉しがる</u>だろう。(作例)

つまり、《運動》と《状態》を区別する動的な時間的展開性の有無は、出来事が知覚できる外面的な現象であるかということによると考えられるのである。

以上のことから、筆者の考えている《状態》の意味内容を示すならば、以下ように、５つのファクターが関わることになる。

① 時間的限定性：時間的な限定性のある一時的な現象
② 動的な時間展開：語彙的な意味それ自身に動的な時間展開性がなく、開始・終了の内的時間的限界性を持たない継続的な静的現象である。が、ほかの出来事との交替関係をもつ場合、開始限界が焦点化されうる。
③ 働きかけ性：ない
④ 意志制御性：ない
⑤ 主体の内的体験性：典型的な場合はある

7.2 日本語の《状態動詞》の外延

以上のように、《状態》の内包を規定したうえで、日本語の状態動詞の外延について考えると、「痛む」「どきどきする」「困る」「うんざりする」「くらくらする」など、生理・心理的な現象を表す動詞がもっとも典型的な状態動詞となる。内的時間的限界を持たない継続的な静的現象を表すこれらの動詞は、完成相スル形式で〈現在〉の意味を表す。

(10)「腹が、痛む」(国盗り物語)
(11)「眩暈がするんだ。なんだか、ドキドキする」(花の降る午後)
(12)「困るな。こんなのをわざわざ付けたりして、ぶちこわしじゃないかね」(D の複合)

なお、スル形式は、〈未来〉を表すこともできるが、この場合、条件節(「～と」「～たら」)(例 13)、あるいは文脈にその他の出来事との継起的な関係を伴う(例 14)ことで、外的に時間的な限界を与えられる(破線部)のが普通である。

(13)「私がこんなことを言ったらあなたうんざりするかもしれないけれど、でもこの点がまだはっきりしないものだから…」(R-0 amour)
(14)「この日射しの中でウロついてみろ、頭がくらくらするからな」(カサノバのためいき 世にも短い物語)

さらに、筆者の調査によると、生理・心理的な状態を表す動詞がスル形式をとったとき、用例の約７割が〈現在〉を表し、〈未来〉を表すものは約３割にとどまる。このことも、これらが状態動詞であることを示している。

このほか、状態動詞として捉えられる日本語動詞には、以下のような自然・場所の状態を表す非典型的なものもあると考えられる。

表 6　非典型的な状態動詞

下位類	動詞リスト
①自然の状態	照る、霞む、蒸す、冷える、煙る、どんよりする、湿気る、流行る、流行する
②場所の状態	にぎわう、ざわつく、混む、混みあう、混雑する、騒然とする、ごったがえす、渋滞する、ひっそりとする、がらんとする、がやがやする、(電車が)空(す)く

自然・場所の一時的な状態は、生理・心理的な現象のように、人間の心理や知覚そのものではないが、人間の身体的な体験に基づいて確認されることには違いない。たとえば、例 16、17 のように、「混んでいる」「賑わっている」という状態は、身体的な体験を通して確認される。これらの動詞が〈現在の状態〉を表すには、上記の用例のように、継続相形式を

使う。

（15）入ってきたのは、奈々美。奈々美「あ.....混んですね」（パパはニュースキャスター・スペシャル）

（16）レポーター・松宮一彦「はい、上野演芸場前の松宮です。ここは根津神社も近く、初詣帰りの家族連れやアベックで賑わっています。さて、お正月と言えば、この人たちしかいません！」（パパはニュースキャスター・お正月スペシャル）

8. おわりに

《状態》を一時的な静的現象として規定し、生理・心理的な現象を表す動詞を典型的な状態動詞として扱うことは、アスペクト・テンス対立の観点から重要であるだけではなく、表5が示しているように、動詞、名詞、形容詞の品詞間の連続性や日本語述語全体の意味・文法的な体系の理解においても重要な意味をもつと考えられるが、非典型的な状態動詞については、さらに検討する余地がある。前節で取り上げた、自然・場所の一時的な状態を表すものがそれであるが、そのほかにも、「思う」や「同情する」などは、状態動詞であるとしても、かなり特殊であり、その位置づけが難しい。これらの動詞のスル形式は、〈態度表明性〉を表すというムード的な面に特徴がある。状態動詞の周辺については、今後の研究課題とし、次章では、典型的な状態動詞について、そのムード・テンス・アスペクト体系を考察し、状態動詞の研究の基盤を固めたいと思う。

第４章
感情・感覚・知覚を表す状態動詞のアスペクト・テンス対立とムード

1. 本章の目的

本章は、人称性・ムード性とアスペクト・テンス対立の関係の観点から、感情・感覚・知覚を表す状態動詞のムード・テンス・アスペクト体系について、小説の会話文から集めた大量の実例に基づいて、包括的に考察することを目的とする。

2. 問題の提起

外的運動動詞では、完成相（スル、シタ）と継続相（シテイル、シテイタ）が〈完成性－継続性〉の典型的なアスペクト対立をなす。ところが、すでに多くの指摘があるように、思考・感情・感覚・知覚を表す内的情態動詞は、外的運動動詞と違って人間の内面的活動・状態を表すことから、アスペクト的に特殊である。工藤（1995）では、内的情態動詞は内的活動・状態を表すがゆえに、それを直接把握できるのは話し手のみであることから、人称性・ムード性の違いとからみあって、アスペクト対立が部分的に変容することが指摘されている。つまり、これらの動詞の継続相は、外的運動動詞と同様に、内的情態の〈継続性〉を表し、人称性から解放された〈確認・記述文〉となるのだが（例 1)、完成相のスル・シタ形式は、外的運動動詞と違って、1 人称に限定され、発話時現在の内的情態を表す〈表出文〉となることがある（例 2)。したがって、これらの動詞の完成相と継続相の対立は純粋に時間的なものでなく、人称性とからみあい、部分的に〈表出〉と〈確認・記述〉のムード対立に移行している。

(1) a.「私は疲れている」(作例)
　　b.「彼は疲れていた」(作例)
(2) a.「ああ、疲れる」(作例)
　　b.「ああ、疲れた」(作例)

ただし、ムード・テンス・アスペクト対立に関して、内的情態動詞がすべて同じ特徴を示

すわけではない。特に、「思う」などの思考動詞は、感情・感覚・知覚を表す動詞とも違った、独自のムード・テンス・アスペクト体系（以下 MTA 体系）をもつ[注1]。また、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の MTA 体系も均一である保証はないのだが、従来の研究ではこれについての検証がほとんどなされていない[注2]。本稿では、大量の実例調査に基づいて、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の MTA 体系を記述し、これらの動詞が MTA 体系に基づいてタイプ化されることを明らかにし、その要因について考察する。

3. 調査対象および調査方法

まず、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞が表す「感情」「感覚」「知覚」については以下のように定義する。外的・内的刺激によって自然発生した喜怒哀楽などの一時的な無意識の心的反応、あるいは主体の対象への態度として表現されうる一時的な心的現象を「感情」、外的刺激によって体の感じ取った、寒暖、痛みなどの一時的な無意識の身体反応を「感覚」、感覚器官の働きによる対象の認知や特徴判断を「知覚」とする。

次に、考察対象となる感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の範囲については、工藤（1995、2014）などの先行研究の動詞リストを参考にするだけでなく、小説の会話文に目を通しながら、上の定義に従って、感情・感覚・知覚を表していると思われる用例を収集し、できるだけ網羅的なリストの作成を試みた[注3]（語彙リストは、後述の各節に示す）。

なお、本稿では、工藤（1995）の見解を踏まえ、感情・感覚・知覚を表す動詞の MTA 体系を、ムードをベースにして考える。そして、これらの動詞を述語とする文のムードは、人称性と関わって、大きく〈表出〉と〈確認・記述〉の二種類に分かれると考える。〈表出〉とは、発話時現在における話し手の感情・感覚・知覚の直接的な言語化であり、感情・感覚・知覚を表す動詞では、1 人称・スル／シタ形式という条件によって実現する。〈表出〉のムード的意味をもつ文を〈表出文〉とよぶ。〈確認・記述〉とは、主体の感情・感覚・知覚を対象化して確認したり描写したりするというムード的意味であり、感情・感覚・知覚を表す動詞では、1 人称制限がなく、スル、シタ、シテイル、シテイタ形式のいずれでも表

注1 たとえば、思考動詞「思う」では、1 人称・スル形式のムード的な意味の基本は、〈表出性〉ではなく、むしろ、話し手がどのような思考的な態度や立場をとるかということを他者に向けて表明する、という〈態度表明性〉にある。また、「ほう、若く見えるなア、俺は十七八かと思った」（放浪記）、「よく来たな。有王！おれはもう今生では、お前にも会えぬと思っていた」（俊寛）のように、過去形が、過去の思考活動というより、発話現場での認識の更新を表す場合が出てくる（宮崎 2001）。

注2 工藤（1995）では、スル・シタ形式と〈表出〉との関わりに注目した下位分類がなされている。また、山岡（2000）でも、感情動詞について、話者が発話時の感情を直接に言語化する〈感情表出〉という文機能をスル形式で表す「感情表出動詞」、シタ形式で表す「感情変化動詞」と、スル形式でもシタ形式でも表さない「感情描写動詞」に３分類している。しかし、MTA 体系の観点から、感情・感覚・知覚を表す動詞の下位分類を包括的に行った研究は管見の限り見当たらない。

注3 動詞によっては多義的なものもある。たとえば、「どきどきする」は「感覚」（心臓がどきどきする）と「感情」（胸がどきどきする）、「ちくちくする」は「感覚」（背中がちくちくする）と「知覚」（このズボンはちくちくする）を表す。なお、「腹が立つ」のような慣用句も対象とする。しかし、接尾辞「～がる」のつく「うれしがる」などの派生動詞は内的情態でなく、外的様子を描写しているため、対象としない。

すことができる。〈確認・記述〉のムード的意味をもつ文を〈確認・記述文〉とよぶ。

以下では、まず小説の会話文の実例に基づいて、感情・感覚・知覚を表す動詞の基本 MTA 体系について確認し、その後、そこから外れた体系をもつ動詞について、グループごとに見ていく。なお、調査対象を会話文に限定したのは、MTA 体系は、発話主体と発話時のある対話でなければ基本的なあり方で成立しないからである。

4. 感情・感覚・知覚を表す動詞の典型的な MTA 体系

4.1 典型的な MTA 体系の概観

すでに述べてあるように、感情・感覚・知覚を表す動詞は、1 人称・スル形式が〈表出〉のムード的意味を表すことができる。が、一方で、これらの動詞は〈確認・記述〉のムードのもとでは、外的運動動詞と同様に、スルーシテイルのアスペクト対立が成立する。このような MTA 体系は、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞に共通するものであり、典型的なものであるといえる。表 1 に示した動詞は、この典型的な MTA 体系に従って、テンス・アスペクト形式が使用されるものである。ここでは、それぞれを、感情動詞 1、感覚動詞 1、知覚動詞 1 と呼ぶことにする。

表 1　基本 MTA 体系をもつ感情動詞、感覚動詞、知覚動詞

動詞タイプ	動詞リスト
感情動詞 1	慌てる、落ち込む、感動する、恐縮する、緊張する、白ける、退屈する、照れる、ときめく、戸惑う、悩む、難儀する、迷う、むかつく、気が滅入る、腹が立つ、うっとりする、うんざりする、しょんぼりする、悶々とする、ぼんやりする、いらいらする、ぞくぞくする、どきどきする、はらはらする、むかむかする、むずむずする、わくわくする
感覚動詞 1	疼く、震える、ふらつく、火照る、がくがくする、くらくらする、ずきずきする、(体が)ぞくぞくする、(胃が) ちくちくする、(心臓が) どきどきする、ふらふらする、ひりひりする、(胃が) むかむかする、(背中が) むずむずする
知覚動詞 1	見える、聞こえる、匂う、臭う、むんむんする、ぷんぷんする

これらの動詞は、MTA 体系が共通するのだが、感情動詞、感覚動詞、知覚動詞の別によって、統語論的な特徴が異なる。感情動詞 1 と感覚動詞 1 の主語はいずれも感情、感覚の持ち主となるが、知覚動詞 1 は知覚の対象が主語になる。また、感情動詞 1 の多くは感情を引き起す「原因」を表すニ格名詞（デ格に置き換えらるものもある）とむすびつき（不眠症に／で悩んでいる)、感覚動詞 1 は基本的に体の部分を示すガ格とむすびつく（背中がむずむずする)。また、知覚動詞 1 には、実質上の主語である知覚の持ち主はニ格名詞によって示されうるもの（私には人影が見える）と、それが言語化されないもの（×私には百合の花が匂う）がある。

以下、これらの MTA 体系について、ムードが〈確認・記述〉の場合から見ていく。

4.2〈確認・記述文〉の場合

感情動詞1、感覚動詞1、知覚動詞1は、スル、シタ、シテイル、シテイタのすべての形式が使用される。〈確認・記述文〉では、そのMTA体系が外的運動動詞とほとんど変わらない。まず、完成相の用例を見てみよう（この節の用例は、感情動詞1、感覚動詞1、知覚動詞1の順に２例ずつ配置してある）[注4]。

(1)スル形式

〈確認・記述文〉において、これらの動詞のスル形式は、1人称とも（例1、3、5）、2、3人称とも（例2、4、6）共起できる。これらのスル形式は、1、2、3人称の〈未来〉の感情・感覚・知覚をひとまとまりに捉える〈全一性〉、または〈発生性〉を確認・記述している。〈発生性〉が表されるのは、「もうすぐ」などの時間副詞や「～たら」などの条件節（破線部）によって、感情・感覚・知覚の発生の段階が焦点化される場合である。

1)「仕事が出来そうだな、こんなところにいれば」「まあね。すぐ退屈するさ」（諧調は偽りなり）
2)「私がこんなことを言ったらあなたうんざりするかもしれないけれど、でもこの点がまだはっきりしないものだから…」（R-0 amour）
3)「一度ぜひお手合わせ願います」（中略）「一本は十万円ですか」「うん」「けっこうです。手がふるえるかもしれませんが、一度お願いします」（金融腐蝕列島）
4)「そんなもん、いるかよ」「でも見たわ」「この日射しの中でウロついてみろ、頭がくらくらするからな」（カサノバのためいき 世にも短い物語）
5)「海が見えるよ。もうすぐ見えるよ。浦島太郎さんの海が見えるよ。」（海）
6) 尾島がいきり立って、「お前みたいな小娘に、社長がつとまってたまるか！」と喚いた。「尾島さん……。大きな声を出したら、隣に聞こえますわ」（女社長に乾杯！）

(2)シタ形式

感情動詞1、感覚動詞1、知覚動詞1のシタ形式は〈確認・記述文〉において、1、2、3人称と共起し、主体の〈過去〉の感情・感覚・知覚の〈全一性〉を表す。また、例7、11のように、先行節の出来事との間に継起的時間関係が見られる場合は、〈発生性〉が前面化される。

7) 小田切「キミが飯塚と結婚したと聞いて、正直落ち込んだよ。しかし、そのすぐあとに、素敵な人と出会ったんだ」（結婚ごっこ）
8) 梅「まことに呆れてしまって……おやまさん、さぞ腹が立ちましたろう、私も恂りし

注4 用例については、波線は主語に、実線は述語に、破線は修飾語や複合文で表される状況成分に引く。

ました、山之助さんにも誠にお気の毒で、お前さん何をするのだよ、おやまさんにさ」（敵討札所の霊験）

9）麻子「コーチがエレーヌ選手にお金を渡してたこと、遺書で初めて知ったの。私、震えました。ショックより、怒りで」（ストレートニュース）

10)「それはもう、いよいよこれで表に抜けるというときは、体中がぞくぞくしましたね。ですから一度成功するとやめられなくなるんです」（愚か者の舟）

11）（今日子）「（頷き）窓ガラスの割れる音がして、それから悲鳴が聞こえました」（まいたちの夜）

12)「タワーの周りのあちこちにパトカーが停まっていました。ほかにも何台か車が見えました。みんな警察の車だったんでしょうね。（後略）」（理由）

シタ形式においては、1 人称の使用が圧倒的に多い[注5]。人間の内面的活動・状態を直接に確認できるのは話し手だけであるからである。2、3 人称では、例 8 のように「だろう」「そうだ」のような推量、伝聞を表す助動詞を伴って、2、3 人称の過去の感情・感覚・知覚に対する間接的な確認を表すものが基本である。なお、スル形式にこのような 1 人称の偏りがないのは、未来の感情・感覚・知覚は確認できないためである。

(3)シテイル形式

続いて、継続相について見ていく。これらの動詞のシテイル形式は、〈確認・記述文〉に現れて、1、2、3 人称と共起し、主体の〈現在〉の感情・感覚・知覚の〈継続性〉を対象化して確認・記述している。

13)「いいえ、ほんとは私だってすこし緊張してますわ、生番組ですもの。でも、以前何回かカメラの前に立った経験がありますのでね」（危険な愛のかおり）

14)「あれも一人で、田舎では話し相手もなく退屈しておる」たしかにそのように学のある才女は、畏敬されこそすれ、裏では女だてらに変り者よと指差されるのが落ちだった。（花埋み）

15)「僕……？僕はいまかえったばかりだ。酔っぱらってまだふらふらしてるよ。用があるなら早くいってくれ」（女が見ていた）

16)「きみ、震えてるよ」「まるで無血の果し合いでも目撃したような気分だわ。わたし—」ウェイターが通りかかったので口をつぐんだ。（愛と哀しみのメモワール）

17)「（前略）今か？H 公園だ。そう、すぐ近くのな。ここからマンションが見えてるよ。ああ、もう少し休んでから帰るよ.....心配するな、もういいんだ。.....何故って？まあいいじゃないか、とにかく心配無用だ。じゃ.....な」（放課後）

注5 筆者の調査では、全体的にみると、シタ形式は 1 人称が 7 割強を占める。

18）みゆき「大丈夫？二日酔い」竜太郎「(空元気で）全然」みゆき「(顔をしかめて）まだ匂ってるよ、アルコール」(パパはニュースキャスター)

(4)シテイタ形式

シテイタ形式も、1、2、3 人称の感情・感覚・知覚の〈継続性〉を対象化して確認・記述している。テンスは〈過去〉となる。

19)「警察へいても、お園さん真面目な顔をして役人に怒鳴りつけるようなことをいうもんやから、わたし、傍に付き添うていてはらはらしてました」(狂乱)

20）浩子「でも、野口くん、辞表を出してから迷ってた。私以外は有本くんも反対だし、部長も絶対認めないって態度だったから.....」(逢いたい時にあなたはいない……)

21)「泣いていたか、彼女は」「恐怖で涙の出る余裕もなかったようだ」「震えていただろう」「ああ、すごかった。痙攣みたいに…壁画の前でガタガタと震えていた」(「伊豆の瞳」殺人事件)

22)「俺もだいぶ酔っぱらってたから、よく憶えてないんっすけど」「五十嵐さんが出ていって十分ほどしてからだったと思う。午前零時過ぎ」「なのかな」「確かに酔っているようには見えましたね。ずいぶん足がふらついていた」(鳴風荘事件 殺人方程式Ⅱ)

23）大塚愛「ずっと部屋に閉じ籠もりっきりで訳判ンないんだけど、泣き声が聞こえてた」(パパはニュースキャスター・スペシャルⅢ)

24）保「帰ってったじゃない」文子「あたしたちに見つかったからでしょ！」悠作「長葱が見えてたよ、袋から」(パパはニュースキャスター・スペシャル)

継続相では、人称の偏りが見られない。話し手が感情・感覚・知覚を対象化しているからである。したがって、1 人称でも、シタ形式のように話し手の直接的な体験性は問題にならないと思われる。

4.3〈表出文〉の場合

この節では、感情動詞 1、感覚動詞 1、知覚動詞 1 が〈表出文〉に現れた場合について見る。これらの動詞のスル形式は、〈現在〉の話し手の感情・感覚・知覚の〈表出〉を表すことができる。当然、人称は 1 人称に限定される[注6]。〈表出〉というムードのもとでは、継続相が欠けているため、アスペクト対立はない。

25)「堪らないよ、退屈するなあ、もう少し広いところへ出してくれないか」(大菩薩峠・

注6 ただし、「腹が立つかね？」(レベル 7）のように、疑問文のとき、2 人称にもスル形式が現れる。

胆吹の巻）

26)「さて、この中から選ばれる日本一の美酒は果たして何でしょう。胸がときめきますねえ。どうぞみなさん、ご自分のお口で、いま一度、確かめてください」（「天の酒」殺人事件）

27)「水はないか。目が廻ったんだ。咽喉がひりひりする」（地球発狂事件）

28)「冷たい…腸筒が、むずむずする……な…んだか…」（花夜叉）

29)「うち！あたしの、うち！」見ると、凍った川の崖ぶちに、私の家がちいさく、朝日の色に染まった白壁を雪のなかからうき出させていた。「ああ。見える、見える。」（忍ぶ川）

30)「これやア。えろう燃やしたもんや。ムンムンするわい」（蠅男）

以上の考察から、感情・感覚・知覚を表す動詞の典型的なMTA体系は次のようにまとめられる。まず、〈確認・記述文〉においては、非過去形（スル、シテイル）と過去形（シタ、シテイタ）が〈非過去〉（＝未来／現在）―〈過去〉のテンス対立をなし、完成相（スル、シタ）と継続相（シテイル、シテイタ）が〈全一性／発生性〉―〈継続性〉のアスペクト対立をなすというように、外的運動動詞とほぼ同様のMTA体系をもつ。外的運動動詞と違いは、シタ形式に見られる1人称の偏りである。また、話し手の現在の感情・感覚・知覚の〈表出〉が表されるときは、スル―シテイルは、テンス・アスペクト的には対立せず、〈表出〉―〈確認・記述〉のムード対立となる。

ところが、感情・感覚・知覚を表す動詞には、このような典型的なMTA体系から逸脱しているものが少なくない。次節ではそれらについて考察する。

5. 典型的なMTA体系からの逸脱

典型的なMTA体系から逸脱した感情・感覚・知覚動詞には、1人称・スル形式だけでなくシタ形式も〈表出〉を表すもの、1人称・スル形式が〈表出〉を表すことのできないもの、継続相が欠けているためアスペクト対立がないもの、アスペクト・テンス形式の意味が特殊化しているもの、という４つのタイプがある。１つ目から見ていく。

5.1 スル形式もシタ形式も〈表出〉を表すもの

前述の感情動詞1、感覚動詞1、知覚動詞1は、発話時現在の話し手の〈表出性〉を表すのに、基本的にスル形式を使用するのだが、表2に示された感情動詞2、感覚動詞2では、シタ形式も用いられる[注7]。

注7 この中の動詞「困る」には、「変な噂をされたら困りますよ！」のような、〈表出〉ではなく、〈態度表明性〉のムード的意味に近い用法がもあるが、そのようなものを除外する。なお、前節の知覚動詞1における「見える」は、「あ、富士山が見えた！」のような用法があるが、これは〈表出〉ではなく、〈発見〉の意味であるため、この節の対象にならない。

表 2 スル形式もシタ形式も〈表出〉を表す感情動詞、感覚動詞

動詞タイプ	動詞リスト
感情動詞 2	呆れる、驚く、困る、参る、弱る、がっかりする、びっくりする、ほっとする、あきあきする、せいせいする、晴れ晴れする
感覚動詞 2	くたびれる、(肩が) 凝る、(足が) 痺れる、疲れる、のぼせる、喉が渇く、腹がすく、腹が減る

統語論的特徴からみれば、感情動詞 1、感覚動詞 1 と変わらず、感情、感覚の持ち主を主語とし、感情動詞 2 の多くは感情を引き起す「原因」を表すニ格名詞（地震に驚く)、感覚動詞 2 の多くは体の部分を示すガ格（足が痺れる）とむすびつく。まず、〈確認・記述文〉から見ていく。

5.1.1 〈確認・記述文〉の場合

まず、感情動詞 2、感覚動詞 2 は、4 節で述べたものと同じように、〈確認・記述文〉において、外的運動動詞とほぼ同じ ATM 体系をなす。つまり、完成相では、スル形式は、1、2、3 人称の〈未来〉の感情・感覚の〈全一性／発生性〉を表し、シタ形式は、主体の〈過去〉の感情・感覚の〈全一性／発生性〉を表す。なお、シタ形式については、1 人称に偏り、断定文のムードは〈体験的確認・記述〉になる（例文は、感情動詞２、感覚動詞２の順に 2 例ずつ挙げている)。

(1)スル形式

31)「ええ、もうなんともかとも謂えないいやな心地だ。この水を飲んだら、さぞ胸が清々するだろう！ああ死にたい。こんな思いをするくらいなら死んだほうがましだ。死のう！死のう！」(義血侠血)

32)「お父ちゃんは、きっと、びっくりするわね」「おきらいかも知れない。ほら、ほら、箱から飛び出した」「セッカチピンチャンみたいね」(人間失格)

33)「きっと夜中にお腹が空きます。その時食べて下さい」(喰いタン)

34)「いらねえですよ」「そうかい。遠慮すると腹がへるぜ。(後略)」(右門捕物帖・首つり五人男)

(2)シタ形式

35)「あの日の夜、十一時頃だったかしら、人目を憚るようにして杉田恵子さんが私の部屋を訪ねてきたわ。同室の宮坂さんが気分が悪いようだから診てほしいって。それで急いで行ってみたんだけど、部屋に入ってみて驚いたわ。(後略)」(放課後)

36)「やはり食べものには一番困りました。秋には蕗の塩煮ばかり四十日間も食べ続けました。年が明けてからは米一合を水にのばして二週間食いつなぎました」(花埋み)

37)「昨夕は、どうでした。疲れましたろう」「いいえ」(虞美人草)

38) ――当時は日野の、お母さんのご両親の家に住んでいたんだよね？「そうです。あんなとこから学校へ通うのもたいへんで、すっごくくたびれた。僕、独り暮らしがしたいって母さんにいったんだけど」(理由)

継続相では、シテイル形式は 1、2、3 人称の〈現在〉の感情・感覚の〈継続性〉を、シテイタ形式は 1、2、3 人称の〈過去〉の感情・感覚の〈継続性〉を表す。

(3)シテイル形式

39)「身体的な衰弱が激しいし、お母さんも心労で相当参っている。このまま放っておくと危ないです」(サイコドクター)

40)「スーパーびっくり大会です。信じられないことが起きたので、ご報告」「新聞は読んでるのか。信じられないことなんか、記事で毎日、飽き飽きしてる」(てのひらの闇)

41)「カンヌよりも、湯船につかっている方が楽しいさ。おれは疲れているよ、ハニー」(私は別人)

42)「分る人もあります。分らんのもあります。旦那さん、ずいぶん結構なお身分で、柔かいお体でございますね。」「凝ってないだろう。」「凝って、首筋が凝っております。ちょうどよい工合に太ってらっしゃいますが、お酒は召し上りませんね。」(雪国)

(4)シテイタ形式

43)「本当。私も洋服の置き場に困ってたの」(女社長に乾杯！)

44)「おばあちゃんがあきれてましたよ」(太郎物語)

45)「だけど、どこもなんともないんですよ、あたし」「なんともない人が気絶しますか」「あの時、お腹へってたの」(鳩笛草)

46)「村の連中は何しろ、おそくまでうちこんで討論したあげくだから、疲れていた」(道標)

5.1.2〈表出文〉の場合

次に、感情動詞 2、知覚動詞 2 では、1 人称・スル形式とシタ形式の両方を用いて発話時現在の話し手の感情・感覚の〈表出性〉を表すことができる。

(1)スル形式

47)「当たり前だけど、慎司から聞かされたのと同じ話です。呆れるなあ。あいつ、ホントにすばしっこい」(鳩笛草)

48)「びっくりするね。すごい世の中だ」「ＰＸとはえらいちがいでしょう。物がねえの

なんのと言ったって、ここに来さえすりゃ何だって手に入るんです―ええと、旦那は二世ですか。そうだよね、で、お里帰りして、お忍びで親類かどなたかを捜してらっしゃる、と。どうです、図星でしょう」（地下鉄に乗って）

49)「疲れるな。みんな……すこしやすもうじゃないか」（冬の旅）

50)「アア、大変だ。咽喉がかわく咽喉がかわく。ああ、たまらない。腹の中じゅう塩だらけになったようだ」（豚吉とヒョロ子）

(2)シタ形式

51）「ほらまた。昨夜は一体何時に寝たんですか？」「午前四時」「呆れたなあ。どこにいたんです？」（女社長に乾杯！）

52）それで、太郎は、後ろからどかんと、黒谷の肩を叩いた。「ああ、びっくりした」（太郎物語）

53)「あー、疲れた。ご飯、行きましょうか」（喰いタン）

54)「喉が乾いたな」「ビールがいいのかしら、それとも水？」（世界の終わりとハードボイルド･ワンダーランド）

これらの動詞には、「感情・感覚の発生」という意味合いが含まれており、感情・感覚が発話時の直前の時点に発生して、発話時現在にも存在している。すなわち、シタ形式には、「発話時における結果、効力の現存」を示す「パーフェクト性」があるといえよう。

なお、これらの動詞は、スル形式もシタ形式も〈表出性〉を表すことができるならば、その使い分けが問題になる。この点について、工藤（1995）では、シタ形式は「一語文的」であり、そしてスル形式とシタ形式が競合する場合には、スル形式の方が「能動的」であると指摘されている。筆者の調査によれば、シタ形式は工藤の指摘通りに一語文が基本であるが、スル形式では、例 47、48、55～58 のように、文脈に感情をひきおこす原因が明示される用法が非常に多く見られることが分かった。

55)「修一郎さんがいないので、ほっとしますね」（冬の旅）

56)「様子はわからんでもいいよ。あの伝馬をたたき売るか、質に入れるかして、おれたちはどっかへ行った方がいいよ」三上は自分の計画を初めて口に出した。「でも、そいつあ困るなあ。僕は海員手帳が預けてあるし行李もあるし、そいつあ弱るよ」（海に生くる人々）

57)「ま、おまえよりは経験があるからな。ああ、慣れない姿勢は疲れるぜ」腕を回しながら、克郎は部屋の隅に移動させてあった椅子にどっかりと腰掛ける。（無作法な紳士）

58)「ああくたびれた」二階へ来て、ぺたりと火鉢の前へ坐った。「とてもひどい人でね――あのひとをかきわけるだけでもいい加減くたびれるわ。ネ」（鏡餅）

これらのグループの動詞では、シタ形式は話し手の現在の感情・感覚の〈表出性〉のみを表すのに対して、スル形式では、表出される感情・感覚に、望ましいとか（例 55)、望ましくないとか（例 56、57、58）の「評価的なニュアンス」が加わっていると思われる[注8]。この点で、スル形式とシタ形式には使い分けの傾向があると見られる。これらの動詞では、シタ形式が〈表出〉を表す中心的な手段であるといえる。

ところで、例 59 のように、4 節におけるスル形式のみが〈表出〉を表す動詞が〈評価性〉のニュアンスを帯びないとは限らない。

59）ギターを弾いていると、弟の浩一がはいって来た。「姉さんのギター聞いてるといらいらするなあ」（恋歌）

したがって、MTA の観点から見て、スル形式のみが〈表出〉をものと、スル・シタ形式の両方が〈表出〉を表すものとは、後者の〈感情・感覚の発生〉の意味合いによって、シタ形式の〈表出〉は〈パーフェクト性〉に関わるという点での違いが重要であろう。

5.2 スル形式が〈表出〉を表さないもの

この節で検討する動詞は、前述のものと違って、1 人称・スル形式が〈表出〉を表さない。このような動詞には 2 つのタイプがある。まず、1 つめは、表 3 における感情動詞 3 のようなものである。

表 3 スル形式が〈表出〉を表さない感情動詞（1）

動詞タイプ	動詞リスト
感情動詞 3	恐れる、悲しむ、悔やむ、後悔する、心配する、ためらう、恥じる、喜ぶ、焦る、苦しむ、飽きる、怯える、感激する、嫉妬する、熱中する、満足する、うろたえる

これらの感情動詞は、統語論的な特徴から見て、主語が感情の持ち主であることが 5.1 節の動詞と共通するが、感情のむかう「対象」を表すヲ格名詞（蛇を恐れている)、ニ格名詞（優秀な人に嫉妬している）とむすびつくものが多いという特徴がある。

なお、MTA 体系の観点から見ると、外的運動動詞と同じように、人称制限のない〈確認・記述文〉のみに現れて、非過去形と過去形が〈未来／現在〉―〈過去〉のテンス対立をなし、完成相と継続相が〈全一性／発生性〉―〈継続性〉のアスペクト対立をなす。

注8 もっとも、このような使い分けはアクチュアルな用法に出てくるものである。「タバコ、吸うんだったら、火をつけてやろうか？」「いえ、タバコは、喉がかわきますから……」（砂の女）のように、話し手の「一般化の判断」などの非アクチュアルな用法では、〈表出性〉がなく、〈評価性〉のみ読み取られ、ムードも〈確認・記述〉になる。

(1) スル形式

60)「……あなたがいなくなったら、お母さんはきっと悲しむ。たった一人の、大切な娘なんだから」(七瀬ふたたび)

61)「御無沙汰しました」「甲府とかときましたが」「ええ、先生は」「いらっしゃいますよ、今お伝えしてきますからね。あなたがお見えと知ったら喜びますよ」(花埋み)

(2) シタ形式

62) みゆき「(ちょっと嫉妬で) .....。パパ、喜んだでしょうね。愛ちゃんたちからのプレゼント」(パパはニュースキャスター)

63)「(前略) そうなれば志賀先生の口から自殺未遂の話が出るのは明白だ。間もなく、君と宮坂が目をつけられるだろう。君達はそれを恐れた。そこで考えたのが、狙っているのは竹井ではなく俺の生命だと見せかけるトリックだ。(後略)」(放課後)

(3) シテイル形式

64)「何時までも、そう礼をおっしゃられると、僕の方が恐縮だな、それより、僕は、あなたが第二外科の教授になったことを、今もって喜んでいますよ、あなたが第二外科の教授になってからは、実によくうちの科に協力して下すって、これは他の大学には見られぬ美徳ですよねえ、この点、あなたには特に礼を云わなくては—」(白い巨塔)

65)「それは、お話しする必要がない。ぼくが、亡くなった母から聞かされた話です。しかし、あなたの作文と、母の話が結びついた時、ぼくは、一つの真相をつかんだ。あなたは苦しんでいる。自分を責めている。それは、理由のないことだ。ぼくは、それを取りのぞいてあげたかった.....」(影の告発)

(4) シテイタ形式

66)「わたし…嫉妬していました。あの事件のショックの中でわたし…多分、自分ではそうと意識しないで彼女のことを憎んでいたんだと思います」(少女達がいた街)

67)「はい、なんですか、主人は、そのバーによく行っていたそうで、マダムとも親しかったそうです。まだ、惨殺死体となって発見される前、マダムの行方が知れない時から、主人は、ひどく心配していました」(影の地帯)

〈表出〉のある感情動詞 1・2 (4 節、5.1 節) がある種の刺激によって生じた無意識的な心的反応であるのに対して、〈表出〉のない感情動詞 3 の多くは主体の意志性を含んだ対象への態度に関わるものである。そのような意識的な態度は、話し手の発話時の感情の直接的な言語化である〈表出〉とは異質なものである。統語論的に感情のむかう「対象」を表す名詞とむすびつくということもこのことと相関する。さらにこの特徴と関連して、「喜ぶ」「怯える」など、これらの一部のシタ形式は 1 人称の偏りがない。なお、感情動詞 3 の中に

も、例 68 のように、1 人称・スル形式が〈現在〉を表すと見られる例があるが、そうしたものは独り言では使えないことからも分かるように、〈表出〉ではなく、〈態度表明性〉というムード的な意味となる。これは、感情動詞一般ではなく、むしろ「思う」などの思考動詞に見られる特徴である。

68)「本大臣は本日ここに諸君に見ゆる光栄を有する事を喜ぶ」(鼻の表現)

次に、〈表出〉のない 2 つめのタイプは、表 4 に示したようなものである。これらの動詞は、主体の態度でないにもかかわらず、1 人称・スル形式が〈表出〉を表さない。

表 4 スル形式が〈表出〉を表さないもの(2)

動詞タイプ	動詞リスト
感情動詞 4	狂喜する、仰天する、困惑する、落胆する、躊躇する、失望する、絶望する
感覚動詞 3	疲労する、上気する

これらの動詞が〈表出〉を表さないのは、文章語的な性質をもつ漢語動詞であることに起因するのではないだろうか。例えば、「仰天する」「疲労する」には類義の和語動詞「驚く」「疲れる」が存在し、それらは例 47、48、51、52 のように〈表出〉が表せることと対照的である。こうして、これらの動詞も、以下の用例のように、〈確認・記述文〉のみに現れて、非過去形と過去形が〈未来／現在〉―〈過去〉のテンス対立をなし、完成相と継続相が〈全一性／発生性〉―〈継続性〉のアスペクト対立をなすにとどまる。

(1) スル形式

69)「阿沙子女史の代作のことかね？」「そう、編集長が聞いたら、仰天するわ」(蒼い描点)

70)「このままだと、先におまえの方が疲労するぞ」(東天の獅子)

(2) シタ形式

71)「俺、自分の中に力があることが判って狂喜した。自分に自信が持てた」(七瀬ふたたび)

72)「事件のことは何も知らないですから、電話をもらって仰天しましたよ。朝早い時刻でしたからね。六時ぐらいじゃなかったかしら。誰もまだテレビも見てないし、ニュースも知らなかった」(理由)

(3) シテイル形式

73)「デスクが狂喜じてるぜ」「なにを」「迫真のドキユメントだとさ」(龍は眠る)

74)「よし、今夜は三本木で充分な休養を取らせる。疲労しているのは、斎藤伍長だけではない。みんな疲労しておる」(八甲田山死の彷徨)

(4) シテイタ形式

75)「誤解もヘチマもないよ。事実は事実だから。ただ、ぼくとしてはだよ、或るかくされた意図で動かされていると思うと、いい気持はしないね」「そうでしょう。ですから、ぼくもお話しするのを躊躇していたのです。ま、先生が気づかれるのを待っていたと言いましょうか」(D の複合)

76)「暑い日だったな。中二の夏だった。(中略) 先生はすぐに知らん顔して『はい、トレモロで』なんて言ったけど、頬はすこし上気してたな」(ブルース)

以上は、〈表出〉との関わり方の違いによって、典型的な MTA 体系から外れているものであった。次に述べるものは、アスペクト・テンス形式が欠けている、または形式の意味が特殊化されているものである。前者の場合から見ていく。

5.3 アスペクト・テンス形式が欠けているもの

語彙数は少ないのだが、表 5 に示した感覚動詞 4 は、継続相で使用されることがほとんどない[注9]。つまり、これらの感覚動詞は、アスペクト対立から解放されるのである。

表 5 A・T 形式が欠けている感覚動詞

動詞タイプ	動詞リスト
感覚動詞 4	痛む、目が眩む、めまいがする

ただし、それらの完成相については、人称性から解放された〈確認・記述文〉では、前述の感覚動詞 1・2・3 と同様に、スル形式は〈未来〉の感覚の〈全一性／発生性〉を表し、シタ形式は〈過去〉の感覚の〈全一性／発生性〉を表す。

(1) スル形式

77)「わかった。もういいよ。これ以上聞くと、また、めまいがする」「そんなに頻繁にするんですか」(愛しい女)

78) 縫うよりも、むしろ傷口をぴっちりあわせておさえたほうがいいと、バルサは判断

注9 ただし、「金に目が眩んでいる」のように、メタファー的な用法の場合には継続相形式の使用がある。なお、「心が痛んでいる」の場合は、「感覚」ではなく、「感情」となる。

した。「ちょっといたむかもしれないよ。」そういって、バルサは、チャグムの傷口を指でそっとつまむようにしてあわせた。（天と地の守り人）

(2) シタ形式

79)「ところが、意外にも、研究所の中に大爆発が起こった。ひどい爆発だった。まったく予期しない爆発だ。わしは一大閃光のために、いきなり目をやられた。わしの脳は、千万本の針をつっこまれたように、きりきりきりと痛んだ。ああ……ううーむ」（超人間Ｘ号）

80)「私のときは、めまいもしたわ。あの人と、そっくりだったわ」（愛しい女）

なお、1 人称・スル形式が〈表出〉を表す。

81)「目が」「なんやて」「痛みます。頭の芯まで、ずきんずきんというて、のし」（華岡青洲の妻）

82)「うわッ。目がくらむ」ふらふらとして、らんかんにしがみついた。（怪星ガン）

継続相が〈確認・記述〉の形式であるとすれば、継続相がないこれらの動詞は〈表出〉への傾斜が強いといえよう。なお、アスペクト対立から解放されているという点では、これらは典型的な状態動詞だといえよう。

前述の継続相のある感覚動詞（「震える」など）の表す感覚は、身体の外的現象として捉えられるものであるのに対して、感覚動詞 4 が表すのは「痛み」「めまい」のような外的現象化されにくい感覚であり、対象化しにくいため、継続相が存在しないと考えられる。ただし、「ずきずきする」「くらくらする」なども「痛み」「めまい」を表すが、継続相をもつ感覚動詞 1 に属する。これらは畳語的なオノマトペを含み、継続性を象徴的に表現していると思われる。

5.4 アスペクト・テンス形式の意味が特殊化されるもの

次に、表 6 に挙げる知覚動詞 2 は、すべてのアスペクト・テンス形式をそろえているが、意味が特殊化している。なお、これらはすべてオノマトペ動詞である点が特徴的である。

表 6 アスペクト・テンス形式の意味が特殊化される知覚動詞

動詞タイプ	動詞リスト
知覚動詞 2	ごわごわする、ざらざらする、すべすべする、つるつるする、ぱさぱさする、（ズボンは）ちくちくする、ぬるぬるする、ぬらぬらする、（石畳は）ひんやりする

これらの知覚動詞も、主語になるのは知覚の持ち主ではなく、知覚の対象であるが、視覚

や聴覚のような「遠隔感覚」（国広 1989）に基づく「見える」「聞こえる」などの知覚動詞 1 と違って、これらは触覚や味覚のような知覚の持ち主と対象が直接接している「接触感覚」（国広 1989）と関わる。スル形式から見ていこう。

(1)スル形式

知覚動詞 2 のスル形式が〈未来〉を表す用法の実例は、今回の調査範囲では見られなかった。このグループのスル形式は、下記の用例のように、実際の接触行為が行われている場合に使われ、1 人称の知覚の〈表出〉を表す。ただし、これと同時に、知覚を通して知られた知覚対象（「着物」「ポークソテー」）の《特性》（「しなやかでない」「うるおいがない」）も捉えられていると思われる。知覚動詞 2 がこのような特徴を持つのは、このグループの動詞が知覚の中でも特に触覚に関する意味を表すからであろう。そのような触覚をもたらす起因は、対象の材質や形状に帰されやすいからである。

83）長男：ごわごわするなあ、この着物。（病む子の祭）

84）まだ何も気づかず、ポークソテーにナイフを入れて「おいしいけど、今日のはちょっとぱさぱさするなあ」と言った自分、一切れフォークに刺して「食べてみて？」と迅人の口元に差し出した自分を思い出すとき、杏は、小さな頃に可愛がっていた、そしてやがて死んでしまった小鳥やハツカネズミを思うのに似た気持ちになる。（だりや荘）

(2)シタ形式

知覚動詞 2 は、シタ形式が、〈過去〉の知覚体験の〈全一性／発生性〉の確認・記述を表すことができる。ただし、このような用法が非常に少ない。今回の調査範囲では、小説の会話文の実例が見当たらなかったが、新聞記事の会話文には次のような実例がある。

85）春休みで友だちと一緒に遊びに来ていた盛岡市の佐々木悠君（９）は、「羊の舌はヌメヌメした。すごい早さで食べたよ」と、興奮していた。（朝日新聞 2004/3/21）

86）ヒラメに初めて触ったという原田碧海（あみ）さん（１０）は「触るとぬるぬるした。大きくなって帰ってほしいと思って放流しました」と話した。（朝日新聞 2017/6/3）

(3)シテイル形式

知覚動詞 2 のシテイル形式は、〈確認・記述文〉に使用されるが、〈継続性〉を表さず、特殊化している。シテイル形式は、「この床はつるつるしている」＝「この床は表面が平滑である」のように、《特性》を表す。統語論的にも特殊であり、主語になるのは知覚のもち主（＝１人称）ではなく、知覚の対象である。なお、この場合でも、例 88 のような接触行為を伴うものが見られる。しかし、スル形式のように〈表出〉ではなく、接触行為によって得られた情報に基づいた、知覚対象の《特性》の判断を表す。

87)「だからほんとに、ダンスに来たってこの人と二人じゃ間が抜けていて仕様がないわ。ぼんやりしているもんだから、さっきも滑って転びそうになったのよ」「床がつるつるしてますからね」(痴人の愛)

88) ケンは両手で、玉太郎のにぎっているものをおさえた。「うん、こりゃ、むずかしいぞ」「ね、なんでしょう」「うん。綱だ。綱に苔がついてぬらぬらしているが、たしかに綱だ」(恐竜島)

(4)シテイタ形式

過去形のシテイタ形式では、シタ形式と同様に、〈過去の知覚体験〉の確認・記述を表す。シタ形式が接触した瞬間の知覚印象を表すのに対して、シテイタ形式では、状態的になる。

89)「手でさわれば判るよ、見なくてもね。ところがすべすべしていた。朽木靖子さんの頬っぺたよりも、遥かにはるかにすべすべだったよ」(死者を笞打て)

90)「大きかったのですか。その洞穴は?」「おとなが身をかがめてはいれるくらいでした。なかは畳二枚敷けるか、もっと広かったかな。天然にできた洞窟だそうですが、なかは氷室のようにひんやりしていたので、津村先生は冷蔵庫がわりにつかっていられたんです」(金田一耕助ファイル 17 仮面舞踏会)

6. 結論

以上をまとめると、感情・感覚・知覚を表す動詞の MTA 体系は均質的なものではなく、〈確認・記述〉〈表出〉のムードとの関係をベースに、次の５つのグループに分類できる。

表 7 感情・感覚・知覚を表す動詞の MTA 体系のバリエーション

<table>
<tr><th colspan="2" rowspan="2">形式、ムード、人称性
動詞グループ</th><th colspan="2">スル</th><th colspan="2">シタ</th><th>シテイル／シテイタ</th></tr>
<tr><th>確認・記述文
(人称制限無)</th><th>表出文
(1 人称)</th><th>確認・記述文
(1 人称に偏る)</th><th>表出文
(1 人称)</th><th>確認・記述文
(人称制限無)</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅰ</td><td>感情動詞 1(むかつく)
感覚動詞 1(震える)
知覚動詞 1(見える)</td><td rowspan="4">T:未来
A:全一性/発生性</td><td rowspan="2">T:現在
A:なし</td><td rowspan="6">T:過去
A:全一性/発生性</td><td>×</td><td rowspan="4">T:現在/過去
A:継続性</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅱ</td><td rowspan="2">感情動詞 2(驚く)
感覚動詞 2(疲れる)</td><td>T:現在
A:パーフェクト性</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅲ</td><td>感情動詞 3(喜ぶ)</td><td rowspan="2">×</td><td rowspan="4">×</td></tr>
<tr><td>感情動詞 4(仰天する)
感覚動詞 3(疲労する)</td></tr>
<tr><td>Ⅳ</td><td>感覚動詞 4(痛む)</td><td rowspan="2">T:現在
A:なし</td><td>×</td></tr>
<tr><td>Ⅴ</td><td>知覚動詞 2
(ごわごわする)</td><td>×</td><td>特性/過去の知覚体験</td></tr>
</table>

グループⅠは、内的情態動詞の典型的なMTA体系をもつ。これらは、〈確認・記述文〉では外的運動動詞とほぼ同じようなMTA体系をもち、〈未来／現在〉―〈過去〉のテンス対立と、〈全一性／発生性〉―〈継続性〉のアスペクト対立が成り立つ。また、話し手の現在の感情・感覚・知覚の〈表出文〉では、1人称・スル形式に限定され、アスペクト対立がなくなる。グループ1がプロトタイプだとすれば、その他のグループでは、〈確認・記述〉と〈表出〉のムードとの関わり方が部分的にグループⅠと異なることによって、MTA体系が分化している。

まず、〈表出〉との関わり方において特殊なのはグループⅡとグループⅢである。グループⅡでは、1人称・スル形式だけでなく、シタ形式も〈表出〉を表す。スル形式が評価性的なニュアンスを持ち、シタ形式が〈表出〉の中心的な表現手段であり、パーフェクト性を持つ。そして、グループⅢでは、〈表出〉を表さず、〈確認・記述文〉のみに現れて外的運動動詞とほぼ変わらないMTA体系をもつ。

次に、グループⅣとグループⅤは、〈確認・記述〉との関わり方が異なる。グループⅣは、〈確認・記述〉の形式である継続相がなく、アスペクト・テンス対立から解放される。また、グループⅤは、スル形式が未来の知覚の確認・記述を表さず、〈確認・記述〉の形式の継続相の意味も特殊化され、〈特性〉となる。

〈表出〉〈確認・記述〉との関わり方の違いは、グループごとの動詞の語彙的な意味の特徴の反映である。まず、グループⅡが表すのは、その発生が捉えられる感情・感覚であり、グループⅢの感情動詞3は、感情の中でも、主体の意識的な態度の側面を表すものである。また、グループⅣは、外的現象化できない感覚を表し、グループⅤは、接触感覚と関わる知覚を表す。つまり、感情、感覚、知覚、発生、態度、外的現象、接触感覚といったカテゴリカルな意味が、感情・感覚・知覚を表す動詞のMTA体系の多様性の起因となるのである（ただし、グループⅢの感情動詞4、感覚動詞3に関しては、これらが文章語の性質をもつ漢語動詞であることによる使用上の制限に起因する）。

以上、本研究では、感情・感覚・知覚を表す動詞のMTA体系の実態について、その全体像の精密な記述を試みた。

第三部

特性動詞の
アスペクト・テンス形式

第 5 章
特性動詞のアスペクト・テンス形式と構文論的機能

1. 本章の目的

本章では、特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能を考察する。その際、終止用法と連体用法の両方に注目する。また、形式の選択の問題については、終止用法では、テクストタイプとの関係に注目し、連体用法では、発話全体に対する考察に基づいて、構文論的機能の違いの観点から分析する。

2. 問題の提起

述語の意味的なタイプとしての《特性》とは、「特定の時間にしばられることのない、物にコンスタントにそなわっている特徴である」（奥田 1998c）。「優れる」「馬鹿げる」「ありふれる」「富む」などの特性動詞については、金田一（1950）の動詞分類では、時間の観念を含まず、終止用法のときにいつもシテイル形式をとる「第四種動詞」として位置づけている。なお、寺村（1984）をはじめとする多くの研究によって、終止用法にくるときにシテイル形式、連体用法にくるときにシタ形式をとるのが普通であるという特徴が指摘されている。このような指摘は基本的には妥当であるが、筆者の調査によれば、終止用法の場合ではスル形式（例 1）、連体用法の場合ではシテイル形式も現れる（例 2）。

(1) 先生の言動は常にウィットに富む。（還暦老人ボケ日記）
(2) それは、たびたびの引越しの間に、失われてしまっていたのですが、あれだけは、たしかに優れている絵だったような気がするのです。（人間失格）

特性動詞は恒常的な特徴を表し、終止用法のスル形式とシテイル形式、そして連体用法のシタ形式とシテイル形式はテンス・アスペクト的に対立しえないため、言語活動の中で、これらの形式がどのように選択されているのかが問題となる。本章は、特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能を全面的に考察し、これらの問題を明らかにすることを目標とする。

3. 先行研究

終止用法のシテイル形式とスル形式の関係について論じた研究が見当たらなかったが、連体用法におけるシタ形式とシテイル形式の使い分けについては、須田（2009）で言及されている。須田（2009）では、連体形が恒常的にそなわった特徴である《特性》を表す動詞について、以下の５つのタイプを提示し、これらの場合ではシタ形式をとるのが普通であると指摘している（例文は須田 2009 による）。

①特性しか表さない動詞

(3) 四件ともどうしようもなく馬鹿げた話だったが、事件としては筋が通っていた。（宮部みゆき・裏切らないで）

②部分・側面の特徴を表すもの

(4) 彼は薄青色の水着を着て、手にホースと柄のついたブラシを持っていた。（小川洋子・ナポレオンフィッシュと泳ぐ日）

③身体的な特徴を表すもの

(5) 小柄な太った女が、赤い馬穴をさげて立っていた。（林芙美子・牡蠣）

④感情を表すもの

(6) 勇輝も驚いた顔で、まっすぐ修一を見つめていた。（重松清・ビタミンF）

⑤現象・状態を表す動詞

(7) 生きたしろうおをたらいに入れて、網杓子ですくって酢じょうゆで食べると、ブルブルッとしてのどごしがうまいって言うんですがね。（向田邦子全対談）

また、シテイル形式が使われるのは、「の」や「やつ」などの形式名詞を伴い、とりたて的、対比的に働く場合であることも指摘されている。

(8) 洋食堂がついているのは、東京発で言うと、一列車の「富士」、二列車の「つばめ」、あと七列車の下関行きの急行ね。和食堂がついているのは特急で言うと「さくら」。（向田邦子全対談）

そして、最後に、須田は、文の成分として、シタ形式をとるものは、「特徴づけ」として機能しており（＝規定語的な機能）、シテイル形式をとるものは「叙述」として機能している（＝述語的な機能）と結論づけている。

しかし、実例調査によると、シタ形式も「の」「やつ」などの形式名詞を伴うことがあるし（例 9）、シテイル形式がシタ形式に置き換えてもよさそうなものもある（例 10、11）。

(9) 中宮からは白い裳、唐衣、そのほか、香の壺には舶来の薫物のすぐれたのをお届けになられた（新源氏物語）

(10) すべてが余りに案外なので、いろいろの経験に富んでいる槇原も煙にまかれたらし

く、大きい眼を見はったままで木偶のように黙っていた。（半七捕物帳・朝顔屋敷）

(11)そして、その男たちのポケットの上に視線が落ちると、不意に、そわそわとしたように太い髭に手をやった。経験に富んだ彼の眼は、ポケットの中で彼らが握っているものがなんであるかよく知っているのだった。（塙侯爵一家）

本章では、動詞とそれにかざられている名詞の間の関係、そして動詞とそれにかざられている名詞のくみあわせの発話全体との関係を視野に入れて、本来的に時間に縛られない恒常的な特徴という語彙的な意味を備えている特性動詞（須田 2009 における①に当たる）を対象に、そのアスペクト・テンス形式の意味・機能について全面的に考察する。以下では、まず、考察対象となる特性動詞の語彙リストを提示し、下位分類を行う。それから、大量の実例に基づいて、特性動詞の連体用法と終止用法における使用実態および、それぞれの場合におけるアスペクト・テンス形式の分布を調査する。

4. 所属動詞一覧と下位分類

まず、特性動詞に該当する語彙ついては、工藤（1995）、国立国語研究所編（1972）などの先行研究の単語リストから抽出するとともに、小説から目視によって収集し、追加した。これに加えて、国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』（大日本図書）にも目を通し、漏れている語彙を補って、可能な限り網羅的な単語リストを作った。得られた単語と特性動詞の下位分類は、表 1 のようになる。

表１　特性動詞の意味分類と所属動詞一覧

意味タイプ		所属動詞
Ⅰ 客観的な特徴にかかわるもの	形や身体的特徴など	曲がりくねっている、(道) 曲がっている、角張っている、角立っている、切り立っている、骨ばっている うねうね（と）している、くねくね（と）している、でこぼこしている、ぎざぎざ（と）している、ごつごつ（と）している、ぎすぎす（と）している、(子犬) ころころ（と）している、ほっそり（と）している、すらり(と）している、すんなり（と）している、でっぷり（と）している、ずんくり（と）している
	知覚関係	鬱蒼としている、(味) あっさり（と）している、こってり（と）している、(鞄) どっしり（と）している、どろどろ（と）している
	量	富んでいる （坂）だらだら（と）している、広々（と）している
	能力	精通している、長けている、物慣れている
	その他	ありふれている、入り組んでいる
Ⅱ 評価にかかわるもの	言動､態度、性格など	ませている、ひねこびている、(男) にやけている 颯爽としている、恬淡としている、堂々としている、淡々としている、しゃんとしている、(性格) あっさり（と）している、きびきび（と）している、ぴちぴち（と）している、(態度) どっしりしている
	程度、いい／わるいなどの評価	優れている、秀でている、抜きんでている、ずぬけている、ずば抜けている、並外れている、人並み外れている、けたはずれている、才走っている、垢抜けている、しゃれている、馬鹿げている 卓出している、卓越している、卓絶している、冠絶している、きちんとしている、ちゃんとしている、しっかり（と）している、ごみごみしている

次に、この単語リストに基づき、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』、伴一彦氏がＨＰで公開しているシナリオを利用して用例調査を行った。調査結果は次の節から詳述する。

5. 調査結果の概観

5.1 特性動詞の連体用法と終止用法の使用実態

表１に挙げた動詞のすべてを検索して得られた用例数を、小説の会話文と地の文の別に調査した結果、特性動詞の終止用法と連体用法の使用は表２のようになる。すなわち、特性動詞は、全体的にみると、約 85%が連体用法に使用されていて、特に地の文での使用率が高い。なお、この結果は、表１で示した意味分類の違いに影響されない。

表 2　連体用法と終止用法の使用実態（用例数（%））

	会話文	地の文	合計
終止用法	398 (31%)	668 (11%)	1066 (15%)
連体用法	885 (69%)	5348 (89%)	6233 (85%)
合計	1283	6016	7299

5.2 連体用法と終止用法におけるアスペクト・テンス形式の分布

特性動詞では、終止用法の場合と連体用法の場合とでは、アスペクト・テンス形式の使われ方にはっきりとした違いが見られる。すなわち、終止用法の場合では、継続相シテイル形式、シテイタ形式の使用がほとんどであるが（97.6%）、連体用法では、完成相シタ形式の使用が中心となる（96.4%）。なお、終止用法の場合では、スル、シタ形式、連体用法では、シテイル、シテイタ形式の使用も少し見られる。

表 3 アスペクト・テンス形式の分布（用例数（%））

	完成相		継続相		合計
	スル	シタ	シテイル	シテイタ	
終止用法	23 (2.2%)	2 (0.2%)	738 (69.2%)	303 (28.4%)	1066
連体用法	89 (1.4%)	6010 (96.4%)	120 (2%)	14 (0.2%)	6233
合計	112	6012	858	317	7299

表 2 と表 3 に示された傾向については多く指摘されているのだが、実際に調査したものはなく、大規模な調査に基づいて実態を示したのは本研究が初めてではないかと思われる。以下では、テクストタイプ、特性動詞とそのかざられ名詞との関係および、特性動詞とそのかざられ名詞のくみあわせと発話全体の関係を観察しながら、特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能について検討していく。まず、終止用法の場合から見ていく。

6. 終止用法における特性動詞のテンス・アスペクト形式の意味・機能

すでに表 3 で示したように、特性動詞が終止用法に使用されるとき、基本的にシテイル・シテイタ形式が使用されるが、スル形式、シタ形式もごくまれに見られる。まず、もっとも多く使用されているシテイル形式、シテイタ形式について見てみる[注1]。

注1 用例については、終止用法の場合、実線は述語部分に引くが、連体用法の場合、連体修飾の部分に引く。

(1) シテイル形式

終止用法の特性動詞はほとんどがシテイル形式をとる。これらはアスペクト対立から解放されて、主体の恒常的な特徴を表している。

1)「そう。ぼくは彼女の結婚相手を殺した。理由は単純さ。彼女を独占したくなった。それだけ。ぼくは人殺しについては、いまはプロなんだ。もうなにも感じない。かんたんだった。君のいったとおりのことをやったんだ。彼のクルマのブレーキを細工した。そのクルマのそばを妨害しながら走って、事故に追いやるのもかんたんだった。ブロンクス・リバー・パークウェイは二車線でくねくねしている。事故は起きやすい。市警はろくに調べもしなかったよ」(テロリストのパラソル)

2)「女子の感覚は甚だ鋭敏な上、人を一見して衣服から穿いているものまですべてを見抜きその詳細を記憶する能力に優れています。このように女子は細かい事に敏であるから狭い専門分野でさまざまに病気の原因を類推するのは大変に向いた職業と言えます。特に先生のように女性だけの特殊な科は最も適していると思います」(花埋み)

3)「小雪」は、彼を大事にしておけばよかった。安田辰郎は、三十五六で、広い額と通った鼻筋をもっていた。色は少し黒いが、やさしい目と、描いたような濃い眉毛があった。人がらも商人らしく練れて、あっさりしている。女中たちには人気があった。しかし安田はそれに乗って、誰に野心があるというでもなさそうだった。(点と線)

4) 軍師としてこれほどおもしろく、やりがいのあることはない。だからこそ、半兵衛は秀吉に仕えた。さて、秀吉である。この男は、人の心を読むことに長けている。名人といっていい。信長の関心が、一にも二にも美濃攻略以外にないと見、自分自身も一将校の身分ながら、かれの範囲内で美濃攻めのことに没頭しぬいた。(国盗り物語)

上記の例 1〜4 は、主語として示される人・物の特徴に関する情報を客観的に記述しているとすれば、次のようなものは、具体的な根拠に基づいた人・物の特徴に対する判断である。その判断は、例 5〜8 のように、発話者の人・物の外見などに対する観察、人の言動、他者からの伝聞などの根拠に基づいている。なお、このとき、用例が「実に」「とても」のような修飾成分を伴うことが多いことからもわかるように、〈評価性〉を帯びる傾向がある。このような評価的な判断は、特に表 1 のⅡ評価にかかわるものに多く見られる。

5) 瞳はゆっくりと指を曲げたりのばしたりした。「長い指だな。骨ばってる」(赤いこうもり傘)

6) 私は急いで、それを拾い上げたが、見るとそれは先生が大へん欲しがっておられた例の雑誌の写真版だった。いつの間に手に入れられたのか知らんと思って、じっと眺めると、私はハッと顔色を変えた。写真版の隅の方が欠けているではないか。切口も大へんギザギザしている。明かに鋏なぞで切取ったのではなく、手で引ちぎったものだ。

（血液型殺人事件）

7)「モウソンは私に二百磅くれるだけです。けれどモウソンのほうは確かなんです。が、真実の所、私はあなたの会社についてはほとんど知らないのですからね、――」「ああ、あなたは実にきびきびしている！」と、彼は喜びで夢中になっているような調子で叫びました。（株式仲買店々員）

8）兄さんが、待ち構えていて、きょうの首尾を根ほり葉ほり尋ねた。「聞きしにまさる傑物だねえ。」と兄さんも苦笑していた。「どうかしているんだよ、きっと。」と僕が言ったら、「いや、そうじゃない。とても、しっかりしている。世界的な文豪を以て任じている人は、それくらいのところが無くちゃいけない。」兄さんは、やっぱり、少し甘いようだ。（正義と微笑）

上記の用法が会話文にもかたりの文にも現れる。

(2) シテイタ形式

特性動詞は、時間に縛られない恒常的な特徴を表すため、基本的にテンス対立が存在しない。シテイタ形式は話し手が過去に主体の特徴に対する体験を確認するという〈体験的確認〉のムード的意味を表すこととなる。

9)「さっきの話だが、会ったというのは誰だね。尊い坊さんでもくどいて駈け落ちしてきたのかね」などと源氏は冗談をいう。（中略）「かねて、あれほどではおありになるまいと存じていましたが、この上なくお美しくて、亡き御方よりもすぐれていられました」（新源氏物語）

しかし、例 10 のように、特徴が長い時間の間に変化したり、なくなったりする場合、そして、例 11 のように、主体が発話時にすでに存在していない場合では、〈過去の長期的な特徴〉と〈主体の非現存〉といったダイクティックな〈過去〉のテンス的意味を実現する。

10)「たしか十万円そこそこだったと思う。それでもエノモトは、下手な交渉をして申し訳なかったといって謝ったのよ。信じられないと思うけど、あの頃エノモトは本当に紳士だったの」「信じられへんな」「身なりもきちんとしていたし、自分のことをヤクザじゃないといってた。事業をいくつかしているとかで、その名刺をもらった」今は全部捨てちゃったけれど、と彼女は付け足した。（白夜行）

11)「この三人の同期生に仲代二三代という女性がいたそうですが、これが抜群の成績だったそうです。声量もゆたかだし、声の質もよく、また技巧にもすぐれていたんですね。それで、先生がたにも愛され、同期生のなかでは、いちばん将来をしょくぼうされていたそうです」（中略）「そうです、そうです。しかも、もうそののどは不治であ

る。つまり、一生なおらないと医者から宣告をうけたんですね。これは当人としてはひじょうなショックだったんでしょう。それからまもなく自殺したんですが、その遺書のなかに水銀を飲ませた犯人として、さっき申し上げた三人の名前をあげてあったそうです」（まぼろしの怪人）

上記の用法は、発話主体と発話時のある会話文においてのみ成立する。

(3) スル形式

特性動詞はスル形式が存在するのだが、「富む」「優れる」「秀でる」など、限られた動詞しかに現れない。これらの共通点といえば、「変化に富む」「知恵に優れる」「武芸に秀でる」のように、ニ格名詞の表す側面からの特徴づけを表すということである。これらの特性動詞のスル形式もアスペクト・テンス的意味を実現せず、シテイル形式と同じように恒常的な特徴を表す。しかし、スル形式のほとんどは、例 12、13 のような小説の地の文の背景的な情報を解説する部分や、例 14 の論述文などの非アクチュアルなテクストに現れる。つまり、スル形式は、シテイル形式のように、発話現場の具体的な根拠に基づいて、人・物の特徴について評価的な判断を行う機能を持たないのである[注2]。

12）長兄が店を継ぎ、下は松下の工場に働いて、マンガ一人年のはなれた末っ子だったから、甘やかされるというほどでもないが、なにかにつけて兄弟の庇護を受け、それを当り前に思ううち、たしかに腕力、体格は人よりすぐれるのに、気の弱いところがあり、小学校在学中、マンガ自身このことに気がついていた。（心中弁天島）

13）熱塩市はＫホテルから十数キロ南方の保養都市である。熱海や伊東に比べて保養所や別荘が多く、娯楽的要素が少ない。そのために地味ではあるが、家庭的で自然が豊かに残っており、市域は史蹟に富む。また、京浜の文化人の別荘が多く、市民の文化の気風が高い。（異型の街角）

14）常に俳諧に親しんでその潜在意識的連想の活動に慣らされたものから見ると、たとえば定家や西行の短歌の多数のものによって刺激される連想はあまりに顕在的であり、訴え方があらわであり過ぎるような気がするのをいかんともすることができない。斎藤茂吉氏の「赤光」の歌がわれわれを喜ばせたのはその歌の潜在的暗示に富むためであった。（俳諧の本質的概論）

こうして、終止用法における特性動詞のシテイル形式とスル形式は、限られた一部のもの

注2 新聞記事を調べると、これらの動詞のスル形式がしばしば見られるが、やはり、次のよう例のように、基本的に、論述文のような非アクチュアルなテクストにしか見られない。「柳屋が扱う市内の幼稚園・小学校向け指定体操服は木綿と化繊の合繊で、汗をよく吸い、通気性に優れる。生地が厚く、洗濯しても伸びにくい。しかも、尼崎発祥のユニチカ系列ユニチカメイト製だ。」（朝日新聞 2015/10/20）

において、テクストタイプとかかわって、かざられ名詞の特徴に対する発話者の確認の仕方の違いによって選択されるといえよう。

(4) シタ形式

シタ形式の用例は以下の２例しか見当たらなかった。なお、シタ形式と共起できるのは、上記のスル形式とでも共起できる「優れる」「秀でる」などの動詞である。この場合もスル形式の場合と同様に、小説の地の文の背景的説明の部分などの非アクチュアルなテクストにしか現れず[注3]、ダイクティックな〈過去〉の意味を実現しない。

15）もし小江の葦蟹を貰ったら辛塩を塗り臼でついて塩にして永く貯えの珍味とする。こういう覚が母によって仕込まれた。女は歌垣に加わって歌舞する手並も人並以上に優れたが、それよりも、繭を口に含んで糸を紡ぎ出し、機糸の上を真櫛でもって掻き捌く伎倆の方が遥に群を抜いていた。（富士）

16）将校の資質でいって、アイユーブは天才だった。もともとイスマーイール・ベイに買いあげられた十一歳のときから、神童だった。きわめて智明晰、職業軍人の養成学校に入れられても弓術、槍術、馬術と武芸の全般において抜群の成績をあげ、もちろん種々の学芸にも秀でた。主人からは「即戦力」との評価をあたえられて寵愛されたが、いってみればアイユーブは、購入された齢十一の少年の時点で、すでにその才能を十二分に開花させていた。（アラビアの夜の種族）

7. 連体用法における特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能

特性動詞が連体用法に使用される場合では、基本的にシタ形式が用いられるのだが、シテイル、シテイタ、スル形式も少し見られる。基本となるシタ形式から見ていく。

(1) シタ形式

連体用法における特性動詞のシタ形式は、恒常的な特徴を表す。ここでは、特性動詞とかざられ名詞との関係から見て、もっとも多く使われるのは、特性動詞が「類」を表す名詞にかかって、名詞の指し示す範囲を明らかにする〈限定〉[注4]の場合である。下記の用例では、「松」「手」「兵士」「頭脳」の集合を指しており、「曲がりくねった」「骨ばった」などの特性動詞は、それらの範囲を明示しているのである。

注3 人物の生涯を解説するような新聞記事でも、シタ形式が見られる。「道風は藤原佐理・藤原行成とともに三蹟の一人とたたえられた能書家だ。書風は穏やかで、特に草書に優れた。鎌倉時代に編まれた「古今著聞集」によると、醍醐天皇は醍醐寺建立の際、道風に楷書・草書の２枚の扁額を書かせたが、入り口の南大門には楷書より一段低くみられる草書の額をあえて掲げたという。」（朝日新聞 2011/10/06）

注4 〈限定〉と後述の〈具体化〉〈主体的なかかわり〉の用法は、金水（1986）、寺村（1992a）、寺村（1992b）などで指摘された「限定・非限定」「制限・非制限」の連体修飾用法として理解しても差し支えない。

17）停車場はその土地の象徴であると、わたしは前に云ったが、直接にはその駅長や駅員らの趣味もうかがわれる。ある駅ではその設備や風致にすこぶる注意を払っているらしいのもあるが、その注意があまりに人工的になって、わざとらしく曲がりくねった松を栽えたり、檜葉をまん丸く刈り込んだりしてあるのは、折角ながら却っておもしろくない。（綺堂むかし語り）

18）「手って、なんです」「饅頭をくばった手ですよ。お吉さんは或る人間の手から、その饅頭を受け取ったわけでしょう」柔かい白い手だったか、それとも、ごつごつした骨ばった手か……。（御宿かわせみ）

19）カンボジア住民にとって、ベトナム軍は凶暴な「赤いクメール」からの「解放者」であったことはまちがいないが、民族感情の面からいえば、この解放者は、やはり同時に「占領者」でもあった。ベトナム軍側も住民感情を刺激することを避けるため、人々との接触部門にはこの国の言語と気風に精通した、カンボジア生まれの兵士らを重点配置している気配がはっきり感じられた。（戦火と混迷の日々）

20）ただ前にもまして、徹吉は一日の業務を終え、次第に書物が跋扈してきたその自室に戻るとき、ほっと肩をおとし、ようやく一人きりになれたことに、麻薬に浸るような安堵を覚えたことは争えない事実であった。……そして徹吉は、多くの秀でた頭脳とたゆみない観察によって建立された古代の精神医学が、たそがれの中へ、薄闇の中へ、ついには真の暗闇の中へと消えてゆき、解体してゆく歴史を辿っていった。（楡家の人びと）

また、「類」ではなく、「個」を表す名詞にかかって、名詞の範囲を〈限定〉する機能を果たさないシタ形式も見られる。まず、次のようなものは、固有名詞、特定の個体を表す名詞などにかかって、名詞の指し示す人・物の特徴に関する情報を付加して〈具体化〉する機能をしている。連体修飾成分の特性動詞の使用は義務的ではなく、それを取り除くと、情報量が減ることになるが、意思の疎通はできよう。

21）いつもの三冬なら、書物問屋である伯父の家を訪れると、夕飯のさいそくをするのだが、根岸の寮（別荘）で留守居をしている老僕の嘉助が淋しがっていると聞いて、上野山下から車坂の通りに出て、切り立った上野の山を左に見ながら、奥州街道へつらなる往還をすすみ、坂本二丁目と三丁目の境の小道を左に曲った。（剣客商売）

22）「ところでその事務家としまして、」とロリー氏が言った。彼は、その法律に精通した弁護士に先刻その一団から肩で押し出されたようにして、今度はその一団の中へ肩で押し戻されていたのである。（二都物語）

23）その左右に、部下と見える人物が、四五名並んでいた。秘書格の木戸の顔も、それに交っていた。机博士のほっそりとした姿も、その中にあった。頭目が、覆面の中からさけんだ。（少年探偵長）

24）岡の上には到るところに躑躅の花が咲いていた。この花は牛が食わない為に、それでこう繁茂しているという。一周すれば二里あまりもあるという広々とした高原の一部が私達の眼にあった。牛の群が見える。何と思ったか、私達の方を眼掛けて突進してくる牛もある。こうして放し飼にしてある牛の群の側を通るのは、慣れない私には気味悪く思われた。私達は牧夫の住んでいる方へと急いだ。（千曲川のスケッチ）

なお、次のようなものも、〈限定〉の機能を果たさないシタ形式の例である。樋口（1995）では、このような例は、発話においてさしだされているその人の動作を、性格などの観点から意味づけている（破線部）とし、このような意味づけには、主体の思考に基づいて、〈主体的なかかわり〉が映し出されていると説明している。なお、この場合では、用例のように「～か」「～かしら」「～かもしれない」などを伴って、主体の思考、推量などを述べるものが多く見られる。そして、ここでも、連体修飾成分の使用は義務的ではない。

25）「でも、日頃、あんたから聞いている優れた内科医の里見さんが、あんなに断層撮影を要求して来はったからには、やはり何かがあるのやないかしら、手術が成功しても、眼にみえない何かが.....」ケイ子は、女子医大の中退らしい神経の配り方で云った。（白い巨塔）

26）その結果彼の知ったことは、その少年こそ柬埔寨国の皇太子であるということや、其柬埔寨国に恐ろしい革命が起こったということや、その結果王と王妃とが憐れにも牢獄へ投ぜられ、皇太子のカンボ・コマだけが、謀叛人の一味に捉えられ、此澎湖島の岩の間へ捨て去られたということや――要するに彼と交渉のある柬埔寨の国家の兇変を、皇太子の口から知ったのであった。義侠に富んだ九郎右衛門が、その皇子の話を聞いて如何に義憤の血を湧かせたか、如何に皇子に同情したか、それは書き記すにも及ぶまい。（赤格子九郎右衛門）

27）「……ところでこれは、お互いに名誉に関する事ですから御腹蔵なくお話下さらんと困りますが、昨晩、お取り調べの際にあの女は、何か僕の事に就いて話はしませんでしたか」さすがに物慣れた田宮氏も、この質問を聞いた時には真赤になってしまった。（少女地獄）

28）「駐車違反でも、何でも、理由をつけられますよ。今のこの世の中で、何の違反もせずに生きてる人間なんていませんからね」吹田は、平然といった。この男なら、平気で、どんな容疑ででも、　高田を引っ張ってくるだろうと思った。この才走った警部補は、日ごろから、そうした捜査方法をとっているのかもしれない。（寝台特急（ブルートレイン）殺人事件）

（2）シテイル形式

連体用法におけるシテイル形式の特性動詞も恒常的な特徴を表す。そして、シタ形式の場

合と同じように、「類」を表す名詞の指し示す範囲を〈限定〉する機能を果たすことができる。この場合は、須田（2009）において指摘されている通り、形式名詞にかかるものが多い。また、例 30、32、33 のように、取立て的、対比的関係が含まれるものが多い。

29）南極観測が成功するかどうかは、結局はその隊員の素質にかかっていた。各界は、その人選に苦心した。まず健康であること、安定した人格を持った人であり、専門技術に卓越している人であることが選定の基準となった。（昭和新山）

30）「祖谷の近くで、川筋が大きく曲りくねってるところなら、襲うには絶好だな。そうだ。かずら橋のあるところなんかいい。かずら橋の上から鉄砲や矢を射かけ、下で、いかだを押える。どうだ？」（無明剣、走る）

31）むろん西村はあのテニス・コートが、そんなに恐ろしい処と知らなかったであろう。八方に見透しの利く安全無比の通路と思って通ったものであろう。同時に犯人は、工場内部の事情に精通している職工の一人に相違あるまい……という警察側の見込らしかった。（オンチ）

32）水浜は、新聞のインクで真っ黒になってしまった手を、恨めしげに見下ろした。充分に用心はしている。便せんと封筒は、別々の文具店で、一番ありふれているのを買って来た。（メトレス愛人）

33）しかし、近衛兵の多くは士族の子弟から採られている。彼らの誇りは、一般鎮台兵の百姓出とは違うという自負がある。体格も勝れているのだけを検査のときに採っていた。それで、鎮台兵並みに減給するのは怪しからぬというのだった。（象徴の設計）

また、連体用法におけるシテイル形式の特性動詞は、シタ形式と同じように、「個」を表す名詞の特徴の情報を〈具体化〉する機能を果たすことがある。この場合でもやはり例 35、36 対比関係を含むものが多い。

34）シーマスは穴の内部を見回した。すると、でこぼこしている壁面の凹みのひとつが、そのまま横穴として伸びているのを発見した。（ナイトウォッチ）

35）弓場久彦は、およそ国井と対照的であった。まず体形からして筋骨質で角張っている国井に対して、痩せて、ほっそりしている。鼻梁が高く、目が細く唇がうすい。右の耳の下にかなり目立つホクロがあって、横顔のいいアクセントとなっている。（日本アルプス殺人事件）

36）東は、静かな語調で、「敗因を探るのはもう止めましょう、今さら誰がどうといってみても、どうしようもないことだ――、ただ私としては、あなた方の協力を得、しかも実力の点では財前君より優れている菊川君を候補にたてながら敗れたのは、諦めようのない思いがする、しかし、これは誰の責任でもない、すべてこの私の力が足りなかったからです、（後略）」（白い巨塔）

なお、主体の思考に基づいて人の動作を性格などの観点から意味づける〈主体的なかかわり〉の機能の場合は、シテイル形式の頻度が高くなる。〈主体的なかかわり〉の機能を果たすすべての用例を調査してみると、シタ形式の使用率は６割強で、シテイル形式の使用率が３割強を占めている。一方、上記の〈限定〉と〈具体化〉の場合のいずれにおいても、シタ形式の９割強に対して、シテイルの使用率が１割にも達していない。

37）澄子はその異様な光景に思わず身体がすくんだ。それでいて根がしっかりしている彼女は、一般の少女のように、ただ悲鳴をあげたり、顔をそむけたりなどしなかった。（死仮面）

38）「キャーッ！」アトリエで松崎女史たちが聞いたのはその悲鳴である。縫子たちのうちでも比較的しっかりしているこのふたりが、そのような悲鳴をあげたのもむりはない。狼男の狼のようにギザギザとがった歯から、ポタポタと赤い滴が垂れているのだ。（吸血蛾）

39）「それは奥様のお指図のように聞いています」「奥様……」と、角右衛門はいよいよ呆れた。すべてが余りに案外なので、いろいろの経験に富んでいる槇原も煙にまかれたらしく、大きい眼を見はったままで木偶のように黙っていた。（半七捕物帳・朝顔屋敷）

全体的には、連体用法にはシタ形式が現れやすいが、以上で見たように、〈限定〉〈具体化〉の機能の場合で、かつ形式名詞を伴う場合や対比関係が含まれているとき、そして〈主体的なかかわり〉の機能をする場合には、シテイル形式が使用されやすくなるようである。〈対比関係〉と〈主体的なかかわり〉は主体の主観的な思考にかかわることが多く、人間の主観的な態度や立場と相関する述語との共通性が高く、述語的な用法に近いため、シテイル形式が用いられやすくなるのだろう。

（3）スル形式

終止用法の場合にスル形式が使用される「富む」「優れる」「秀でる」のようなものは、連体用法でもスル形式の使用が見られる。シタ形式の場合と同じように〈限定〉の機能をする場合が最も多い。この場合では、シタ形式に置き換えやすい。なお、〈主体のかかわり〉の場合（例 42、43）ではシテイル形式に置き換えやすいであろう。

40）「決断力に富む人間が上に立って、時局を収拾しなければ、幕府は亡びるかも知れぬ」「幕府が亡びますか？」弥平次が、眼を丸くした。（天下を狙う）

41）この点より思へば、予はむしろ、予が恋愛の、かの人において、成就すると、否とを問はず。誰人にてもあれ、予よりも数等優れる人が出で来りて。予の如くに、彼女を愛しくれ、しかして彼女をして、恋愛を感ずるの、幸福なる人とならしめ得なむに

は。（一青年異様の述懐）

42)「どうも、それほど、いやだと仰っしゃるものならぜひもない。……可惜、あなたほどな人物を、七年もこの地の牢城長官の小使みたいに朽ちさせておくのは勿体ないし、また将来とても、とうてい、官界の堕落腐敗のなかに長く晏如としていられるあなたでもないことは知れきっていると思ったからだが……」と、さすが才略の弁に富む呉用もいまはあきらめ顔して。（新・水滸伝）

43)現在、イスマーイール・ベイが二十三人の内閣のなかで三番手、四番手の地位にあまんじているのはムラード・ベイとイブラーヒーム・ベイの提携があるためだが（そして両者がエジプト内閣での首位にあるためだが）、なかでも武力に秀でる肥満体の大人ムラード・ベイが、読み書きのできない無知、文盲であったのだ。（アラビアの夜の種族）

（4）シテイタ形式

連体用法におけるシテイタ形式は 14 例しかなく、非常に少ない。また、「類」を表す名詞と共起しないため、〈限定〉の機能を果たさない。その中では、例 44 のような、名詞の指し示す人が非現存の場合において、〈過去〉のテンス的意味を実現するものがある。この用法は、会話文に限られる。

44）あのころ、後宮に帝の寵愛をきそいあっていられた、花の女御・更衣がたも、あるいは亡くなられ、あるいは行方もしれず零落された方もある。そして、すべての点ですぐれていらした藤壺の宮のおん齢のみじかさ。――それにくらべ、お年かさで、しかもお心ざまも頼りなくいらっしゃる女五の宮や、いかがわしい醜聞で半生を彩ってきた源典侍がかえって長生きして、のんびりと心安らかに仏の道にいそしんだりしている。世の中のことは、定めないものだ、と源氏はしんみりさせられてしまった。（新源氏物語）

なお、上記の〈過去〉の以外の場合では、非アクチュアルなテクストに現れて、テンスの対立がなく、シテイル形式に置き換えてもいいようである。

45）そして、同じマホメッド二世による、一四七五年のカッファ攻略成功と、一五六六年になって為されたキオス島占領は、ジェノヴァ商人を東地中海交易から完全に追放してしまうことになった。だが、航海技術では他を圧して優れていたジェノヴァの船乗りたちの眼が、以後は西地中海、そしてさらに大西洋に向けられるようになるのも、トルコの若者の並はずれた征服欲のおかげであったと、言えないこともない。（コンスタンティノープルの陥落）

46）両事件の「自白」したひとたちは、公判にでもでればすべて明らかになると信じて

「一応自白」したのかも知れませんが、一般の人々はもっとしっかりしていたたよりになる指導者だとおもっていた労働者が、やりもしないことを「自白」したという態度そのものに疑問を感じたのは当然です。だれがみても階級的によわい態度です。(ふたつの教訓)

8. 結論

以上に述べたように、終止用法では、ほとんどの特性動詞は継続相をとるのだが、限られた動詞においてはシテイル形式とスル形式の使い分けが出てくる。その場合、シテイル形式とスル形式は、テクストタイプと関わって、人・物の特徴に対して発話現場の具体的な根拠を通して評価的な判断を行うことできるかどうかといった、確認の仕方の違いと相関している。ただし、この点については、さらに用例の調査範囲を広げて精密に検討する必要がある。

連体用法の場合では、基本的にはシタ形式が使用されるが、シテイル形式も現れる。シタ形式は、名詞のさししめす人・物の範囲を〈限定〉する機能、つまり、規定語的な機能を中心的な機能としている。一方、シテイル形式は、〈対比関係〉を伴った場合、あるいは〈主体的なかかわり〉の機能を果たす場合に使われやすい、つまり、述語的な機能を中心的な機能としている。すなわち、特性動詞の連体用法の形式の選択の問題は、構文論的機能と相関しているのである。

第四部

空間的配置動詞の
アスペクト・テンス形式

第 6 章
空間的配置動詞の
アスペクト・テンス形式とテクスト

1. はじめに

従来の時間的限定性の研究では、《空間的配置》という意味的なタイプは取り上げられていない。この章では、このタイプの独自性を明らかにすることを目的として、《空間的配置》を表す動詞のアスペクト・テンス形式について考察する。まず、従来の研究における空間的配置動詞の扱いを概観し、空間的配置動詞の語彙の範囲や下位分類について考察する。続いて、大量の用例調査に基づいて、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の選択がテクストタイプと相関していることを実証したうえで、空間的配置動詞の代表として「そびえる」を取り上げ、テクストにおけるこの動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能を具体的に記述する。

2. 空間的配置動詞はどのように扱われてきたか

空間的配置動詞とは、「点在する」「散在する」「そびえる」「隣接する」「面する」などのような、人や物の空間的な存在の様態や、人や物の間の空間的な位置関係を表す動詞である。従来の研究は、このグループ動詞の語彙・文法的な特徴に対して、体系的な考察を行ったものはないといってもいい。

まず、語彙体系の記述におけるそれらの動詞の扱いについて、国立国語研究所編（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』（秀英出版）と国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』（大日本図書）を取り上げて概観する。

国立国語研究所編（1972）では、上下、左右、内外、東西南北、ある基準点に対する方向などのような、「方向」を意味特徴とする動詞に関する記述において、空間的配置動詞に触れている。そのうちの「ある基準点に対する方向」の意味特徴をもつものとして、「隔たる」「向かう」「面する」などの空間的配置動詞が取り上げられている。しかし、そこでは、これらの動詞に関わる「方向性」（たとえば、特定の方向かどうか、正面に向いているかどうか、など）が記述の中心となり、これらの表す空間的な位置関係については、方向性が捨象されて単なる位置の表現に近づく場合に触れるにとどまる。たとえば、「面する」について、

例 1 では、正面という方向性がはっきりしているが、例 2 では、方向性が問題にならず、そのもののおかれている位置を表しているとしている[注1]。

(1) 馬に面して彳んだ月下の美女の姿を（高野聖 53）
(2) 日本海に面した直江津と云う小さい小港だった。（放浪記 252）

また、国立国語研究所編（2004）では、動詞の意味的な範疇について、「抽象的な関係」「人間活動―精神および行為」「自然物および自然現象」といった項目が設定されており、空間的配置動詞は、そのうちの「抽象的な関係」に分類されている。「点在する」「散在する」と「面する」「臨む」「対する」などの空間的配置動詞は、「抽象的な関係」の下位項目の「存在」「空間」において取り上げられている。これに対して、「隣接する」「そびえる」「林立する」「貫通する」などの空間的配置動詞は、下位項目の「作用」の中に見られ、空間や存在に関するものとしては扱われていない。

空間的配置動詞は、むしろ、アスペクトとの関連で言及されることが多い。中でも、金田一（1950）が、アスペクトの観点による日本語動詞の分類において、「そびえる」を必ずシテイル形式をとる「第四種動詞」の代表として取り上げたことがよく知られている。ただし、空間的配置動詞という範疇が取り出されているわけではない。

空間的配置動詞を動詞のグループとして取り上げたのは、おそらく、工藤（1995）が初めてであろう。工藤氏は、アスペクト対立の観点から、日本語動詞を次のように３分類している。

(A) 外的運動動詞（あたためる、おとす、あがる、あたたまる、うごかす、等）
(B) 内的情態動詞（おもう、あきらめる、あきあきする、あじがする、いたむ、等）
(C) 静態動詞
(C・1) 存在動詞（ある、いる、そんざいする（そんざいしている）、てんざいする（てんざいしている）
(C・2)空間的配置動詞（そびえている、ひしめきあっている、めんしている、りんせつしている）
(C・3)関係動詞（あたいする、あたる、あてはまる、そうとうする、等）
(C・4)特性動詞（あますぎる、にあう（にあっている、ありふれている、等）

ここでは、空間的配置動詞は、存在動詞、関係動詞、特性動詞と同様に、アスペクト対立から解放されている静態動詞に分類されている。なお、存在動詞と空間的配置動詞のアスペクト的な特徴については、時間のなかに現象したとしても時間的展開がなく、スル―シテイルのアスペクト対立が成立しえない、というようなことが指摘されている。この４つのタイ

注1 用例は国立国語研究所編 1972 から引用しているが、下線は筆者による。

プのうち、存在動詞、特性動詞、関係動詞は、時間的限定性の観点からの述語の意味的なタイプに対応するが、空間的配置動詞のみがそうした扱いを受けていない。

奥田（1992）では、動詞の構文的な機能やテンス、アスペクト、ムード、ヴォイスなどの文法的なカテゴリーの特徴に照応して、動詞の語彙的な意味を次のように分類している[注2]。

Ⅰ 人間の肉体的な動詞（あける、わかす、うつす、にぎる、ゆく、のる、すわる、等）
Ⅱ 心理的な活動（みる、おもう、はなす、ちかう、しらべる、まつ、まう、等）
Ⅲ 変化（われる、かわく、こげる、さく、しぬ、はやめる、等）
Ⅳ 状態（なごむ、ふるえる、よろこぶ、にぎわう、こむ、等）
Ⅴ 自然現象（ふる、ふく、ふぶく、ながれる、まわる、等）
Ⅵ やりもらい活動（やる、あげる、ゆずる、もらう、いただく、もつ、所有する、等）
Ⅶ 人間的な接触（あう、であう、会見する、等）
Ⅷ 社会的な活動（はたらく、つとめる、せめる、入院する、雇用する、ほろぼす、等）
Ⅸ 特性，関係，存在
(1) 特性（すぐれている、ひねこびている、ふとっている、くぼんでいる、等）
(2) 関係（にている、ちがう、ことなる、あたる、ひかえている、そびえている、ならんでいる、むかいあっている、へだたっている、かけはなれている、面している、接している、意味する、あたいする、さす（さししめす））
(3) 存在（ある、いる、存在する）

ここでは、「そびえている」「面している」などの空間的配置動詞は、《特性》を表す「すぐれている」「ばかげている」などと区別されているのだが、「似ている」「違う」などと同様に、《関係》を表すものとされている。なお、これらの動詞の文法的な性質については、終止位置に使われるとき、継続相しかなく、アスペクト対立が成り立たない、といったことも指摘されている。

以上の先行研究では、空間的配置動詞に対して、文法的な特徴の決め手としての語彙的な意味のレベルから捉えている。一方、運動動詞のシテイル形式の表す意味、すなわちアスペクト的な現象のレベルから、空間的な存在や位置関係を表すものについて触れた研究も見られる。　つまり、次に挙げる研究では、空間的な存在や位置関係を表すものは、意味的なカテゴリーとして取り立てられていないのである。

高橋（1985・2003）では、述語に使われて、運動性を失った移動性の動詞（例 3、4）と変化動詞（例 5、6）の継続相形式の派生的な意味の一つとして、空間的な配置を指摘している[注3]。

注2 下位類と単語例に関しては、空間的配置動詞に関連する項目は先行研究のままに挙げ、それ以外の項目は下位類を省略して上位類と代表的な単語のみを示すことにする。以下同様。
注3 用例は高橋 1985 によるが、下線は筆者による。

(3) 海底を何条ものリップルマーク（波状痕）がはしっている。（日本 12）
(4) そこから階段が二階にある家族たちの居間や寝室にのぼっている。（帰郷 21）
(5) 鉱脈は途中の断層できれていた。（厚物 22）
(6) 河口は三角形にひらいている。（日本 120）

このように、空間的配置動詞は、アスペクト対立のないものとして、存在、特性、関係を表す動詞と同列に論じられたり、運動動詞のシテイル形式の派生的な用法に言及するところで触れられたりすることが多く、空間的配置動詞を動詞のタイプとして取り出して、その語彙的・文法的な特徴に関する包括的な記述を行ったものはないといってもいい。

以下では、現実の世界に存在する空間的な配置の類型を考えることから出発し、空間的配置動詞の語彙的・文法的な性質を概観する。

3. 空間的配置の類型と所属動詞

空間的配置動詞の語彙については、最初にこのグループの動詞を取り上げた工藤（1995）のリストを出発点とし、国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』（大日本図書）の「用の類」から空間的配置を表すと考えられる語彙を抽出し、リストを拡張した。表 1 は、収集した空間的配置動詞の語彙を空間的配置の類型によって分類した結果である[注4]。

[注4] 表 1 の空間的配置動詞の所属動詞のリストからわかるように、本発表で取り上げる動詞に一部には、空間的配置の用法をもつ動作動詞（「走る」など）や変化動詞（「広がる」など）が含まれている（「／」の後のもの）。空間的配置動詞をできる限り網羅的に捉え、その全体像を眺めるために、これらを考察対象に含めた。

表 1 空間的配置動詞の下位分類と動詞リスト

下位分類		動詞リスト
Ⅰ「存在の様態」を中核的な意味とするもの	拡散	点在する、遍在する、散在する、乱立する／散らばる
	密集	林立する／集まる、群がる、犇めきあう
	拡張	広がる、延びる、横たわる
	直立	立つ、突っ立つ、直立する
	放置	転がる
	浮沈	浮かぶ、沈む
Ⅱ「位置関係」を中核的な意味とするもの	接近	隣接する、隣り合う、隣る、接する、隣接する、近接する、相接する／
	距離	離れる
	相対	相対する、平行する／対面する、向かい合う、向き合う
	対向	面する、対する／臨む、向かう、向く
	偏在	片寄る、寄る
	接触	掛かる、つく、吸い付く、張り付く、引っ付く、付着する、挟まる、跨る
	被覆	被さる、差し掛かる
	貫通	縦貫する／貫通する、貫く、跨ぐ
	包囲	囲繞する／囲む、包む、取り囲む、取り巻く、包囲する、抱く、覆う
	隔離	挟む、隔てる、かけ隔てる
Ⅲ「存在の様態」と「位置関係」の両方を表すもの	連接	連接する、連なる／並ぶ、立ち並ぶ、続く
	重畳	重なる、折り重なる、積み重なる
	経路	走る、流れる、這う、通る、縦走する
	通過	横断する、縦断する、横切る
	懸垂	垂れる、垂れ下がる、ぶら下がる、枝垂れる
	屹立	そびえる、そびえ立つ、そそり立つ、そばだつ、屹立する、聳立する／

表 1 に示したように、空間的配置動詞は大きく、「空間的な存在の様態」を中核的な意味とするものと「空間的な位置関係」を中核的な意味とするものに分かれる。また、「空間的な存在の様態」と「空間的な位置関係」の両方を表すことのできる空間的配置動詞も存在している。空間的配置動詞がいずれを中核的な意味とするかは、主体の特徴や構文的な特徴と密接に関係している。

まず、「存在の様態」を中核的な意味とする空間的配置動詞には、主体が多数の個体から構成される「拡散」「密集」のような様態に関わる空間的配置を表すものと、主体が単一の個体である「拡張」「直立」「放置」「浮沈」を表すものがある。

前者の場合は、多数の個体が「拡散」または「密集」しているといったあり方での存在を表現している。これらは、構文的には、存在の場所を表すニ格名詞の状況語が必須である。すなわち、これらの空間的配置動詞は、一種の存在動詞である。

(7) 海側に、緑に囲まれたリゾート地が点在している。(スチュワーデス刑事)
(8) 千代田公園周辺は工場が立ち並び、集合住宅や学校も集まっている。(朝日新聞 2013/7/3)

後者の場合は、同様に、構文的にはニ格名詞によって表される存在の場所の状況語が必須である。例 9、10、11、12 は、それぞれ「拡張」「放置」「直立」「浮沈」の用例である。

(9) この石川島はほぼ三角形で、東に石川大隅守の屋敷、西に佃島が、それぞれ堀を隔ててあり、北が大川口、南には海がひろがっていた。(さぶ)
(10) ハットの鎌田の視線の先に、ゆうべのんでいたウイスキーの小瓶がころがっていた。(新橋烏森口青春篇)
(11) 奈良宝隆寺から西一町、そこに大きな畑があり、一基の道標が立っていた。(大鵬のゆくえ)
(12) そこにあるすべての道路標識が今では水面の下に沈んでいる。(海辺のカフカ)

次に、空間的な位置関係を中核的な意味とする空間的配置動詞は、「主体と対象が対称的な関係にある場合」(=「接近」「距離」「相対」) と、「主体と対象が非対称的な関係にある場合」(=「対向」「偏在」「接触」「被覆」「貫通」「包囲」「隔離」) に分かれる。前者では、例 13、14 のように、2つの個体を並立させて主語とする構文 (「A と B は〜」) となる。また、例 15、16 のように、A と B のいずれかを主語とし、もう一方が位置関係の対象を表すニ格名詞あるいはヲ格名詞によって表される場合もある。「主体と対象が非対称的な関係にある場合」は、例 17〜23 のように、対象はニ格名詞 (「対向」「偏在」「接触」「被覆」の場合)、ヲ格名詞 (「貫通」「包囲」「隔離」の場合) によって表される。このような特徴は、「似る」などの関係動詞と共通する。

(13) 山埜町と新倉町は東西に並んで隣接している。(R.P.G.)
(14) 瞳の底に、すみれ色の翳がちらと走ったようだった。同じ内廷でも氷高と母の殿舎は離れている。(美貌の女帝)
(15) 〈琅〉は、義京より西にあり、戎族の土地と隣接している。(五王戦国志 2 落暉篇)
(16) ここはかなり海岸から離れているのに、細長い砂州がいくつか海上に現れている。(北ドイツ=海の街の物語)
(17) ここは揚子江支流の流域で、城下の市街は、海のような太湖に臨んでいた。(三国志)
(18) 西へ歩いて小流に架かる橋 (B) を過ぎると、道幅はふたたび半分に縮まって、南に片寄る (Aの東でも道は南側に片寄っていた) が、しばらくするとまた四メートル幅にもどる。(消えた街道・鉄道を歩く地図の旅)

(19) 桑の茶箪笥に文机、壁には何棹かの三味線が掛かっている。(折鶴)
(20) 梅の木に雪がかぶさっていた。(子どもと詩)
(21) 町を貫通する道路の両端に大木を飾るのは、この地方の風習だ。(吸血鬼ハンター)
(22) 畑のまわりを森が壁のように高く囲んでいた。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)
(23)「高砂と住吉の松は、古より相生と申します。当地と住吉は国を隔てているのに、どうして相生の松というのですか」(戦国秘譚 神々に告ぐ)

そのほか、空間的配置動詞には、「存在の様態」と「位置関係」の両方を表しうるものもある。まず、「連接」「重畳」を表すものものは、例 24、25 のように、複数の主体をとる。この場合、存在場所を表すニ格名詞の状況語をとり、「存在の様態」を表している。一方、これらの動詞は、例 26、27 のように、位置関係の対象を表すニ格補語、ト格補語をとり、主体と対象の位置関係を表すこともある。

(24) クンヌイのマンガン鉱採掘は明治二十年代にはじまり、周辺には美利加、メップ、湯の沢、八雲、初音といった諸山が連なっていた。(花埋み)
(25) 大川口のほうは舟松町、十軒町、明石町などの町家が、広い川のかなたに平べったく並んでいた。(さぶ)
(26) 三棟ある建物のうち、その二棟は米倉として使用し来たったところであり、それに連なる一棟が木小屋である。(夜明け前)
(27) 山岡鉄太郎は清河の首級を受けとるとしばらく隠していた。だが処分に困り小石川伝通院の子院―処静院の住職に依頼して同寺院内に埋めたのである。同寺には妾お蓮の墓と並んでいるが、じつは明治二年(千八百六十九)に清河八郎の郷里へ改葬されたとも伝う。(維新暗殺秘録)

「連接」「重畳」といった空間的配置に関する意味は、主体相互の位置関係においても、主体と対象の間の位置関係においても成り立つものであることから、「存在の様態」と「位置関係」の両方を表すことができるということになる。

「経路」「通過」「懸垂」「屹立」を表す空間的配置動詞は、例 28、29、30、31 のように、「位置関係」を表す。位置関係の対象は、ヲ格名詞(「経路」「通過」の場合(例 28、29))、カラ格名詞(「懸垂」の場合(例 30))、ニ格名詞(「屹立」の場合(例 31))の補語によって表される。ところが、これらの動詞は、例 32〜35 のように、存在場所を表すニ格名詞の状況語と共起して、「存在の様態」を表すこともある。

(28) 街道は、びわ湖の東岸の野を走っている。(国盗り物語)
(29) 村の中央を西から東へ、狭い小川が横断している。(吸血鬼ハンター)
(30) 天井から、くもの巣だらけのカーテンのひもがぶらさがっている。(美しい犬)

(31) すぐ正面に榛名山が青い空に大きく聳え立っていた。(絢爛たる流離)
(32) 緑の樹々が道を挟んでゆるやかに向う側に傾斜している麓に、鉄道線路が幾筋も横に走っている。(草の花)
(33) 常高寺の境内にはＪＲ小浜線と国道２７号が横断しているが、昨年４月に国道のトンネル上部に遊歩道ができた。(朝日新聞 2012/10/2)
(34) その庭に、確かに藤の花房が見事に垂れ下がっていた。(海嶺)
(35) 特に北面には礫岩質のほとんど垂直な岩壁がそびえ立っている。(武田勝頼)

以下では、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式のテクストにおける分布とその意味・機能を中心に考察することにする。

4. テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の分布

小説を対象に空間的配置動詞「そびえる」の調査を行ってみると、会話文でも地の文でも、スル形式はほとんど見当たらないが、一方で、新聞記事を調査すると、スル形式がたくさん出てくる、というように、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の使用はテクストタイプと切り離せない関係にある。この節では、調査対象となるテクストタイプおよびそれらのテクストの特徴を述べ、そして、各テクストタイプにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の分布の調査結果の概観を示す。

4.1 調査対象となるテクストタイプ

文を超えたテクストのレベルでのアスペクト・テンス形式の機能の分析は、すでに工藤(1995)で試みられている。そこで区別されているテクストのタイプは、対話(はなしあい)、フィクション、ノンフィクションである。工藤(1995)におけるテクストの分類は以下のようになる。

(1) 対話(はなしあい)―― 最も基本的なコミュニケーション行為(1, 2, 3 人称)
(2) 3 人称小説の地の文(かたり) ―― フィクション
(3) 1 人称小説の地の文 ―― フィクション
(4) 紀行文・ルポルタージュ ―― 体験的ノンフィクション
(5) 歴史論述文 ―― 非体験的ノンフィクション

(工藤 1995:12)

なお、これらのテクストは、時間構造と人称構造において異なることが指摘されている。(2) と (3) は共通してフィクションであるが、虚構の語り手としての 1 人称の存在があるかどうかで異なる。また、(4) (5) と (1) は現実の発話主体としての 1 人称があるが、テンス形式の使用方法が同じではない。さらに、(4) と (5) は体験性の有無に関わって、ア

スペクト・テンス形式の用いられ方が違う。

本研究は、新聞記事と小説を資料として調査を行った。まず、ノンフィクションのテクストに関しては、これを非体験的なものと体験的なものに分け、前者を新聞記事の論述文で、後者を新聞記事の紀行文・ルポルタージュで代表させる。新聞記事において空間的配置動詞が出現する論述文とは、資料・記録による地域・地方の自然や文化に関する事実、すなわち地誌の論述である。そして、新聞記事の紀行文・ルポルタージュは、書き手（記者）が旅で体験したこと、或いは自ら現地に赴いて取材した内容を記したものである。次は、それぞれの場合の例である。

【新聞記事の地誌論述文】

（36）行橋市に「大橋」という地名がある。大きな橋があったからついたのではない。大橋太郎という人物が開いた町なので、そう名付けられたといわれる。ちなみに「行橋」という地名は、１８８９（明治２２）年４月、行事・大橋・宮市の三つの村が合併し、行事の「行」と大橋の「橋」をとったものだ。(朝日新聞 2013/6/7)

【新聞記事の紀行文・ルポルタージュ】

（37）常陸太田市の鯨ケ丘を歩いた。往時の繁栄の証しである町屋や蔵造りの建物が目につく。東日本大震災の爪痕が残る建物もあった。そんな街並みの中で、空に向かって伸びる鉄筋コンクリートの「梅津会館（市郷土資料館)」は、ひときわ異彩を放っていた。(朝日新聞 2012/3/17)

また、工藤（1995）に従って、フィクションの小説[注5]の地の文を構成する部分として、解説部分と外的出来事提示部分を区別する。前者は時間的な限定のない背景的な情報の説明を行う部分であり、後者は時間の流れの中にある個別・具体的な出来事を描く部分である。このような区別は、アクチュアル性の有無という点で重要である。なお、はなしあいの用例は小説の会話文を対象とした。

【小説の地の文の解説部分】

（38）どうにも気にかかって、昌浩はあのあと口笛で車之輔を呼び出し、都から離れた広沢池に向かった。広隆寺を通り過ぎて大覚寺に向かう途中に、広沢池はある。ここ

注5 １人称小説は、＜わたし＞の違いで、「語り手としてのわたし」と「体験者としてのわたし」という二タイプに分けられる。前者は＜わたし＞を語り手として、自分の出来事について、随想や回顧録、手記の形態で語るものであるに対して、後者は＜わたし＞を体験者として描くものである。したがって、前者は発話行為現場を基準とする「語りの今」を持っているが、後者はない。テンス的に違いがある。しかし、今回は明確な「語り手としてわたし」の用例が見当たらなかったので、「体験者としてのわたし」の用例のみを記述する。また、３人称小説は「１人称小説体験者としてのわたし」の場合と同じく「語りの今」がない、なお人称の区別は本研究の研究対象に影響しない、といったことから、両者を同列させて記述することにする。

には様々な幽霊伝説や妖伝説が伝わっているのだ。（鏡の檻をつき破れ）

【小説の地の文の外的出来事提示部分】

(39)「・・・私にとって君はただ一人の親友だもの」僕は頷いた。車が最後のカーブを曲がると、和虎のアジトの入口が見えた。伸び放題に繁った葦の群れに浮かぶオブジェのごとき見張り小屋があった。表には誰も立っていなかった。そこを中に入って下さい、僕は身を乗り出し運転手に指示を出した。「息子に会って、どうするつもりか知りたい」車が揺れながら敷地内に入ると、急いで訊ねた。（ニュートンの林檎）

こうして、本研究が調査対象とするテクストは以下のようなものである。

表 2　テクストタイプの分類と調査対象

	ノンフィクション	フィクション	はなしあい
非アクチュアル	①新聞記事の地誌論述文（非体験的）	③小説の地の文の解説部分	
アクチュアル	②新聞記事の紀行文・ルポルタージュ（体験的）	④小説の地の文の外的出来事提示部分	⑤ 小説の会話文

4.2 調査結果の概観

以上のようにテクストのタイプを分類したうえで、本来的に空間的配置という語彙的な意味をもつ動詞（表 1 の「／」の前のもの。計 26 語）に対して、朝日新聞記事データベース（1984 年 1 月 1 日～2013 年 10 月 30 日）および、青空文庫、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』、伴一彦氏がホームページで公開したシナリオなどを対象とし、大規模な用例調査を行った。以下は、各テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の用例数とパーセンテージである。

表3　テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の用例数

		ノンフィクション		フィクション		会話文
		新聞記事の地誌論述文	新聞記事の紀行文・ルポルタージュ	小説の地の文の解説部分	小説の地の文の外的出来事提示部分	
完成相	スル	2566 (49.6%)	745 (51.5%)	37 (10.7%)	22 (3.3%)	9 (7.4%)
	シタ	21 (0.04)	0	0	0	0
継続相（シテイル、シテイタ）		2582 (50%)	699 (48.5%)	307 (89.3%)	644 (96.7%)	112 (92.6%)
合計		5169	1444	344	666	121

全体的にみると、空間的配置動詞は、書き言葉によく用いられ、話し言葉に現れにくい。なお、同じく書き言葉の中でも、完成相の現れ方は、ノンフィクションとフィクションの違いで明らかに異なる。フィクションでは、完成相スル形式は非常に少ないのだが、ノンフィクションでは、特に非体験的なテクストである地誌論述文において、継続相とほぼ同じ頻度で現れる。完成相シタ形式は、地誌論述文においてまれに見られただけである[注6]。継続相形式は、ノンフィクションにもフィクションにも現れるが、ノンフィクションでは非体験的なテクストに、フィクションでは外的出来事提示部分に比較的に多く見られる。すなわち、空間的配置動詞のアスペクト形式の出現はテクストのタイプと切り離せない関係にあるのである。

以下では、空間的配置動詞「そびえる」を代表に、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の選択がテクストタイプと相関していることを明らかにし、そのテクスト的機能を究明することを目的とする。

5. テクストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能 —「そびえる」を中心に—

5.1 先行研究

日本語の空間的配置動詞「そびえる」は、金田一（1950）の動詞分類では、終止述語になるときに必ずシテイル形式をとる典型的な第四種動詞とされている。これに対して、影

注6 ただし、シタ形式の出現は「林立する」などの個別単語に限られ、空間的配置動詞一般に見られる現象ではない。たとえば、次のような用例がある。「八幡にはかつて、明治政府によって官営製鉄所が設けられた東田地区に六基、その先の埋め立て地、洞岡地区に四基の高炉があり、十本の煙突が林立した。戦時中は武器のために、戦後は復興のために、鉄を供給し続けた。」（朝日新聞 1995/2/15）
なお、新聞記事には、「茨城県ひたちなか市にこのほど、白い塔がそびえ立った。」（朝日新聞 2010/5/11）、「その現代建築がスクラップ・アンド・ビルドの建設ラッシュを巻き起こす。古い木造建築は跡形もなく壊され、鉄筋の高層ビルが林立した。」（朝日新聞 2004/1/3）、というようなシタ形式の用例も見られるが、これらは、空間的配置動詞ではなく、出現動詞の用法であり、対象としない。

山（2012）では、「そびえる」にはスル形式もあるとし、以下のようなスル形式とシテイル形式の性質の違いに注目している。

①点的時間副詞をとることができるか。

・上海には今のところ超高層ビルが（＊そびえる）そびえている。

②知覚したり撮影したりしたこととして表現できるか。

・向こうの方に超高層ビルが（＊そびえる）そびえているのを見た/写真に撮った。

③時制の混用が可能か。

・この赤チリに入ったのだな、という印象をオレに与えた。前方は険しい山がそびえる。右側を谷にして、登ってきた時よりも急な坂を下った。（南北アメリカ徒歩横断日記）

④主格と場所格の２項を常に必要とするか。

・アルプスの山々が（＊そびえる）そびえている。

これらの相違点から、影山は、「そびえる」のシテイル形式は事象叙述であり、スル形式は属性叙述（場所格の恒常的属性）であると結論づけている。

金田一の単語レベルの分析を文レベルの分析（叙述類型）に発展させた影山（2012）の意義は大きいのであるが、例えば、小説を対象に調査を行ってみると、会話文でも地の文でも、「そびえる」のスル形式はほとんど見当たらず、そこでは金田一の主張が成り立っているようである。一方で、新聞記事を調査すると、影山の指摘通りに、属性叙述（恒常性）を表すスル形式の例がたくさん出てくる。しかし、そこでは恒常性を表すシテイル形式もめずらしくないのである。

本研究では、終止述語になるときの空間的配置動詞「そびえる」のアスペクト・テンス形式の選択がテクストタイプと相関していることを実証し、その意味と機能を明らかにすることを目的とする。

5.2 テクストにおける「そびえる」のアスペクト・テンス形式の分布

「そびえる」は最も基本的な言語行為である対話（はなしあい）にはほとんど現れない[注7]ことから、ここでは、書き言葉のみを対象とし、①新聞記事の地誌論述文、②新聞記事の紀行文・ルポルタージュ、③小説の地の文の解説部分、④小説の地の文の外的出来事提示文、という４つのタイプのテクストにおいて用例調査を行った。テクストにおける空間的配置動詞「そびえる」のアスペクト形式の分布を概観すると、次のようになる（×は用例がほとんどないことを示し、○、△は用例の多少を示す）。

注7 本研究では、朝日新聞記事データベース、現代日本語書き言葉均衡コーパス、青空文庫から採集した1241 例を考察対象としている。このうち、動詞「そびえる」は小説の会話文には見られず、新聞記事ではインタビューにスル形式の「そびえる」がわずか 1 例見られるだけである。

表 4 テクストにおける「そびえる」のアスペクト形式の分布

	ノンフィクション		フィクション	
	地誌論述文（非体験的）	紀行文・ルポルタージュ（体験的）	解説部分	外的出来事提示部分
完成相	○	△	×	×
継続相	△	○	○	○

このように、ノンフィクションとフィクションでは、完成相の現れ方に明らかな違いがある。また、ノンフィクションにおいては、非体験的・体験的の別が完成相と継続相のいずれが中心になるかということに関係している。フィクションにおいては、小説の地の文の解説部分と外的出来事提示部分は、アスペクト形式の分布に関しては違いがないが、その機能は異なる（後述）。以下では、テクストのタイプごとに「そびえる」のアスペクト・テンス形式の意味とテクスト的な機能を実例にもとづいて観察していくことにする。なお、ここでは終止述語になる場合のみを対象とし、連体の位置の場合は扱わない。統語論的な機能の違いによって、「そびえる」のアスペクト・テンス形式の使われ方に違いが出るからである。たとえば、終止述語になる場合にはほとんどないシタ形式が連体の位置には現れる[注8]。

5.3 非体験的ノンフィクションのテクスト—地誌論述文—

非体験的ノンフィクションのテクストである地誌論述文では、「そびえる」の多くはスル形式で現れ、シテイル形式はむしろ少数である。また、ごくわずかにシテイタ形式も見られる。シタ形式はない。このテクストに限らず、終止述語になるときの「そびえる」にはシタ形式はほとんど現れない。

5.3.1 完成相スル形式

地誌論述文における完成相非過去形（スル形式）の「そびえる」を終止述語にする文には、次の 4 つのタイプがあり、区別しなければならない。

１つめは、特定の場所を主題として、その場所の特徴として自然物や建造物がそびえることを述べるタイプである（例 1）。２つめは、「そびえる」主体が主題となるタイプである（例 2）。語順も違ってくる[注9]。

1）九社の造り酒屋が集中するＪＲ西条駅前の通称酒蔵通りには、高さが二十メートル前

注8 たとえば、次のような用例がある。「「とうとう甲を脱いだな。しかし、あそこのカフェーが本物の女だったら、僕らは今ごろこんなお寺の前なんかにいられるもんか。」と矢代は云って眼の前に聳えた白いサクレクールの塔を仰いでみた。」（旅愁）

注9 用例に対する下線については、波線は主語に、実線は述語に、破線は場所を表す補語に、二重線は時間の状況語や修飾語に引いてある

後の煉瓦製の煙突十五本がそびえる。酒米を蒸す大量の湯を薪釜で沸かしていたころの名残で、大半は明治時代後期から昭和にかけて各蔵元が競って造った二代目、三代目の煙突。初代は江戸の末期から明治の始めにかけて造られたが、老朽化して造り替えられたという。(朝日新聞 1999/10/9)

2) 早池峰山（標高一、九一七メートル）は、岩手県北上山地のほぼ中央部にそびえる。古くから霊山としてあがめられる山岳信仰の山だ。農耕の神、漁業の神が住むと信じられた。中世以降、早池峰山には多くの修験者たちが修行の道場を開いた。(朝日新聞 2000/11/20)

例 1 と例 2 は、場所と主体のいずれを主題として述べていくかというテクスト構成上の機能の違いであろう。場所が主題になっているとき、例 1 のような「通り」＝地点（spot）を主題の場所とする場合と、例 3 のような「町」＝地域（area）を主題とし、その部分としてのある地点（spot）(「町の西側の丘の上」）について述べる場合に分けられる。

3) 米国東部、バーモント州にベニントンという町がある。国民詩人ロバート・フロストの墓があり、「マディソン郡の橋」のような屋根付きの橋が今でも五つ残っている。町の西側、小高い丘の上には五十メートルほどの石作りの塔がそびえる。独立戦争の戦況の転換点になったベニントンの戦いの記念碑だ。(朝日新聞 1996/1/15)

ところが、3 つめのタイプとして、例 4 のような、場所も主体も主題化されないスル形式の例が見られる。これは冒頭の文全体が主題となって、第 2 文につながっていくという構成になると思われる。

4) 鳥取市の鳥取砂丘の一角に直径３６メートル、高さ１５メートルの巨大ドームがそびえる。鳥取大の「乾燥地研究センター」の実験用ドーム。様々な乾燥地の気候をシミュレーションできる自慢の施設だ。内部には、乾燥地特有の熱風を再現する装置や人工的に雨を降らせる装置などがそろう。(朝日新聞 2008/10/27)

最後に、4 つめは、「そびえる」の文には場所格名詞と主格名詞のいずれかが欠けているタイプである。といっても、前後の文脈には必ず場所あるいは主体が存在し、それが主題となっている。

5) 丹沢山地の山すそに住宅・都市整備公団が開発した「厚木・森の里」が広がる。中央を南北に走る幹線道路から東側が「研究学園都市」。青山学院大、松蔭女子短大のほか日本電信電話（ＮＴＴ）、富士通など先端企業５社の研究所がそびえる。どの研究所も敷地の半分は緑地が占める。(朝日新聞 1991/2/9)

6）この梅檀の大木の思い出を胸に巣立っていった卒業生は、約８千人になる。２月、創立１３０年を迎えた阿山町馬場の町立河合小学校。その運動場にそびえる。樹齢は約１２０年という。（朝日新聞 2003/5/8）

このように、地誌論述文における「そびえる」のスル形式は、恒常的な空間的存在を表すといってよい。したがって、時間的・空間的な状況を表す条件節（「～と」）がつきそっていても、時間的な条件を表さず、空間的な条件しか表さない。つまり、この条件節は実質的には場所を表している（例７における「門をくぐると」は「門の向こうに」という場所状況語に相当する）。

7）大山祇神社は島西部にあり、貴重な奉納品が多い。宝物館には禽獣葡萄鏡、鎧、兜大太刀などの国宝８点など多数の文化財が収蔵、展示されている。今年４月には、６８８年ぶりに総門が再建された。総ヒノキ造りの壮麗な門をくぐると、国の天然記念物に指定されているクスノキの巨木群がそびえる。（朝日新聞 2010/9/9）

以上のような地誌論述文における「そびえる」のスル形式は、存在場所を表すニ格名詞をともなっており、存在動詞「ある」がスル形式において恒常的な存在を表すのとよく似ている。ここで「そびえる」がスル形式で使用されるのは、存在動詞と等価になっているからであろう。これらの「そびえる」は「空にそびえる」のような典型的な空間的配置を表す用法とは区別すべきである。「そびえる」にこうした存在動詞化が起こるのは、地勢や自然物・建造物の位置を解説することが中心となる地誌論述文の特徴による。

5.3.2 継続相形式

(1) シテイル形式

地誌論述文では、スル形式が多く見られるが、シテイル形式の「そびえている」も見られ、その使われ方に大きな違いはないようである。「そびえている」を終止述語にする文には、前節と同じく４つのタイプがあり（例８と例９はそれぞれ１つめと２つめのタイプに相当する）、条件節（「～と」）を伴う場合（例 10）は空間的な状況を表す。したがって、前節の例の「そびえる」を「そびえている」に変えてもいいし、以下の例の「そびえている」を「そびえる」に変えてもいいだろう。

8）中南米の国、パナマとコスタリカの国境付近には、チリキ山をはじめとする三千メートル級の高峰が連なり、そびえている。その深い山の中に、「インディオ・コネホ」と呼ばれる人たちが住んでいると信じられている。背丈は、この周辺に住んでいるノベ族、テリベ族の人たちよりひとまわり小さく、狩猟採取を生業にしているという。（朝日新聞 2000/11/10）

9)　神明社樹林は約五千平方メートルにヤマモモ、サカキ、ウバメガシなど常緑広葉樹が、自然状態で生えている。クロガネモチとムクは、所有者、伊藤さん方の隣の高台に、そびえている。樹齢約百年で高さ約十三メートル。根の回りは約一・五メートルある。二つの木は支え合って生きており「セットで地域のシンボルになる」という。(朝日新聞 1996/2/17)

10) 清水谷家の椋　京都御苑西側の蛤御門から苑内に入り、御所の方に歩くと、樹齢約３００年の立派なムクノキがそびえている。この辺りに公家の清水谷家屋敷があったのが、名前の由来とされる。(朝日新聞 2009/6/12)

もっとも、次のような例では、「そびえている」がより自然であると思われる。「海底から」「海中から」という補語をともなうことによって、垂直方向の空間的な位置関係を表しており、このような場合は存在動詞化が起こらないと考えられる。ただし、このテクストではこのような例はきわめて少ない。

11) 海保によると、スルガ海山はグアム島の西北西約２００キロにあり、水深約１６００メートルの海底から頂上は水深４０メートルまでそびえている。米国の排他的経済水域（ＥＥＺ）にあるが、海底地名は最初に調査した国・機関が命名するのが一般的という。(朝日新聞 2006/6/21)

12) この沼島はかつて、「日本書紀」「万葉集」「摂津国風土記」に出てくる「野島」だという説もあったが、現在では否定されている。しかし、沼島は古くから海人の住む地であった。淡路本島や四国、紀州に近く、豊かな漁場をもち、水も豊富で、西海岸には船の停泊に都合のよい入り江がある。島の東には、海人たちの信仰心を満たしたであろう巨石が海中からそびえている。そして、製塩遺跡や古墳も残っている。(朝日新聞 2011/3/3)

以上のように、地誌論述文では、「そびえる」は、スル形式でもシテイル形式でも使用され、多くの場合、場所のニ格名詞を伴って、存在動詞的に用いられている。このテクストでは、スル形式とシテイル形式は、時間的限定性の点で対立するわけではなく、いずれも恒常性を表す。両者は、「存在する」と「存在している」の関係と同じであるといえよう。

(2) シテイタ形式

地誌論述文における「そびえる」が恒常性を表すとすれば、過去形はないはずであるが、実際は、わずかながら「そびえていた」の例が見られる。これらは「かつて」「～まで」などを伴って、〈過去の長期的存在〉を表している。

こうした現象は、やはりテクストタイプと関係がある。ノンフィクションである地誌論述文では、書き手の発話時を基準として、過去形はダイクティックな過去の意味を実現するの

である。

13）東京湾観音が立つ富津市の丘陵の一画に、かつて浅間山という小高い山がそびえていた。この山は７１年から、対岸にある川崎の日本鋼管扇島製鉄所の埋め立て用に削られ始め、いまは標高２００メートルあった山の跡形すらみられない。（朝日新聞 1992/12/15）

14）県の最北端で、利根川と江戸川が分流している。江戸時代には水上交通の要衝として関所があり、１８７１（明治４）年に藩が廃止され、解体されるまで関宿城がそびえていた。その本丸跡から約５００メートル北に、かつての天守閣を再現した「県立関宿城博物館」が１９９５年に完成した。（朝日新聞 2009/12/3）

15）徳島刑務所は一八七〇年（明治三年）、新町川沿いの徳島市塀裏町に「徒刑小屋」が建てられたのが始まりとされる。まもなく「徳島監獄」と名前が変わり、八五年（同十八年）に同市出来島町に移転。四年後には新しい獄舎が完成した。監獄の敷地は赤れんがの塀で囲まれ、中心には六角形の見張り台がそびえていた。塀の前には助任川や新町川に通じる堀があり、干潮時には水位が下がって悪臭がすることもあった。繁華街からそう遠くない場所だが、人通りはまばらだったという。（朝日新聞 2000/1/5）

5.4 体験的ノンフィクションのテクスト―紀行文・ルポルタージュ―

体験的ノンフィクションのテクストである紀行文・ルポルタージュでも、「そびえる」には、シタ形式以外の３つのアスペクト・テンス形式の使用があるが、完成相よりも継続相形式が多くなり、特に継続相過去形が頻繁に用いられるようになる。同じノンフィクションのテクストでも、体験的と非体験的とでは、「そびえる」のアスペクト・テンス形式の用いられ方は大きく異なるのである。以下、用例の多かった継続相形式の方から記述する。

5.4.1 継続相形式

(1) シテイタ形式

ノンフィクションである紀行文・ルポルタージュは、書き手の発話時が存在し、過去形はダイクティックな過去の意味を実現するのであるが、このタイプのテクストに現れる継続相過去形「そびえていた」は、地誌論述文における例 13～例 15 のような〈過去の長期的存在〉とは異なる意味を表す。

16）駅から広い国道を十分ほど歩くと、住宅街に登山口の小さな標識があった。良く踏みならされた、程良い傾斜の登山道が続いている。緑の若葉が日に輝く。一時間ほどで神主山に着いた。赤薙山から女峰山、小真名子山、大真名子山、堂々とした男体山へと続く日光連山が近くにそびえていた。日光市街も一望できた。更に一時間ほどで鳴虫山。神主山からアップダウンが多くなり、少々きつかった。（朝日新聞 1999/6/10）

17）河原町北村の林道沿いで「大カツラ」と書かれた看板を見かけ、車を走らせた。人気のない道路沿いに、カツラの木は堂々たる姿でそびえていた。四方に伸びる枝と枝の間は三十メートル以上。幹は根元からいくつにも分かれ、十本ほどの木がくっついたようだ。大人が何人いたら、幹に手を回すことができるだろう。(朝日新聞 2001/2/2)

18）車で県東部の海岸を走った。道路から見る春の海は、青く澄んでいて、心まで広々としてくるようだった。大きな道路から海辺に向かう小道に折れ、浜辺に近付いていく。すると、視界がだんだん狭まってくることに気付いた。浜辺に立つと、見上げるようなテトラポッドの山が、威圧感を持ってそびえていた。水平線がその無愛想な灰色の肌に分断されている。(朝日新聞 1997/4/25)

これらの過去形は、「富士山は美しかった。」と同じように、記憶の中にある過去の体験を振り返って確認するというムード的な用法と理解すべきであろう。ダイクティックな過去の出来事を提示しうる体験的ノンフィクションであっても、動詞「そびえる」の表す存在や配置関係は恒常的なものなので、過去形はダイクティックな過去のテンス的意味を実現できず、〈体験的確認〉というムード的意味が前面に出るのである。

なお、この用法では、文脈には、書き手の評価（二重下線部分）が現れることが多い。「浜辺に立つと」のような条件節もしばしば現れ、発見の場面を設定するようになる（例 18)。

体験的確認を表すという点では、次の例も同じであるが、場所を表すニ格補語ではなく、空間的配置関係を表す後置詞句を伴っている。「そびえる」が表す空間的配置関係には、例 11、12、19 のような垂直方向の位置関係もあれば、例 20 のような前景と背景の位置関係もある[注10]。体験的テクストでは、このような空間的な位置関係を表すことが多くなってくる。

19）雪をかぶった、標高１８７８メートルの袈裟丸山が、澄んだ青空に向かってそびえていた。白と青のコントラストが目に焼け付くよう。雪が日差しを、キラキラとはね返す。その中で、ミズナラやアカヤシオは、春の芽吹きに備えて、力を蓄えている。カモシカ、サルなど動物も多いというが、彼らもどこかで、ひっそりと春を待っているに違いない。(朝日新聞 1989/2/15)

20）見上げると、暑寒別岳に連なる山々が、青空の向こうに白くそびえていた。新十津川町の山あいの牧場には、雪がまだうずたかく残っている。「これでもずいぶん解けたんですよ」雪の量に驚いていると、阿部登さんはにっこり笑ってそう言った。(朝日新聞 2001/4/16)

注10 次の例の「枝越しに」は存在の場所ではなく、どの位置から見えるかということを表している。「山本周五郎が甲斐を主人公にして書いた「樅ノ木は残った」に出てくる樅の大木があり、１５分ほどで着いた。枝越しに、白銀の蔵王連峰がゆったりとそびえていた。」（朝日新聞 2005/4/9）

(2) シテイル形式

体験的ノンフィクションのテクストにおいて、体験した過去の一連の出来事を提示するのに継続相非過去形「そびえている」を使う場合がある。非過去形「そびえている」は過去のことを今目の前にあるように描き、〈臨場性〉という文体的効果のために使用されると考えられる。臨場性とは、現場的同時進行性の効果であり、出来事展開の現場のない非アクチュアルなテクストにおける〈恒常性〉と鋭く対立する。

体験的確認というムード的意味と臨場感という文体的効果の違いはあるが、このテクストにおいては、継続相の過去形と非過去形は置き換え可能である。例 21、22 は書き手の評価を伴う例であり、例 23 は発見の場面を設定する条件節（「～と」）を伴う例であり、例 24 は空間的な位置関係を表すニ格補語を伴う例である。

21）神社に参拝し、そこからゆっくりと落葉が敷き詰められた階段を上る。樹齢７００年を誇るスギの大木が、威張ったようにそびえている。川のせせらぎ、静かな森、滝を落ちる水音、落葉を踏むかすかな足音。突然、雨が降り出した。冷たい晩秋の雨だ。（朝日新聞 2008/11/1）

22）早朝６時、快晴の中を野口五郎岳へ登る竹村新道から展望台を目指した。小屋の裏手から、いきなり急登が始まり、３０分くらいで到着。眼下に高瀬渓谷が広がり、正面には朝日を浴びた北鎌尾根の独標が見える。槍ケ岳、小槍が他の山々を圧倒する迫力でそびえている。（朝日新聞 2003/1/10）

23）朝早く自宅を出て、午前１１時５０分に上高地に着いた。真夏の混雑はないが、軽装で気楽な表情の人々が多かった。昼食を取って河童橋へ向かう。梓川の清流に感動し、見上げると穂高の山々が雪をかぶってそびえている。息をのむような眺めに「上高地はすてきやな！来てよかった」と仲間と言い交わし明神池へ。（朝日新聞 2005/5/28）

24）日本から来た新聞記者であることを告げ、名刺を出す。「パスポートを」パスポートを渡すと、１人がパトカーに戻って無線で連絡を取りはじめた。１人は私から離れない。２０１１年１１月、英国西海岸のカンブリア。見渡す限りの牧草地だ。羊たちが草を食べる風景の中に、およそ場違いな巨大な煙突や球形の建造物がそびえている。（朝日新聞 2012/2/23）

このテクストにおける継続相形式には、ムード性や文体的効果のほかにもう一つ重要な機能がある。上記の例 16～例 24 をみると、「着いた」「見上げると」「上る」「見える」などの先行文脈に現れる動作、知覚と「そびえる」の継続相形式の表す現象は、同時的である。つまり、これらの継続相形式は、他の出来事あるいは知覚体験との「同時性」というタクシス

的意味[注11]を表すために使用されていると考えられる。次に述べる、「継起性」を表す完成相とタクシス的意味において対立しているのである。こうしたタクシス的機能の有無は、アクチュアルなテクスト（紀行文・ルポルタージュ、外的出来事提示部分）と非アクチュアルなテクスト（地誌論述文、解説部分）との重要な対立点でもある。

5.4.2 完成相スル形式

多くはないが、体験的ノンフィクションには、完成相非過去形「そびえる」も現れ、継続相非過去形「そびえている」と同じように、臨場性という文体的効果を生じていると考えられる。

25）東一番丁通をさらに進み、ふと見上げると巨大な赤ちょうちんが見える。右手には鳥居に見立てた赤い柱がそびえる。そこを右折。しばらく歩を進めると、すぐ左手に今度は本物の赤い鳥居が見える。小道を進むと、高いビルに囲まれる中、ひっそりと野中神社があった。（朝日新聞 2007/9/29）

26）昔にタイムスリップしたような駅から歩き出した。駅前のロータリーを右折、踏切を渡り、左に旧金成町役場（現・栗原市金成総合支所）を見ながら北上する。右手一面に広がる田んぼの向こうに、東北道と東北新幹線の高架が見える。左を向くと、雪化粧が残る栗駒山がそびえる。そんな風景を楽しみながら２０分も歩くと、国道４号に出た。歩道橋を渡り先へ進む。（朝日新聞 2006/3/25）

27）ゆっくりこぎながら、木々が茂って周りを包み込むような両岸の山々を眺め、響き渡るセミの鳴き声に耳を澄ませた。１０分ほどのんびりしていると、勢いよく流れる水音が聞こえてきた。白いしぶきが上がり、ごつごつとした岩が目の前にそびえる。パドルを水に突き刺しながら、ラフトを岩間の流れに突入させていく。急流に入った瞬間、ラフトと一緒に体も前のめりになり、速度が一気に増した。（朝日新聞 2007/9/8）

これらの例で「そびえる」が使われているのは、「継起性」というタクシス的意味を表すためではないかと思われる。つまり、筆者の移動によって、周りの景色が次々と変わっていき、筆者の視野に突如大きな物体が出現したということを「そびえる」という現象に擬して表現しているということである。つまり、紀行文・ルポルタージュでは、動詞「そびえる」の完成相と継続相は「継起性」「同時性」というタクシス的意味の違いを表し分けている。

注11 出来事間の「継起性」「同時性」のような時間関係をタクシスと呼ぶ。日本語では、「継起性」は動詞の完成相によって、「同時性」は動詞の継続相によって表される（工藤 2014 を参照）。本研究では、知覚体験も一種の出来事と見なし、知覚体験の継起性・同時性もタクシス的意味と捉えている。

5.5 フィクションのテクスト—小説の地の文の解説部分—

以下、フィクションのテクストとして小説の地の文を取り上げる。まず、非アクチュアルな背景的な説明を行う部分である小説の地の文の解説部分には、地誌論述文の場合とは違って、ほぼ継続相形式のみが現れる[注12]。非過去形の場合も過去形の場合もある。

28）一応うやまった言葉を使ったのは、ひどい身なりをしているものの、相手が両刀を腰に帯びた武士だったからだが、口調は厳しかった。海坂藩の城は、正面口にあたる城壁の下を水深の深い川が横切り、そのまま濠の役目をしている。築城のときに、前からあった川の底を浚い、石塁を積んで、そのように利用したのである。幅十間ほどの川に橋が架けられ、橋の手前に木戸、向う岸にいかめしい大手門がそびえている。この正面木戸を加えて、城の周囲には、十二の木戸が配られている。（竹光始末）

29）三週間前、ダウンタウンから少し離れた由緒ある教会で、日本語学校の同僚や、白人将校たちに祝福されて式を挙げたのだった。ミネソタ州は、スカンジナビア半島と気候風土がよく似ているせいか、ノールウェー、スウェーデンなど北欧系、次いでドイツ系の移民が多く、町には石造りの荘重な教会の塔がそこここに聳えている。（二つの祖国）

30）ソフィーは戸口に立ったまま、長方形の室内をしばし見渡した。ここも柔らかな赤い光に包まれている。〈国家の間〉はこの美術館の数少ない袋小路のひとつであり、グランド・ギャラリーの中ほどに孤立して通り抜けができない。唯一の出入口となるこのドアの向かいの壁には、高さ十五フィートのボッティチェルリの絵がそびえていた。その手前には、寄せ木張りの床の中央を占める形で、大きい八角形のソファーが置かれている。ルーヴル最大の財産を鑑賞しながら脚を休められるので、多くの入場者にとってありがたい憩いの場だ。（ダ・ヴィンチ・コード）

31）土佐長岡郡の奥に本山と云う処がある。今は町制を布いて町と云うことになっているが、昔は本山郷と云って一地方をなしていた。四国三郎の吉野川が村の中を流れて、村落のあるのはそれに沿った僅かばかりの平地で、高峰駿岳が一面に聳えていた。その本山に吉延と云う谷があって、其処には猪とか鹿とか大きな獣がいるので、山猟師をやっている者で其処へ眼をつけない者はなかったが、しかし、その谷には時どき不思議なことがあるので、気の弱い者は避けて往かなかった。冬の初めであった。半兵衛と云う猟師は鉄砲と係蹄を持って吉延の谷へ往った。（山の怪）

注12 小説の地の文には完成相「そびえる」「そびえた」の用例も１例ずつあった。「いかにも屈強なディフェンダーという体つきの「ラーヨ」の少年が目の前にそびえる。こいつも安ワインで酔っぱらった口だ。」（龍時）、「それは実際その通り、向ふの黒い四つの峯は、四人兄弟の岩頸で、だんだん地面からせり上って来た。楢ノ木大学士の喜びやうはひどいもんだ。「ははあ、こいつらはラクシャンの四人兄弟だな。よくわかった。ラクシャンの四人兄弟だ。よしよし。」注文通り岩頸は丁度胸までせり出してならんで空に高くそびえた。一番右はたしかラクシャン第一子。」（楢ノ木大学士の野宿）これらの用例における完成相形式の「そびえる」は運動動詞として使用されているようであるが、このような用法はかなり特殊である。

これらの解説部分では、主筋となる物語世界内部の出来事の展開の外にある背景的な情報が提示されていて、ここに現れる継続相形式は、恒常的な空間的配置を表している。「いかめしい」のような評価や視点の表現を伴うことがあるとしても、誰の評価・視点であるかは問題とならない。ここでは、非過去形と過去形のいずれを使ってもよい。実際、例 30 では、同じく空間的配置を表す「そびえていた」を述語とする文の後続文―「大きい八角形のソファーが置かれている」が非過去形になっている。恒常的であっても過去形が使えるのは、書き手の発話時を基準とする事象の時間的位置づけが存在しないフィクションのテクストであるため、過去形はダイクティックな過去の意味を実現しないからである。また、非過去形であっても臨場性がないのは、非アクチュアルな背景的説明であるからである。

ところで、同じ非アクチュアルなテクストでも、地誌論述文では完成相「そびえる」が現れるが、小説の地の文の解説部分には継続相しか現れないのはなぜであろうか。恒常性を表す非アクチュアルな解説部分は出来事間の同時性という時間関係を表す必要がない。しかし、読み手を物語世界に引き込む効果を得るのに、読み手の時間と場面の時間との同時進行性を表す必要がある。こうした広い意味での同時性を表すのに継続相が選択されたのではないかと思われる。例 28、30 の文脈に現れる「配られている」「置かれている」もそうであるが、実際に、「そびえる」以外の空間的配置動詞も、解説部分において継続相が使用されることが非常に多い。

5.6 フィクションのテクスト―小説の地の文の外的出来事提示部分―

小説の地の文の外的出来事提示部分でも、ほぼ継続相形式のみが現れる。

(1) 継続相シテイル形式

外的出来事提示部分に現れる継続相非過去形は、作中人物の視野にある情景を描き出している。次に述べる過去形の場合とは違って、作中人物の知覚体験を対象化せず、知覚体験そのものとして内的視点のまま捉えている。「白い」「黒々と」といった修飾語は、作中人物の知覚が捉えた特徴を表している。また、先行文脈に描かれた出来事との間の「同時性」というタクシス的意味も成立している。

32)「…」クレオパトラも、言葉につまる。びゅーっ。風が吹き抜けていく。かなり強い風だ。よく見ると、そこは断崖の上だった。眼下には、密林がひろがり、その彼方には白い山々がそびえている。「ここはどこ？あの白い、高いものはなあに？」(ナイルの恋)

33)「おっ」と云ったは右近丸で、ピッタリ足を止めたが、声のした方へ眼をやった。大森林が聳えている。月光もその中へは射し込まない。宏大な城の鉄壁のように、ただ黒々と聳えている。気強とは云っても女である、民弥は思わず身顫いをしたが、「右近丸様！」と寄り添った。(南蛮秘話森右近丸)

(2) 継続相シテイタ形式

上で見た継続相非過去形の例に対して、過去形の例では、作中人物の知覚体験を対象化し、外的視点から捉えなおしている、つまり、外的視点化が起こる。次のような例がそのようなものである。この場合も、同時性のタクシス的意味が成立している。また、ここでも、「黒く」や「ひっそりと」といった修飾語が使用されている点に特徴がある。

34) 「一時間も待ってたんやわ」と紀代子は半泣きのまま、寄り添うて来た。並んで歩いた。夜がするすると落ちて、瓦斯燈の蒼白い光の中へ沈んで消えていた。美術館の建物が小高い丘の上に黒く聳えていた。グランドではランニングシャツを着た男がほの暗い電燈の光を浴びて、影絵のように走っていた。藤棚の下を通る時、植物の匂いがした。紀代子は胸をふくらました。時々肩が擦れた。豹一にはそれが飛び上るような痛い感触だった。(青春の逆説)

35) オルガンティノは翌日の夕も、南蛮寺の庭を歩いていた。しかし彼の碧眼には、どこか嬉しそうな色があった。それは今日一日の内に、日本の侍が三四人、奉教人の列にはいったからだった。庭の橄欖や月桂は、ひっそりと夕闇に聳えていた。ただその沈黙が擾されるのは、寺の鳩が軒へ帰るらしい、中空の羽音よりほかはなかった。(神神の微笑)

ただし、次のような例になると、作中人物の視野にある情景であるとはいえなくなっている。霧雨という自然現象と相まって、「そびえる」という一時的な現象が実現しているように描かれていて、外的出来事と同化したものと考えられる。このような例は動詞「そびえる」には少ないと思われる。

36) 住いから少し離れた通りに、かっぱらったシルビアを置き去りにして、蘭馬は霧雨の中を、近くのパブに入った。新都市開発に絡んで暗躍した地上げ屋に買収され、ほとんどのビルが無人化したゴースト・タウンともいうべき一角の中で、この店だけは、わずかな住人や新住人―ホームレス相手に、朝から賑わっている。結局、予算調整の不手際から開発計画は中止となり、次々に放棄されたビルは、それこそ幽霊の棲家にでもなったかのように、うす暗い雨の世界に、ひっそりとそびえていた。(紅蜘蛛男爵)

6. 考察結果のまとめ

以上の考察結果をまとめると、以下のようになる。

表 5 テクストタイプと「そびえる」のアスペクト・テンス形式の意味との相関性

	完成相	継続相	
	そびえる	そびえている	そびえていた
①地誌論述文	恒常性（存在動詞化）	恒常性	過去の長期的存在
②紀行文・ルポルタージュ	臨場性（継起性）	臨場性（同時性）	体験的確認（同時性）
③小説の地の文の解説部分		恒常性	恒常性
④小説の地の文の外的出来事提示部分		知覚体験性（同時性）	知覚体験の対象化（同時性）

空間的配置動詞「そびえる」の完成相（スル形式）は、フィクションのテクストには現れない。一方、ノンフィクションのテクストにおいては、非アクチュアルな非体験的ノンフィクション（地誌論述文）の場合は、恒常性を表し、存在動詞化が進んでいる。アクチュアルな体験的ノンフィクション（紀行文・ルポルタージュ）の場合は、〈臨場性〉という文体的効果として使用され、タクシス的意味（継起性）も表す。

また、継続相の意味・機能もテクストタイプの違いによって一様ではない。非アクチュアルなテクスト（地誌論述文、解説部分）では、継続相形式は恒常性を表す。ただし、ノンフィクションかフィクションかで過去形の意味に違いが出る。ノンフィクションである地誌論述文では、書き手の発話時が存在するため、シテイタ形式は〈過去の長期的存在〉を表すが、フィクションである小説の地の文の解説部分では、過去形はダイクティックな過去を表さず、非過去形と同じように恒常性が表される。アクチュアルなテクスト（紀行文・ルポルタージュ、外的出来事提示部分）になると、ノンフィクションである紀行文・ルポルタージュでは、シテイル形式がスル形式と同じように「臨場性」を表し、シテイタ形式は〈体験的確認〉を表す。フィクションである外的出来事提示部分では、シテイル形式は作中人物の「知覚体験性」を明示し、シテイタ形式では、知覚体験の対象化＝作中人物の視点が起こる。これらの継続相形式にはタクシス的機能（同時性）もある。

つまり、動詞「そびえる」は、非アクチュアルなテクスト（地誌論述文、解説部分）では客観的な用法が中心となり、アクチュアルなテクスト（紀行文・ルポルタージュ、外的出来事提示部分）では、ムード性、文体的効果、視点、タクシス的機能が前面化した用法が中心となるといえる。空間的配置動詞「そびえる」は、非アクチュアルなテクストに現れて恒常性を表すのが基本的であるが、アクチュアルなテクストでは、書き手や登場人物の捉え方や他の出来事との時間関係が浮上してきて、主観的な側面が前面化するのである。

こうして、動詞「そびえる」の完成相と継続相の意味・機能は、テクストとの相互作用の中に実現することが明らかになった。

7. おわりに

空間的配置動詞「そびえる」をめぐっては、金田一（1950）ではスル形式がないとされて

いるが、影山（2012）では、シテイル形式もスル形式も存在するという新たな事実を提示した。さらに、影山は、知覚可能性や時制の混用、場所格の必須性などに関して重要な指摘を行っている。これらの指摘の妥当性を認めたうえで、シテイル形式とスル形式の対立を事象叙述と属性叙述の違いに求める影山の主張に対する筆者の見解を示すならば、以下のようになる。まず、事象叙述とは何かという問題がある。自然物や建造物がそびえたりそびえるのをやめたりするわけではないから、恒常性に対する一時性ではありえない。したがって、影山のいう事象叙述は、知覚体験の一時性のことであると理解しなければならない。そのように理解すると、影山は、非体験的・非アクチュアルなテクストにおけるスル形式の意味特徴と、アクチュアルなテクストにおけるシテイル形式の意味特徴を対比して一般化していることになる。これに対して、本稿では、テクストとの相互作用によって、恒常性という客観的用法と各種の主観的用法が分化するとし、スル形式とシテイル形式の対立も、テクストタイプごとに検討した。その結果、この対立は、恒常的か否かということではなく、存在動詞化やタクシスに関するものであるという結論を得た。

本稿は終止述語になる場合に限定し、連体の位置の「そびえる」については言及していない。連体の位置では、スル形式とシテイル形式の対立よりも、スル形式とシタ形式の対立が問題となると思われる。また、「そびえる」以外に、「点在する」「林立する」「隣接する」「横たわる」「並ぶ」「たつ」なども空間的配置動詞として捉えられるとき、スル形式の使用が見られる[注13]。「林立する」などは地誌論述文においてシタ形式も見られるというように、空間的配置動詞の間のアスペクト・テンス形式の用いられ方に相違点が見られる。調査対象の範囲をさらに広げて、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能の全体像をより一般的なかたちでまとめていくことが今後の課題である。

[注13] たとえば、動詞「たつ」には運動動詞としての用法と空間的配置動詞としての用法があるが、後者においても、完成相が現れる。「多治見修道院は、土岐川が大きく曲がり込んだ付近の、なだらかな丘陵地に立つ。岐阜県多治見市緑ケ丘にある。赤い屋根、白い壁。木造の３階には屋根窓が並ぶ。」（朝日新聞 2012/10/31）こうした例では、「そびえる」と同様に、存在動詞化が起こっていると思われる。

第五部

結　　論

第 7 章
おわりに

1. 本研究が明らかにしたこと

動詞の語彙的な意味（カテゴリカルな意味）は、動詞の文法的な側面に働きかけ、その文法的な意味・機能を規定する。工藤（1995）などの先行研究においてすでに明らかにされているように、《運動》というカテゴリカルな意味を表す典型的な動詞は、述語用法において、アスペクト・テンス形式が本務を果たして時間的な意味を表し、基本的なムード・テンス・アスペクト体系が成り立つ。しかし、動詞が《状態》《存在》《特性》《関係》や《空間的配置》といったカテゴリカルな意味を表すとき、アスペクト・テンス形式の文法的な意味や機能は変容する。アスペクト・テンスという文法的なカテゴリーは、運動動詞のためにあるのであり、恒常的な事象を表す動詞にはテンスは不要であり、静的な事象を表す動詞にはアスペクトは不要である。形容詞述語や名詞述語には、そのようなことが言える。だが、恒常的な事象や静的な事象を表すとしても、動詞である以上、アスペクト・テンス形式の選択は義務的である（スル・シタ・シテイル・シテイタから 1 つを選ぶ必要がある）。その際、特性動詞のように、形式の固定化が進行する場合もあるが、多くの場合、複数のアスペクト・テンス形式が維持され、本来的な意味・機能とは違った形で使い分けられている。その際の使い分けには、動詞の語彙的な意味という内的要因だけでなく、構文論的環境やテクスト的機能などの外的要因もかかわっている。そして、その要因は、動詞のタイプごとに大きく異なっている。

まず、《状態》は、《運動》と同じように、時間的な限定を受けている一時的な現象である。しかし、状態動詞のプロトタイプは人間の感情・感覚・知覚のような内面的な現象を表すものであり、運動動詞が表すような外的な現象と異なる。このような語彙的な意味の特殊性を要因として、状態動詞のアスペクト・テンス対立がムード性・人称性と相関し、新たな MTA 体系が構築される。その典型的なあり方は、工藤（1995）などの先行研究でも記述されているが、これらの動詞の MTA 体系は一様ではない。本研究では、感情・感覚・知覚を表す状態動詞は、MTA 体系のあり方によって、５つのグループに分かれることを明らかにした。このグループ化は、感情・感覚・知覚といった語彙的な意味の分類とは直接対応しない。

続いて、《特性》《空間的配置》を表す動詞は、《運動》《状態》を表す動詞と違って、

時間的限定性のない恒常的な特徴を表すため、アスペクト・テンス形式は、時間的な意味の対立を表しえず、アスペクト・テンスから解放されている。これらの動詞では、形式の固定化が進んでいる。

特性動詞のアスペクト・テンス形式の使用実態を調査した結果によると、特性動詞は、終止用法ではシテイル形式への固定化が進行し、連体用法では多くがシタ形式である。ただし、終止用法では一部の特性動詞にスル形式の使用が見られ、連体用法でもシテイル形式も少数ながら見られる。そこで、終止用法におけるそれらの動詞のスル形式とシテイル形式の使い分け、そして連体用法におけるシタ形式とシテイル形式の使い分けが問題となる。終止用法については、テクストタイプと関わって、人・物の特徴を発話現場の具体的な根拠を通して評価的な判断をする際には、シテイル形式が使用される傾向が見られる。つまり、主体の特徴に対する確認の仕方を明示するような機能がシテイル形式にはあると考えられる。そして、連体用法では、シタ形式は名詞の指し示す人・物の範囲を〈限定〉する規定語的な機能が中心となるのに対して、シテイル形式は〈対比関係〉〈主体的なかかわり〉など、主観的な特徴づけに使われやすく、述語的な機能が中心となる。つまり、特性動詞のアスペクト・テンス形式は、確認の仕方や構文的な機能を表し分けるために利用されているのである。

空間的配置動詞も特性動詞と同様に、終止用法に基本的にはシテイル形式が使用されるが、スル形式の使用も見られ、その出現の条件と形式の使い分けが問題となる。代表的な動詞である「そびえる」に関しては、特にテクストタイプの観点が重要である。「そびえる」の継続相形式は、あらゆるテクストタイプに現れるが、完成相形式（ただし、スル形式のみ）は、ノンフィクション（地誌論述文、紀行文・ルポルタージュ）にしか現れない。また、同じノンフィクションであっても、スル形式の意味・機能は異なり、非体験的なテクストである地誌論述文では恒常性を表し、存在動詞化が進んでいるのに対して、体験的なテクストである紀行文・ルポルタージュでは〈継起性〉のタクシスとして、〈同時性〉を表すシテイル形式と対立している。また、フィクションである小説の地の文では継続相のみであるが、解説部分では恒常性を、外的出来事の提示部分では知覚体験性を表す。テクストタイプを、フィクション・ノンフィクションおよびアクチュアル・非アクチュアルという 2 つの基準によって分類すると、前者の基準は完成相の分布と相関し、後者の基準は、客観的な用法（恒常性）が中心となるか、あるいは主観的な側面（ムード性、文体的効果、視点、タクシス的機能）を前面化させるかという意味・機能と相関している。

以上のように、動詞が《運動》という典型的な意味から外れて《状態》《特性》《空間的配置》などの意味を表すとき、アスペクト・テンス形式は、客観的な時間的な意味を表すものから、話し手の主観的な捉え方を表すものへと移行するという現象が随所に見られるようになるのである。完成相と継続相、過去形と非過去形のいずれが主観的な意味を担うようになるかは、動詞のグループによって異なる。

2. 今後の課題

最後に、本研究で扱えなかったことや今後の課題について述べておく。

本研究では、《存在》《関係》を表す動詞のアスペクト・テンス形式については記述を行うことができず、《状態》を表す動詞も、感情・感覚・知覚を表すものに限られている。また、空間配置動詞では、「そびえる」しか記述できなかった。

このうち、特に空間的配置動詞に検討課題が多い。これは、時間的限定性の観点から取り出したものではなく、改めて、時間的限定性との関係を考えなければならない。本研究では、空間配置動詞には、「存在の様態」を表すものと「位置関係」を表すものがあることを指摘したが、このことから、空間配置動詞は、存在動詞と関係動詞に分属する可能性が高い。

空間配置動詞については、運動を表す動詞からの移行が多いという問題もある。これについては、認知言語学でさかんに議論されているが、移行の実態や条件については、さらに研究する余地があると思われる。

さらに、《状態》《存在》《特性》《関係》といった意味の領域には、動詞述語、形容詞述語、名詞述語が共存し、類義語として競合する場合もある。これらの領域における品詞の分布を調査し、これらの領域に動詞が存在する動機づけを探ることも、今後の課題である。オノマトペが述語を構成するときの意味とアスペクト・テンス形式の分布なども、興味深い研究課題である。

本研究に使用した資料一覧

1. 電子化資料

青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）
朝日新聞記事データベース（朝日新聞社）
現代日本語書き言葉均衡コーパス（国立国語研究所）
CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊（新潮社）
伴一彦シナリオ（https://www.plala.or.jp/ban/）

2. 小説類

『1Q84』村上春樹、『D の複合』松本清張、『愛しい女』三浦哲郎、『蒼い描点』松本清張、『影の地帯』松本清張、『白い巨塔』山崎豊子、『点と線』松本清張、『眼の壁』松本清張、『燃えよ剣』司馬遼太郎、『理由』宮部みゆき、『龍は眠る』宮部みゆき（以上新潮文庫）
『恋歌』五木寛之、『三国志』吉川英治、『死者を笞打て』鮎川哲也、『鳴風荘事件 殺人方程式Ⅱ』綾辻行人、『放課後』東野圭吾（以上講談社文庫）
『愛を乞うひと』下田治美、『御宿かわせみ』平岩弓枝、『影の告発』土屋隆夫、『象徴の設計』松本清張、『戦火と混迷の日々』近藤紘一 、『だりや荘』井上荒野、『てのひらの闇』藤原伊織、『メトレス愛人』渡辺淳一（以上文春文庫）
『赤いこうもり傘』赤川次郎、『アラビアの夜の種族』古川日出男、『異型の街角』森村誠一、『女が見ていた』横溝正史、『金田一耕助ファイル 17 仮面舞踏会』横溝正史、『金融腐蝕列島』高杉良、『血液型殺人事件』吉村達也、『戦国秘譚 神々に告ぐ』安倍龍太郎、『蕎麦屋の恋』姫野カオルコ、『旅涯ての地』坂東眞砂子、『テロリストのパラソル』藤原伊織、『花の降る午後』宮本輝、『花夜叉』山藍紫姫子、『塙侯爵一家』横溝正史、『まぼろしの怪人』横溝正史、『無明剣、走る』西村京太郎（以上角川文庫）
『鳩笛草』宮部みゆき、『寝台特急（ブルートレイン）殺人事件』西村京太郎、『日本アルプス殺人事件』森村誠一（以上光文社文庫）
『百億の昼と千億の夜』光瀬龍（早川書房）
『謎解きはディナーのあとで』東川篤哉（小学館文庫）
『現金強奪計画 ダービーを狙え』西村京太郎（双葉文庫）
『白夜行』東野圭吾（集英社文庫）

参考文献

尾上圭介編（2004）『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店

岩男考哲（2008）「叙述類型研究史」『叙述類型論』くろしお出版

奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」『教育国語』45（『ことばの研究・序説』むぎ書房 1984 所収）

奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」『国語国文』8（宮城教育大）（『ことばの研究・序説』むぎ書房 1984 所収）

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53・54（『ことばの研究・序説』むぎ書房 1984 所収）

奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』むぎ書房

奥田靖雄（1988a）「時間の表現（1）」『教育国語』94（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1988b）「時間の表現（2）」『教育国語』95（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1988c）「述語の意味的なタイプ」（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1988d）「文の意味的なタイプ―その対象的な内容とモーダルな意味とのからみあい―」『教育国語』92（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1990）「説明（その 1）―のだ、のである、のです―」『ことばの科学 4』むぎ書房

奥田靖雄（1992）「動詞論」（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1993）「動詞の終止形」『教育国語』2-9

奥田靖雄（1994）「動詞の終止形（その 2）」『教育国語』2-12（『奥田靖雄著作集 03 言語学編（2）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1996）「文のこと―その分類をめぐって―」『教育国語』2-22（『奥田靖雄著作集 02 言語学編（1）』むぎ書房 2015 所収）

奥田靖雄（1997）「動詞―その一般的な特徴づけ―」『教育国語』2-25（『奥田靖雄著作集 03 言語学編（2）』むぎ書房 2015 所収）

影山太郎（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店

影山太郎（2009）「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136

影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」『属性叙述の世界』くろしお出版

影山太郎編（2012）『属性叙述の世界』くろしお出版

金水敏（1986）「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院

金水敏（1989）「「報告」についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版

金水敏（1994）「連体修飾の「～タ」について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版

金水敏他（2000）『日本語の文法 2 時・否定と取立』岩波書店
金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15
金田一春彦（1955）「日本語のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X
金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4
工藤真由美（1987）「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
工藤真由美（1993）「小説の地の文のテンポラリティー」『ことばの科学 6』むぎ書房
工藤真由美（1998）「非動的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞』63-1
工藤真由美（2001）「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊言語』30-13
工藤真由美（2002）「現象と本質―方言の文法と標準語の文法―」『日本語文法』2-2
工藤真由美（2004）「現代語のテンス・アスペクト」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店
工藤真由美（2012）「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』くろしお出版
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
工藤真由美編（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて』ひつじ書房
工藤真由美編（2007）『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて』ひつじ書房
工藤真由美・八亀裕美（2008）『複数の日本語 方言から始める言語学』講談社
言語学研究会編（1979）『言語の研究』むぎ書房
言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
国広哲弥（1989）「五感をあらわす語彙―共感覚比喩的体系」『月刊言語』18-11
国立国語研究所編（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
国立国語研究所編（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
呉揚（2015）「空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式とテクスト―「そびえる」の場合―」『日本語の研究』11-1（日本語学会）
呉揚（2016）「感情・感覚・知覚を表す動詞のムード・テンス・アスペクト体系」『日本言語学会第 151 回大会予稿集』
呉揚（2016）「特性動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能」『岡山大学社会文化科学研究科紀要』42
呉揚（2017）「日本語の〈状態〉〈状態動詞〉再考」『岡山大学社会文化科学研究科紀要』43
佐久間鼎（1941）『日本語の特質』育英書院
佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法（改訂版）』恒星社厚生閣
佐藤里美（1997）「名詞述語文の意味的なタイプ―主語が人名詞のばあい―」『ことばの科学

8』むぎ書房
佐藤里美（2001）「テクストにおける名詞述語文の機能―小説の地の文における質・特性表現と《説明》―」『ことばの科学 10』むぎ書房
佐藤里美（2007）「ロシア語の形容詞」『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて』ひつじ書房
篠原和子・片岡邦好編（2008）『ことば・空間・身体』ひつじ書房
周彤（2016）「AN 構造の意味類型及び成立条件」『対照言語学研究』25（海山研究所）
鈴木彩香（2012）「日本語オノマトペ述語の形式について―スル・シテイル・ダの選択基準を中心に―」『日本語文法』12-2
鈴木重幸（1957）「日本語の動詞のすがた（アスペクト）について―～スルの形と～シテイルの形」（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 所収）
鈴木重幸（1958）「日本語の動詞のとき（テンス）とすがた（アスペクト）―シタとシテイタ」（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 所収）
鈴木重幸（1965）「現代日本語の動詞のテンス―言いきりの述語に使われたばあい―」『国立国語研究所 ことばの研究 2』秀英出版
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木重幸（1979）「現代日本語の動詞のテンス―終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい―」『言語の研究』むぎ書房
鈴木重幸（1983a）「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72
鈴木重幸（1983b）「形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトについて」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一巻 国語学編』三省堂
鈴木重幸（1996）『形態論・序説』むぎ書房
須田義治（2009）「現代日本語における状態・特性・関係を表す動詞の連体形」『国語と国文学』86-11
須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
高江洲頼子（2004）「ウチナーヤマトゥグチ―動詞のアスペクト・テンス・ムード」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて』ひつじ書房
高橋太郎（1976a）「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
高橋太郎（1976b）「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
高橋太郎（1983）「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』明治書院
高橋太郎（1985）『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版
高橋太郎（1994）『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
高橋太郎他著（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
田中茂範・松本曜（1997）『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
寺村秀夫（1992a）『寺村秀夫論文集Ⅰ 日本語文法編』くろしお出版
寺村秀夫（1992b）『寺村秀夫論文集Ⅰ 言語学・日本語教育編』くろしお出版
中畠孝幸（1995）「現代日本語の連体修飾節における動詞の形について：ル形・タ形とテイル形・テイタ形」『三重大学人文論叢』12
仁田義雄（2001）「命題の意味的類型についての覚え書」『日本語文法』1-1
仁田義雄（2012）「状態をめぐって」『属性叙述の世界』くろしお出版
仁田義雄（2016）『文と事態類型を中心に』くろしお出版
日本語記述文法研究会編（2007）『現代日本語文法 3』くろしお出版
日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
野田尚史他著（2002）『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店
橋本修（1998）「感覚動詞文と感情動詞文・思考動詞文との相違をめぐって」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』平成 10 年度Ⅱ
樋口文彦（1994）「使用における形容詞の《義務性／偶発性》」『教育国語』2-14
樋口文彦（1995）「発話のなかでの形容詞の機能」『教育国語』2-17
福田嘉一郎・建石始（2016）『名詞類の文法』くろしお出版
藤井正（1966）「「動詞+ている」の意味」『東京大学国語研究室』5（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 所収）
堀川智也（1992）「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』21
本多啓一（2005）『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
マイケル・トマセロ編・大堀壽夫他訳（2011）『認知・機能言語学 言語構造への 10 のアプローチ』研究社
益岡隆志（1987）『命題の文法 日本語文法序説』くろしお出版
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
益岡隆志（2004）「日本語の主題―叙述の類型の観点から―」『シリーズ言語対照 外から見る日本語第 5 巻 主題の対象』くろしお出版
益岡隆志（2012）「属性叙述と主題標識―日本語からのアプローチ―」『属性叙述の世界』くろしお出版
益岡隆志（2013）『日本語構文意味論』くろしお出版
益岡隆志（2016）「叙述類型と名詞文の構造」『名詞類の文法』くろしお出版
益岡隆志編（2008）『叙述類型論』くろしお出版
松本曜（2003）『シリーズ認知言語学入門第 3 巻 認知意味論』大修館書店
眞野美穂（2008a）「状態述語文の時間性と叙述の類型」『叙述類型論』くろしお出版

眞野美穂（2008b）「叙述類型論の研究史」『叙述類型論』くろしお出版
三上章（1953）『現代語法序説 シンタクスの試み』刀江書院
三原健一（2000）「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8
三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
宮崎和人（2001）「動詞「思う」のモーダルな用法について」『現代日本語研究』8
宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房
村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
森山卓郎（2002）『表現を味わうための日本語文法』岩波書店
八亀裕美（2004）「述語になる品詞の連続性―動詞・形容詞・名詞―」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて』ひつじ書房
八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』明治書院
山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版
山梨正明（1999）「外界認知と言葉の世界―空間認知と身体性の問題を中心に―」『日本語学』18-9
山梨正明編・深田智・中本康一郎著（2008）『講座認知言語学のフロンティア 概念化と意味の世界』研究社
吉川武時（1971）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976 所収）
吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
渡辺実編（1983）『副用語の研究』明治書院
Carlson, Gregory N. 1980 Refrence to Kinds in English. Garland Pub.
Givón, T. 2001 Syntax Ⅰ: An Introduction. John Benjamins Publishing.
Leech, Geoffrey N. 1971 Meaning and the English Verb. Longman Group Ltd.（國廣哲彌訳『意味と英語動詞』大修館書店）
Palmer,F.R. 1965 A Linguistic Study of the English Verb. Longman Group United Kingdom
（安藤貞雄訳『英語動詞の言語学的研究』大修館書店）
Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik,J. 1972 A Grammar of Contemporary English. Longman Group United Kingdom
Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik,J. 1985 A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman Group United Kingdom
Vendler, Z. 1967 Linguistic in philosophy. Cornell Univ Pr.